

があつたのだと思つてゐた。大正十四年に四貫島にセツルメントを開いた時、そのあたりが低いので、私は新築する時、街路より約三尺ばかり床板を上げて家を建築したが、それでも床の上約二尺三寸くらゐ浸水して、書棚を下二つ濡らしてしまつた。潮があんまり速かつたので、書物を上の棚に上げる暇も全くなかつたといふことであつた。

私の處から約六丁ばかり海に近い（海岸からは約小一里離れてゐる）恩貴島町方面では、「あ、水だ！」といつた瞬間に、もう床の下に浸水し、私の友人などはカナリヤの箱を持つて二階に上つた瞬間に、床の上二尺ばかり水が覆うて、疊がぶくぶく浮き出したといふことであつた。

それから更に、恩貴島橋を渡つて、住友の經營してゐる北港の住宅地に行くと、その附近の津浪は一層深刻なものがあつた。そこにも私たちはセツルメントの分館を持つてゐて、小さい木造家屋を保育所のために建てて置いたが、僅か五分間のうちに、軒まで高潮がやつて来て、ピアノが顛覆し、風に遊戯室の屋根は吹き飛ばされ、主任保母の住んでゐた家では、浪に壁を打ち破られ、大きなピアノが流されて行方不明になるといふ始末であつた。それもその筈である。その裏には浸漬船が、海岸から十四五丁も押し流されて、住宅地の裏の畑のまん中にぽかんとしてゐる有様であつたから。

權藏ヶ原の漁夫

しかし、まだこれより氣の毒なのは、新淀川の南岸の堤の下で、古トタンを張つて十八家族が、小屋掛けの中に避難してゐる漁夫たちである。私はその人たちの氣の毒な話を聞いた。

朝早く、小松さんは——私はこの人から一時間半くらゐ新淀川の堤の上で話を聞いた——濱に立つた。どうも浪の打ち方が普通と違ふので、をかしいと思つた。そのうちに風は激しくなり、見る見るうちに十八戸の家は全く崩壊し、命からがら堤防まで逃げた。松の樹が三百五十本ばかり生えてゐるが、見る見るうちに半分くらゐ折れたり倒れたりしてしまつた。その松の樹は大抵百年以上も経つた大きなものばかりであつたから、折れたものに攀ぢ登つて、浪の押し寄せてくるのを目の下に見ながら、大丈夫だらうと思つてゐるが、浪は見る見るうちに、一間半くらゐ高い堤防の上に生えてゐる一丈五尺もある松の樹に登つてゐても、まだ頭を七八尺も越えて行くので、松の樹に登つてゐる者は、一人として助かると思つたものはなかつたことであつた。

松の樹の上で約一時間戦つた後、風の方が變つたので、漸く潮が退き出したさうである。奇蹟的に、小松さんも妻も子供も一家五人も凡てが助かり、船は錨とも完全に残り、どうしたことか、自分と息子の自転車が一臺とも浪打際に眞直ぐに立つたまま置かれてあつたことを發見したと小松さんは不思議がつてゐた。小松さんは平素から人に親切にしてゐたので、その報いがあったのだと喜んでゐた。しかし、十八軒の中三十數人浪に溺れて死んでしまつたので、同じトタンの下に寝てゐる者の中に、火葬場から持つて歸つてきたお骨を五つも抱へてゐる氣の毒な漁夫

もあつた。私はさういふ人を見るにつけても全く氣の毒でならなかつた。

船山に登る

新淀川の堤防から西北を見ると、そこに大きな汽船が海岸に坐礁してゐた。私の弟が勤務してゐた尼ヶ崎市初島附近などでは、大きな三千噸級の汽船が、海岸から六丁も丘の上に吹き上げられて、文字通り船が山に上つてゐた。それを曳き下すには、運河を六丁ばかり掘つて、汽船を水に浮かさなければならぬ。何でも、さうするためには、約七萬圓くらゐかかるだらうとのことであつた。

武庫川尻の住宅地はほとんど全滅で、見る影もないほど氣の毒な状態であつた。阪神電車の濱川には、海岸から流れてきた生活用具が、幾百幾千となく、十日間くらゐ引懸つてゐた。そして、何十町歩といふ廣い田野が、潮水のために眞紅になつて、稲が實つてもゐないのに、十一月の收穫を待つやうな色彩を見せてゐた。何でも、あまり被害が大きいのと、そのあたりが別荘地なので、地主たちは、それが新聞に喧傳せられると地價が下ることを恐れて、被害をあまり新聞に報告させないといふことであつた。

櫻島の海岸に出ると、そこらにあつた家も、浸水して押し流されたものが少くはなかつた。天保山の渡船場に出ると、大きな三本マストの帆船が沈没して、ガソリン・ボートの渡航船が、それに引懸りはしないかと思はれるほどで、眞直ぐに帆柱だけ出して沈んでゐた。

築港棧橋に出てみた。ここでも全く驚いた。昔、ここに數千噸の船が横着けになつた時の面影はなく、棧橋の根附はでんぐり返り、その傍に、瑞鳳丸が海の方に傾いて乗り上げてゐた。嘘か眞實か知らないが——これは人から聞いた話なので——この附近にあつた肥料の倉庫は、約二千噸の在庫品を入れたまま、浪と風に押し流されて、約三十間ばかり陸の方へずつてゐるさうである。私はそれがどの倉庫かと捜してみたが、見當らなかつた。

三寶村の全滅

大和川尻の三寶村は一層悲惨であつた。これは、三寶村から辛うじて逃げ出してきた私の友人、大阪愛染園園長富田象吉氏に聞いたことであるから、間違ひないことである。

九月二十一日の朝八時頃、隣の中根さんの家の子供が、富田氏の息子と一緒に、學校へ行かうと誘ひに来てゐた。その瞬間忽ち水が表通りに一杯になつた。そこは海岸から十數丁も離れた處であるので、富田氏はすぐ津浪だと感づいた。それで、早速妻子と隣の嬢ちゃんと女中の四人に、一々流れてきた大きな板を持たせて、奥地へ逃がすことに決心した。しかし、僅か一分間くらゐ後に、もう表の水は脊がたたなくなるほど高くなつたので、一緒に出た妻子の姿をすぐ見失つてしまつた。富田氏は、裏の深い堀を泳ぎ渡つて、二階建の窓から二階へ避難したが、そこも危険

とみたので、女と子供ばかりのその家庭に、板を持って逃げることを勧めた。しかし彼等は、子供が小さいからといって、逃げることを肯じなかつた。それで富田氏は、すぐまた濁水の中に飛び込んだ。そして、大和川の堤防まで浪に押されながら、辛うじて泳ぎ著いた。

しかし、丸裸なので、大阪市内に這入ることも出来ず、そこに流れてきた箆筒の中から女の長襦袢一枚を引き出して、それを着たまま、妻子がどのあたりに漂流してゐるかを堤防の上から見つてゐたさうである。しかし、いくら待つても妻子はやつて来ない。それで彼はもう妻子が全く溺れて死んでしまったことと思ひ込んだ。彼は流れてきた溺死體を一々調べて、これが自分の妻ではないか、あれが我子ではないかと、何時間も見てゐたさうである。

話變つて、富田夫人は夫に別れた後數時間浪にもまれて、斷ち切れた電線の下を潜りながら、やつと大和川の堤防に逃げてきた。そして、そこに出来てゐた救護船に救ひ上げられて、労働者の着る印絆纏一枚を貰つて、午後四時過ぎ大阪天王寺區愛染橋際の石井十次記念保育園まで辿り著いた。すると間もなく、肥料船に移つて助かつた子供と女中が、愛染園まで歸つてきた。それからすぐ、女の長襦袢を着た富田象吉氏も、保育園に、妻子は死んだことと思つて歸つてきた。しかし、彼よりも妻子の方が早く歸つてゐるのを見て、狂喜したといふことであつた。

しかし氣の毒なのは三寶村の住民で、三百五十戸の中、残つた家は僅かの農家と、最近建つた家の極く僅かの部分で、他の八九割は全部木端微塵になつてしまひ、どの木材が自分の家のものか全く見當がつかないほど、他の建築物の材料とごつちやになつて、阪堺電車の線路まで流れ著いてゐたといふことであつた。そこでは、死亡者約三百五十人で、富田氏の隣の中根夫妻は勿論、裏の堀を越えて一度泳ぎ著いた一家族六人も、全滅したといふことを私は聞いた。

西大阪は歎く

四貫島方面では、日本染料會社の浸水のために、約一萬五千人の住宅地が、全部藍色に染まつてしまつた。染料が水に浸つた箆筒まで浸み込んでしまつたので、せつかく水がひいても、罹災者は着る着物一枚無いといふ悲喜劇が行はれた。それになほ氣の氣なのは、正宗土地會社が、四貫島を地上げしない前から、借家を借りて住んでゐた人々の家は、河の脇にあつて、満潮時分は、水面より床が低い處にあつた。堤防が缺損したために、勿論これらの家も水浸りになつたが、水が引いて、四貫島方面の水がそこから河に流れ出した時、染料の水がそれらの家を總て染めてしまひ、九月二十六日頃まで、染料を溶かした壺の中に、これ等の家がわざわざ漬けられたやうな形になつてゐた。そのために、彼等は、家々に再び歸る勇氣もなく、恩貴島小學校に收容せられたまま、机の上で夜具もなしに數日を送つた。辛うじて『大阪朝日』、『大阪毎日』の親切によつて、毛布や蒲團が廻つたが、それも十日目に蒲團は五家族に一枚、毛布は一家族に二枚くらゐの比例で給せられた程度であつた。

あまり長く着のみ着のまま小學校の机の上に寝たものだから、大抵のものは一通り風邪をひいてしまった。それに茶碗を持つてゐるものが少かつた。一戸あたり二箇くらゐしかない家庭もあつた。

十月一日に、彼等はもう辛抱しきれなくなつて、河岸に流れついた流木を拾つて、バラックを建ててしまはうと決心した。それを警察では許さなかつた。大阪市の泣きついたが、大阪市はバラックの必要を認めないと考へたらしい。なほ十日間待てと彼等に云つた。そこで私は、その方面の代表者と三人で、大阪府の當局にあたつてみた。府當局はバラックを建てる意志を持つてゐた。その足でわれらは更に市廳に廻つたが、市社會部は取り合つてくれなかつた。

私は『大阪朝日新聞社』社會事業部の濱田光雄氏を通して、市の意向をきいて貰つた。ところが、市は内務省の意向だと云つてゐると教へてくれた。で、私は内務省社會局に當つてみた。すると内務省社會局では、そんな指令を出した覚えはないとのことであつた。私は思ひあたることがあつた。大阪市の社會事業の執務方針が罹災者救護にまであらはれてゐるのであつた。

經濟的不經濟

今日まで大阪市は、社會事業にあまり金のかからぬことをもつて誇りとしてゐる處である。無料宿泊所を見てもよくわかる。大阪市今宮の無料宿泊所は、最初土間の上に席を敷いただけであ

つた。後に板の臺を作り、土間より少しましになつた。しかし今でも被擁護者が固著しないやうに、出来るだけ粗末な設備がせられてゐる。この精神がこの度の罹災者救助にも現れてゐる。つまり、出来るだけ罹災者に依頼心を起させないやうな方針をとつてゐる。そのため、テントに雨が洩らうと、机の上に十日間寝ようと、市は幾百萬圓の寄附金を受け取つてゐながら知らぬ顔の半兵衛をきめこんでゐる。おそらく、市は最も經濟的に救護事業をやつてのけた後、幾百萬圓が残して、この前、堂島の大火の時弘濟會をつくつたやうな調子で、こんども、市の經常費から出すべきものを、他人の寄附金で賄ふことであらう。罹災者こそ迷惑な次第である。

大阪市の當局者の一人は、罹災者の一人にこんなことを云つた。

「君は、住友の職工ぢやないか。會社の共濟組合からなぜ金を貰はんのだ？」
すると職工は悲しげに答へた。

「日給一圓四十錢や一圓五拾錢貰つて、子供を四人も抱へてゐれば、會社にゐたところで決して樂ではないのです。それに、會社も大きな損害で、動力も止まつてゐるんです。三ヶ月の間だけ、バラックに居らせて下さい。それより以上は決してお願ひしません。」

「考へておく。」

市の當事者はさう云つたきりで、つき離してしまつた。この當事者は、失業救濟についても、同じ意見を持つてゐる人で、「失業者に自殺する者なんか一人もないから、失業保險なんか絶對

に要らない。」と、私に言明したことがあつた。新聞を見ると、翌日大阪市のまん中で失業者が縊死してゐた。

市の當局者がこれであるから、こんどの罹災事業が人間味豊かに運ばれる道理がない。或る場所の罹災者は相變らず古トタンの下に蹲り、雨の日は合羽を蒲團の上に置いて寝なければならぬといふ状態であつた。もし、大阪市の当事者がもう少し罹災民を思ふ心が多ければ、東京市民は、災厄の後、漸く二週間目に募金運動をするやうなへまなことはしてゐなかつたらう。あまりに救護費を出し過ぎるケチな考へが、こんな時に禍ひして、義金を惜しみもなく放り出した同情者の志にどれだけ背いたかしないと私は思ふ。

大阪の当事者は、バラックの後片附が大變だと心配してゐるらしかつた。しかし、町會が責任を持つからやらしてくれと懇願した。それをすげなく追ひ返す勇氣のある当事者こそ、税金を出して養ふには、あまりに官僚的な存在だと私は思つた。

函館の火災は數萬の罹災者を出した。この時にも、バラックに固著せられては困るといふ理由で、六十坪の廣さに仕切一つないバラックを幾十も作り、出来るだけ居辛くして、バラック民を早く追ひたてることに當局者は苦心してゐた。私はそれを見た時、「まあ何といふ情ないことであらう、彼等は、雨露だけを凌がせさへすれば、兒童の心理など無視してもよいと思つてゐるのか。」と憤慨した。そして、こんどもまた、大阪の當局は、この同じバラックの問題で騒いでゐる。

彼等は罹災者を救ふ前から、如何に早く罹災者を追ひ立てればよいかを考へてゐる。あまりに冷酷なその態度に、私は悲しくなつた。

社會事業は、あまり冷酷な態度をとり過ぎると、かへつて不經濟に終るものである。仕切のないバラックは不良少年を生み、地べたの上に寝かされるルンペンには叛逆心を生む。ただその時だけ早く追ひ立てればよいといふ氣持が、大局に於いて經濟的であり得る社會事業を、却つて不經濟に終らせてゐるのではないかと、私は考へさせられた。もしも大阪市がほんとに經濟的社會事業をやりたければ、協同組合を基礎にする社會事業を、うんとやればよいではないか。その勇氣も持ち合せなくて、ただ最少限度の罹災救助費を誇るやうなことでは、二百五十萬の市民を持つ大阪市としては、あまりにも時代離れがしてゐる。徳川時代の社會事業ならいざ知らず、いくらルンペンだからといつて、今なほ地べたの上に寝さすやうな無料宿泊所は、人間と豚とを混同してゐるのではあるまいか。

物質に對する新しい考へ方

私は言葉を持たない。私が今感じてゐる宇宙の不思議を表白するには、たうてい私の言葉は足りない。

私は感ずる——私自身が不思議な存在であることを。それは私が意識する存在であること、不思議である。障子に硝子が切り込んであると同じやうに、意識を通して、内と外とが同時に見える。過ぎ去つた過去と、まだ來ない未來が、意識を隔てて窺ひ知られる。客觀の世界が主觀に吸収され、主觀の世界が客觀の世界に通告出來る。意識の世界に於いては、實在はまことに不思議な形をとる。そこには物があるだけではなく、法則も實在であれば、目的も實在である。選擇も實在なれば、變化性も、生長性も實在である。

存在の哲學から見れば、物質の如きも、法則や目的と同一に取扱はるべき實在であると考へてよからう。

かう考へると、目的が實現性を持つ實在である如く、物質も實現性を持つ實在であると云つて

よからう。實際、物質は實現せられたものである。それは不思議な意味をもつてわれわれに物語る言葉であると考へてよからう。悟り得ないけれども、すべての物質は、神祕な世界から、われわれに物語る言葉である。

英文『日本宗教史』を読む

書かれなくてはならないもので、書かれなかつたのは、日本人みづからの書いた日本宗教史であつた。こんど姉崎正治博士がロンドンで出版せられた英文『日本宗教史』は、今まで西洋人が書いたものに比べて、更に意味深いものであると思ふ。貪るやうに私はこれを読み、日本文で讀む日本宗教史より何だか新しい氣持で、日本に於ける宗教思想の變遷を知ることが出來て非常に嬉しく思つた。全篇二十二篇から成り立つ、米國ハーバード大學の講義が骨子になつてゐるやうだが、まづ私は、英文の流暢なのに感心させられた。この書の中で特にすぐれてゐるのは、佛敎史とキリスト敎史の部分であると私は思ふ。勿論、序文になつてゐる日本民族元祖一般論などでも、ごく正當な學者的立場で書かれてゐるので、一々うなづかせられる。天台及び眞言に關する平明な記述にしても、私は一々うなづくことが出來た。また封建時代の宗教的發達に關しても、實に要領を得てゐる。

姉崎博士にとつて得意ではないと思はれる儒敎の發達史に於いても、私は大いに教へられると

ころがあつた。例へば、日本に於ける王陽明學派の鼻祖といはれてゐる中江藤樹先生とキリスト敎との關係を明かにせられた如きは、やはり姉崎博士でなければ出來ない研究だと私は思つた。井上哲次郎博士の『日本陽明學派の哲學』を見ても、近江聖人が、その根本信仰に於いてキリストの感化を受けたことが明かであるに拘らず、井上哲次郎博士は、強ひて藤樹先生とキリスト敎とを區別せんとせられた如きは、如何にも苦しい書き方である。それを姉崎博士は西洋のキリスト敎の文献から、藤樹が四國で或るキリシタンより霜燒の藥を貰つたことがあるだらうといふ註までして、面白い報告を書いてゐられるが、客觀的に見て、姉崎氏の方が正當のやうに私は思ふ。明治以後の宗教思想發達史に就いても、この書は頗る詳しく記述してゐる。特に私が愉快に讀んだのは、高山樗牛の思想變遷に關する姉崎氏の記述である。文章もよく書けてゐるし、あの時代の思想の流れを熟知してゐられる氏としては、感慨深く書かれたことと私は思ふ。明治、大正以後の部分は随分苦心して書かれたやうであるが、記述を急がれた點もあるやうだ。それでもあれだけに纏められたことは容易でなかつたらうと私は思ふ。

詳しく書けばきりがないだらうが、大掴みに書かれた日本宗教史としては、これ以上を期待することは困難であらう。しかも、各章の終りに、宗教思想が社會的に表現を持つた各方面の感化を面白く並べられてあるだけに、讀んでゐて非常に愉快な氣がする。勿論、姉崎博士は、日本宗教史を出來るだけ明るく美しく見ようとせられたと思はれる節々もないではない。陽明學派が、

佛教排撃に力を盡した理由などは少しも記述してゐられない。しかし、それらの點は別として、この書は、日本を思想的に紹介する上に於いて、實に重大な使命を持つてゐると私は思ふ。ただ難をいへば、もう少し寫真版を多くして、眼に訴へる工夫があつて欲しかつた。例へば、佛教各宗の開祖の寫真を入れるとか、その本山の寫真を挿入してもらふことが出来たらと思つた次第であつた。

それは兎に角として、日本に於ける權威者が、かうした努力を拂はれたことを私は心より感謝するものである。

魂の藝術

國家の存亡と國民精神

一八七一年、獨逸がフランスと戰爭して勝つた時、獨逸は奢つて國全體に贅澤な氣風が漲つたことがあつた。その時、ワンダーフォーゲルといふ、渡鳥とでも譯すべき、質實剛健なる風を尊び、自然に歸ることを主張した青年男女の團體が生れて、衣食住はもちろん、すべて質素にすべきことを宣傳して、戰捷氣分を一時抑へた。その次に起つた世界大戰で獨逸が負けるや否や、この剛健なる精神は更に深刻味を加へて、汽車は四等で藁蒲團もなく、板だけのものになり、學生は苦學して大學に行くといふやうに、國全體に元氣をそそつた。かくして目醒めた獨逸の青年男女は、質實剛健な氣風を作つて國を導いた。これは全く精神力による。

日本人は維新當時の元氣もなく、少し氣抜けしてゐる。戰爭でもあれば元氣が復活するであらうが、平和な時代が続くと、腰をひつからげてやらうといふ元氣がぬけてしまふ。ジョン・ラス

キンはいつた。「時によると、戦争をやつてもいいから、元氣を出さう。ギリシヤが興つたのは戦争によつてであつた。戦争がなければ、國民に元氣が起つて來ない。だから、戦争によつて元氣を返せる。」と。しかし、これは一面の眞理である。質實剛健の氣が衰へたときに、戦争によつても振ひたす方がいいとは、昔からよくいはれたことである。

日本人は、寒い處で戦ふ適應性を缺いてゐる。零下何度といふ處でも、温かい處にゐるのと同じ生活をして、寒さに震へてゐる。滿洲などへ行つても、支那人は一日十三錢で、大きな豆粕を四枚も五枚もかついでゐるが、日本人は理窟ばかりいつて、發展する勇猛心を缺いてゐる。大正七八年の好景氣の夢が、國民精神に浸潤して、しつかりやらうといふ精神がない。藤田東湖はこれを精氣といつたが、士氣といつてもよく、最近ではモラルといつてゐる。丁度噴水の力のやうなものであるが、日本人にはこの元氣がぬけてゐる。わが國の震災の傷手は、經濟的に考へてもさう大したものではなく、僅かに百十億圓であつた。然るに獨逸は戦争によつて千五百億圓の損害をうけ、僅か二億圓をアメリカから貰つただけであるのに、マークの相場がどんどん上つた。日本は獨逸の十分の一も失つてゐないのに、獨逸に比べて元氣がない。國家の存亡は、政治とか經濟によるのでなく、國家全體の元氣による。その元氣を缺いてゐるならば、日本は恐ろしい運命に陥る。

生活に對する製作的態度

しかし、われわれは、或る心理的の元氣によつて外界の境遇に打ち勝つて行ける。それが精氣であり、士氣である。印度のガンヂーは Soulforce と云つた。この Soulforce をわれわれは持たなければならぬ。この力を持ちさへすれば、懦弱に流れようとするあらゆるものを打ち貫いて、前に進む勇氣が出る。これを如何に用ひるかといふことを、私は魂の藝術といつてゐる。

日露戦争以後、日本人は麥を食べなくなつた。それまでは人口の六割まで麥を食べてゐたのであるが、四五年前から麥を食べないで、食糧が足りないといつてゐる。大體日本人は、一年に一石あれば足りるのであるが、今までに米が餘つたといふことは四回しかなかつた。最近になつて、日本の食糧問題は益々窮してきたが、第一白米でなければ食べないといふのは、國民全體が贅澤だからである。米を食べる習慣がついて、自分の家で麥をパンにして食べるとか、支那のやうに高粱をポイにして食べるとかいふ工夫をしない。そして日本は、世界で一番物價が高い國になつた。

着物や住宅についても同じ事がいへる。日本ほど住宅費の高い、着物の値段の高い國を知らない。滿洲では、煉瓦造りの家が日本の木造建築と同じくらの價格で出来る。ところが、日本では東京の本所深川あたりへ行つても、疊一疊が二圓五十錢もする。三年前、ロンドンでは、物價

の高い時であつたが、部屋が十七あつて、月百圓で貸してくれた。ロンドンでは住宅のためなら地價を上げないことになつてゐる。また建築材料に對しても、政府は便宜を計つてゐる。だから月に一ポンド出せば、大きな家が借りられ、四圓も出せば十疊二間くらゐある家が借りられる。日本の婦人は着物を着るのに、六、七本の紐を胸と腰のあたりに巻きつける。そして、走れば、きものの美術的な處が崩れてくる。もう少しこれに對する發見はないだらうか？ 私はそこに、生活に對する創作的態度が必要であると思ふ。小説だけが創作ではない。彫刻や繪だけが創作ではない。生活全體に對して創作的でなければならぬ。人がああいふ着物を着てゐるから自分も着ようといふのは模倣である。

魂の創作と簡潔美

一體に日本人は、簡潔で美しいものを好む。「古池や蛙飛び込む水の音」といふ俳句など、外國人には理解出來ない。私は、日本の美しさはそこにあると思ふ。實に簡潔で要を得てゐる。桃山時代の仇つばいものであつても、アメリカ式のものとはちがふ。日本の精神は、農家の藁葺屋根に現れ、茶道に現れ、生花の上にはあらはれ、着物の上に、或は床の間の上に、あらゆる方面に現れてゐる。これは美の奥義である。キリスト教のゴチック建築がやはりさうである。餘計な部分を除くところに、深い印象があると思ふ。きたない芥箱の中にも、美しい蜜柑の皮がはひつて

ゐる。蜜柑の皮だけを引張り出せば美しいものである。今和次郎氏は、中産階級の婦人の筆筒の中には、何年か前に流行つた櫛ピン、指輪、ブローチなど、今必要でない品物が貯へられてゐるといつた。つまり、中産階級の筆筒とは、要らないものを入れておく一種の塵箱である。さういつたものを省いて、簡潔で要を得たものを作りたい。即ち生命の藝術を工夫したい。それには餘計なものを省く大膽な態度が必要である。

二百デナリの香油と緋色のマント

かつて、マグダラのマリヤが、キリストの足に二百デナリの香水を塗つた時に、弟子はそれを贅澤だといつて馬鹿にした。キリストはそのことを辯護して、私の葬式のためだといはれた。エリザベス女王の小姓サー・ウォター・ラレーといふ人が、女王と一緒に歩いてゐた時、水溜りがあつたので、小姓は直に自分の緋色のマントを脱いで、その水溜りの上に敷いた。女王はにこにこ笑ひながらその上を通られたといふ。後にその小姓は、アメリカ全體の總督にせられたといふことである。

われわれは、美といふものに對する憧れを持つ必要はない。さうかといつて、わざわざ爺臭い風をする必要もないが、やるなら思ひきりやつて欲しい。かうすれば人が非難するだらう、などと心配しないで、持ち込む者は持ちこみ、棄てるものは棄て、使ふ時には二百圓くらゐの香水を

使ふ。そして創作的態度をもつて、やる時にはうんとやるといふやうにしたい。國のために凡てを棄てるといふやり方は、戦争の時でなくとも、平常から心掛けてゐなければならぬ。たとへ金持であつても、精氣を前方に進めて行かなくては、國民の士氣は上らない。紙風は微風には上らないが、強風に上る。文化もそれと同じである。

道徳的士氣と内部的工夫

徳富蘇峰氏は、「日本人は朝鮮人や支那人に比べて元氣がある」といはれたが、朝鮮人は少し儲けると、煙草ばかり飲んでちつとしてゐる。支那人は長い爪をはやして、その先に金の莢をはめるが、これは金持の證據にするためである。彼等は纏足してゐる。孫逸仙の時代には纏足することも止つてゐたが、この風習は全くぬけきらない。阿片をすら公營にしようとしてゐるくらいで、全く道徳的士氣が衰へてゐる。日本の場合でもさうである。大正七年に巻煙草の生産高が七倍になつた。淀橋の専賣局では、二百名くらゐのものが巻煙草の箱詰をしてゐる。これが一年間に七倍も増進した時、間に合はないからといつて、一日に何萬本と入れる訓練をした。また遊廓に遊びに行く延人員が、大正六年に千六百萬、大正九年に二千七百萬、三年間に六割方増してゐる。これを見ても日本人は道徳的規則を缺いてゐる。魂の工夫を缺き、士氣を缺いてゐる。最近日本人の犯罪傾向がひどくなつた。大正五年頃から多少減つてきたやうに見えるのは、執行

猶豫を多くした結果である。しかし、殺人、放火、強盜などは、不景氣のため十年間の後戻りをした。日本には衰頹の徴がみえる。もつと宗教的になり、餘計なものを省き、外側のことを考へないで、内側に注意を注ぎ、「やる！」といふ勇氣を出さなければならぬ。

魂の落著きと信仰

第一に、獨居の練習をしたい。獨房に入れられると、淋しいので發狂する人があるが、神と共にあるといふ考へになれば少しも淋しくない。私は肺病を患つた時、一漁村で一人きりで生活してゐたが、案外淋しがらなかつた。私はまた、アメリカのユタの沙漠にゐた時、あまり長いこと話をしなかつたので、話がしたくてたまらなくなり、自分で自分に話しかけたことがあつた。淋しいと思へば淋しいが、慰めもあつた。

われわれはまた大膽になる修養を積まなければならない。心をゆるし合つた仲であつても、やはり自分は自分である。自分のうちに神がゐるといふことを信じなければ、病氣になつた場合淋しいものである。一人でこの世を去つて行くときも、動じない沈勇の練習をしたい。沈勇は魂の藝術である。内側の工夫は人に見えるものではないから、自分一人で氣をつけないならぬ。神戸の或る金持の人が病氣で死んだ時、醫者はいつた。「この人は死ぬ筈ぢやなかつた。呼吸と動悸は、大抵平衡してゐるものなのに、この人は呼吸が遅くなつて、動悸が速い。この人は何

か心配事で死んだ」と。その人は心配が無くなるなら、胸の動悸もをさまつて、死なずにすんだかも知れない。魂の工夫が出来て居り、神に頼る信仰があれば、その人は生きることが出来たのである。この神による落著きがありさへすれば、病氣は必ず治るものである。

私は疲れない工夫を知つてゐる。私は全国の宗教運動をずつと續けてゐるために、夜などあまり寝ないのであるが、落著く工夫を知つてゐて、心配しないから、いつも元氣である。氣合がさうである。「えいッ！」といふ懸聲で、相手の吐がきまつてゐるか、ゐないかがわかる。劍道四段くらゐになると、ほんとの劍で試合をするのであるが、氣合をかける聲の強さで段をつけるさうである。つまり、魂を集中してやつてゐるかどうかを見るのである。

魂の工夫ができてゐる者は、どんな時にも靜かに考へることが出来る。この工夫を知つてゐる者には、眠らなくとも眠つたと同じ作用がある。身體をちつとさせてゐるとか、性問題に煩悶しなければ、落著いた氣持になれる。

透明なる魂

人に氣づかれなくとも、自分の魂を整理して行く。それが魂の藝術である。生花や繪に力を注ぐばかりが藝術ではない。魂の御殿で神を禮拜することが、最も大きな藝術である。瞑想の工夫といはうか、靜座の工夫といはうか、兎に角、われわれの魂が靜かにしてゐるか、魂が透明であるか、人に見られた場合に恥しくないか、人ばかりでなく、神に見られた時に恥しくないかを考へてみなければならぬ。たとひ一人の時でも、いつも怠けず、先驅者として立つ覺悟がなければならぬ。さういふ人が多ければ多いほど、國民の精氣が高まると思ふ。

であるから、われわれはまづ、自分の魂の押入を掃除することから練習しなければならぬ。外側だけ綺麗にしておけば、魂の奥でどんな淫猥なことを考へてもかまはないといふやうでは、實に恥しい。魂は透明にならなければならぬ。そこから國民の元氣が出てくる。われわれには徹底した魂の透明性が缺けてゐる。

『レ・ミゼラブル』のやうな立派な創作は、透明な魂の持主でなければ書けない。ミリエル僧正の如き美しい清い魂こそ、魂の藝術といひたい。うるはしい魂の持主は、大罪人をも悔い改めさせる。畫布の上の藝術ばかりでは國は亡びる。深い内省のある、俳句の氣持をもつ人であれば、外側はどうあつてもいい。われわれは獨逸民族の質實剛健な氣持を學びたい。イエスのやうに、カルヴァリ山の十字架上で人の輕蔑と惡口とを身に浴びて、遂には殺されるやうな場合にも、決して慌てない落著いた魂をもちたいものである。

徳富蘆花氏の思ひ出

一

私は粕谷の櫟林が好きであつた。上高井戸の停留場から、村の廣い道を行くとさうも感じないが、松澤村から八幡山を通り抜けて、粕谷の鎮守に差しかかると、武蔵野でなければ感ぜられない美しい印象を受けるのが常であつた。セピア色の肌の細かな土、ものさびた鎮守の鳥居、繊細な雑木林の線、四季を通じて柔かな感じを興へる森の色彩、澄み切つた美しい小溝の流れ、それは關西の何處にも發見せられない本當に柔かな感覺を興へてくれる。一體に關西の森は蔦と茨が多くて、森の中にもなかなか這入れないが、武蔵野の雑木林は無造作に潜り込むことが出来るものだから、栗を拾ふにしても、柿を取るにしても、勝手な事が出来る。それだけでも武蔵野の森は私たちにとつて面白いのに、武蔵野では、樺でも、椋でも、榎でも、すぐ大きくなる。關西では一抱へもあるやうな榎の木を見ることは珍しいが、武蔵野ではそれが到る處にある。

蘆花氏の棲んでゐた家は、粕谷の高臺の上にあつた。東から近づくとき、美しい鎮守の鳥居の前を通つて、上高井戸から来る大きな道と一つになつて、蘆花式の高く葺いた萱屋根の母屋の前に導かれて行くが、南から行くと、青山街道から五六丁北に這入つてなだらかな丘に登る狭い道を傳つて蘆花氏の家の柴折戸の前に導かれる。一等美しいのは、東からのアプローチで、南側から來ると非常に野趣があるが、すぐ蘆花氏の屋敷の前に出るので、何だか森に深みがないやうに考へられて、美しく感じない。

屋敷はあまり廣くはなかつた。それでも都會の家に比べると、あれで随分廣い方であらう。大ざつばな人であつただけに、家の手入れなどは少しもしなかつたものと見えて、人の棲み得る裏の離れなどは古いがらくた道具で一杯になつてゐた。蘆花さんは廣い處に狭く棲む人であるとは感じたことであつた。私などは狭い家に十四五年も棲んで來たものだから、蘆花さんの家などは不便に考へられて、同情したくらゐであつた。何時も棲んでゐた家は丁字形になつてゐた。それを長い廊下でつないでゐた。私が一等好きなのは、その長い廊下であつた。廊下は田舎の禪寺によくあるやうな極く粗末なもので、その片側は、多くの書物で一杯になつてゐた。つまり、この廊下は、蘆花氏にとつては唯一の寶庫であり、世界であり、脳細胞の排列せられた處であつたのである。内側を白く塗つて、處々に窓がつけてあつた。何だか床しくて、蘆花氏その人を表徴するやうな印象を興へた。

私は實際この廊下を通ることが一番好きであつた。フロレンスのデ・メデチの廊下は、一哩半も續いた長いものであるが、その兩側にはフロレンスそのものの上に生きた數千の著名な人物の肖像畫がかかつてゐる。それは私が世界中で見た廊下のうちで最も神祕的なものである。蘆花氏の住宅の三つの家を繋ぐ幅廣い粗末な廊下は、蘆花氏に取つては、このフロレンスのデ・メデチの廊下でもあつたらう。丁字形の上の兩端にある家は母屋と書齋で、中央の端にあつたものが、先づ應接間といつたところであらう。三軒とも武藏野の大きな舊家に比べると極く粗末なもので、別に美しいものではなかつた。大體に於いて、武藏野の舊家といふものは筥棒に大きな家で、私が長く住んでゐた松澤村の鈴木一族の家のは、何でも足利時代から續いてゐるさうであるが、實に美事なものであつた。蘆花氏は、その貧弱な小さい家にあまり手入れせずには棲んでゐた。日本の藁小屋は手入れをせぬと馬鹿に穢くなるもので、多少禪味を發揮して、拭き掃除しないとひどいものになる。蘆花氏は、あまり家のことなどは構はなかつたと見えて、部屋の中で、自然の空氣を浸み込ませてはゐなかつた。また何だか西洋流の生活振りとは東洋流の生活振りとは一致しない處にゐるやうに私にはうけ取られた。「みみずのたはこと」や「新春」の終りの方では輝かしい自然生活が潑刺として描かれてゐるが、蘆花氏は日常の本能生活さへ自然化しようとはしなかつたらしい。そこにまだ武藏野にそぐはない或るものが残つてゐた。それはおそらく自分で鋤をとつたり、自分で鉋をかけたたり、釘を打たなかつた關係でもあらう。それである

から、自然生活を楽しんで割合に、生活そのものは自然的生涯の部分が比較的少く見えた。そこになると、アメリカのジョン・バアローや、フランスのジャン・アンリー・ファブル翁などとは多少距離があつたやうである。

その人の生活振りを見ると、脳髓の動き方がよく解るものである。巢を見ると鳥の精神状態が解り、穴を見ると獸の習性が解るやうに、著作者の部屋に這入ると、その人の習性がよく解る。蘆花氏の部屋に這入つて、あの美しい自然詩人の面影をうかがふことはまことに困難である。彼の書齋は、西洋と東洋との間に立つてゐる。富士でいふならば、胸突八丁にさしかかつてゐる人の書齋であつた。まだ頂上を究めないところに、蘆花氏その人の本領があつたのであつた。彼は永遠に胸突八丁に棲んでゐた。彼の性格は險しかつた。少し手のかけ處が悪いと上から大きな石がころがり落ちて來た。それは彼が噴火山性の激烈な詩人的性格を持たされてゐた爲であつたらうけれども、一つは彼が眞剣な爲であつた。それで、蘆花氏に近づく人たちは何時もよく注意せねばならなかつた。弟の性格をよく知つてゐるあの聰明な蘇峰氏は、敢てその胸突八丁に近づかうとしなかつた。それだけよく人間の心理を知つてゐた。私も、この胸突八丁を知つてゐたから、何時も近づくのに梯子を準備して行つた。胸突八丁にいい梯子は何といつても愛子夫人であつた。世界に多くの聰明な賢夫人はあるだらうけれども、あの繊細な感情の持主である、胸突八丁の天才——噴火山の性格の持主である蘆花氏をして、彼の落ちつくべき處に落ちつかしめた女性こそ

は、さう世界に多く類のある女性ではない。愛子夫人は體こそ小さいけれども、實に聰明な、睿智の結晶であるやうに私には見えた。蘆花氏は本當に愛子夫人を愛してゐた。あれだけ年寄つて、あれほど露骨に夫人に對する愛を私の前に物語つた人は多く無い。實際私は蘆花氏ほど幸福な人はないと度々思つた。そして二人が永遠に若いのに私は何時も驚いてゐた。愛子夫人は本當に劍ヶ峰にかけられた梯子であつた。

私は、蘆花氏に話をする時に何時も言葉をよく注意して使はねばならなかつた。詩人であるだけに、ちよつとした事がすぐ感情にさはることを私は感じた。併し彼は本當に深切な人であつた。彼は人を愛したくてたまらなかつたやうであつた。「子が欲しくてたまらないよ。」と度々私に云つた。それで私を何時も羨んだ。そして私を子供のやうに愛しようと努力した。涙を流して私を抱擁してくれた。私も亦手を握つて彼と共に祈つた。西瓜時分にはたらふく西瓜を御馳走するし、栗のある時には自から裏の栗林に這入つて私たちの爲に栗を一升も二升も拾つて来てくれた。

「蘆花さんの裏には栗が地べたの上に落ちて腐りかかつてるよ。拾ひに行かうぢやないか。」さういつて、松澤の私の小屋に棲んでゐた青年たちは、十七八丁もあるところを、籠を持つて蘆花さんの家の裏まで栗を拾ひに行つたこともあつた。

第二の聖地旅行から歸つて来て、蘆花さんは全く耕作を打ちやめてしまつた風だつた。畑は荒れるに委されてゐた。あまり荒れてゐて弓場を探すにも骨が折れるくらゐであつた。しかし蘆

花さんは敢てそれを小作に出す元氣も無かつたやうだつた。前庭は頗る廣かつた。寢室の前庭には朝鮮芝が植ゑられてゐて、私の爲に屢々そこへ食卓を持ち出して御馳走してくれた。しかし私は寢室の前の植込みよりか、とつつきの母屋の前の雑草園が好きであつた。蘆花さんが自分の庭の植物の歴史に就いて詳しいのには、本當に驚くくらゐであつた。「聖地順禮」の中にもパレスチナの植物のことがスケッチ體に美しく描かれてゐる。蘆花さんはその程度に於いて庭の植物の一つ一つに就いて美しい言葉で私に物語つてくれた。私は、日本の田園文學のうちで、『みみずのたはこと』の如きは、最も傑出したものの一つだと思つてゐるが、蘆花氏の自然は深い冥想と擬視を持つてゐた。蘆花氏は純粹のトルストイアンであつた。初めは多少トルストイに模倣するところもあつたであらう。しかし終り頃には、ユニークな、そして純粹な自然詩人徳富蘆花が出来上つてゐた。實を云ふと、私は『不如歸』があんまり好きではない。私はあまり有名であるから讀んだものの、作品に出てゐる主人公は、私たちの生活や境遇よりあまりかけ離れた人物でもある爲か、共鳴する點が非常に少かつた。「華族の坊ちゃんや嬢ちゃんがどんなに煩悶したところで、それは御勝手だ。」といつたやうな感じで私はそれを讀んだ。私は、あまりに大衆が喧しく云ふから、群衆心理の研究の爲に讀んだのであつて、讀んだ後で、それは、浪子と武男の戀愛のプロセスの上に日清戦争時代の模型的な描寫があるからだと氣づいた。

つまり『不如歸』の時代の人々は、個性の煩悶や内部的性格の進展に就いては、さう深く考へ

てはゐなかつたので、戀愛といふものの受くべき迫害とその奇妙な運命に就いて、ロミオとジュリエットの場合以上のものを豫期してはゐなかつたのだ。私たちのやうに、もう少し哲學的に考へる悪いくせのある人間には、『不如歸』は詰らなかつた。しかしつまらなく書いたところに、蘆花さんの傑いところがあつたのかも知れない。あまり下手に哲學臭く書いて、群衆心理をつかみ得ない拙い作品のある中に、蘆花さんは、日清戦争時代の大衆をよく理解して、「少しく哲學的に、多く感傷的に」書き上げた。そこに蘆花さんの手際があつたとも云へよう。

しかし、若しも『不如歸』のうち美しい處があるとすれば、やはり自然詩人としての若い蘆花さんの氣持である。逗子の浪きり不動や、伊香保の美しい松林が、あの若い血を吐くやうな日清戦争時代の束髪美人の浪子さんと相並んで、初めて日本の自然に人間的交渉を持つやうにしてくれたことは、何と云つても蘆花さんの一大勳功でなければならぬ。

「美しい自然の中では戀がしたいものである。」モーパッサンは、そんな意味のことを或る短篇小説に書いてゐる。蘆花さんは、日本の美しい自然と美しい戀愛をどつちやにして、若い青年の胸の中にはふり込んでくれた。そこに彼の尊さがあつた。淡い自然と馬鹿に美しい戀愛との諧調が蘆花さんの使命であつたらう。蘆花さんの自然は友禪染めである。島崎藤村氏の自然はより東洋的であり、より芭蕉的である。それでも、『若菜集』などを見てみると、『不如歸』の著者と全く同じ感情のあふれてゐることに氣がつく。おそらく、あの時代の日本の青年は、英國の詩

人でいへばセレーヤやバイロンの持つてゐたやうな情熱で日本の自然を見ようとしたものらしい。若々しくて、感傷的で、今日から考へると、實に單純で氣持がいい。戀愛もあんな時代の戀愛が純真でいい。今時のやうに、ダダイズムで戀愛したり、キュービズムの戀愛だとか、マルクス派的戀愛などいひ出すと、むづかしくて仕方がない。『若菜集』や『不如歸』は實際日本の戀愛史の黄金時代であつたのだ。蘆花さんは、この戀愛の黄金時代に、最も幸福な作品を世に送り出した。そして一躍日本の文豪となつてしまつた。

二

私は幼い時から社會主義の理論が好きであつた。一つはトルストイの感化にもよるであらうが、社會主義の中に秘められた人道主義がイエスの教へた高い道徳と一致してゐた爲でもあらう。私は安部磯雄氏の書いた「瑞西」や、堺氏や幸徳氏の書いた論文をむさぼり讀んだものであつた。それで私は初めから精神主義的傾向を持つてゐたので、唯物社會主義といふ名が嫌ひだつた。唯物的社會主義では社會主義になれないやうな氣がしてゐた。今も同じやうなことを考へてゐる。理想的社會主義がどうして非精神主義的であり得ようぞと考へてゐる。そんな時に私は木下尚江氏の『良人の自白』を讀んだ。泣きながら夜寝ずにあの長い小説を讀み通したものであつた。そして精神主義的なキリスト教社會主義の一派と、所謂柏木派と稱せられた、唯物主義的社會主義派が

分裂した後、私は、蘆花さんが木下尚江氏を援けて『新紀元』を出された時に、徳富さんや木下さんの運動に心から共鳴したのであつた。その後『新紀元』がつぶれて私は頗るさみしかつた。蘆花さんはその後直ぐ本間俊平氏と一緒に『黒潮』といふ新聞體の雑誌を出されたことがあつた。確か四號までしかつづかなかつたやうに記憶するが、私はあの新聞體の雑誌の出るのをどんなに毎日待ちわびたことであつたらう。

蘆花氏は勿論理論家ではなかつた。だから哲學的慰安を彼に發見することはほとんど出来なかつた。私は随分理窟っぽい青年で、その頃もうプラトンやカントやヘーゲルなどの主な著作を飛び飛びであるけれども英語で読んでゐた。殊にヘーゲルだけはその歴史哲學を英語で初めから終りまで讀み、ヘーゲル派のプフライダラー博士の書いた四卷ものの宗教哲學史を英語で讀み切つてゐた時であるから、頭が如何にも理窟っぽくなつてゐたが、蘆花さんの信仰的な文章には何時も共鳴するのであつた。私は、蘆花さんが聖地巡禮から歸られて、粕谷の村に引つ込んだ時には非常に退嬰的であると考へた。私は、何時も戰闘的態度をキリスト精神であると考へてゐた爲であつたが、田園に引き籠つて獨り楽しむことはキリスト教的でないやうに考へられてならなかつた。それで、蘆花さんの粕谷入りをあんまり嬉しいとは思はなかつた。社會には、自然にも見捨てられ、職にさへつけない者が澤山あるのに、それ等の人々を見捨てて自然に立て籠ることはあまり我儘であると考へられてならなかつた。それで私は、『みみずのたはこと』を讀んでも、美

しくあるとは考へたものの、キリスト的闘争精神を缺いたものとして、心の底より共鳴することは出来なかつた。その後、私は貧民窟に這入つてしまつた。そして自然に憧れつつも、自然に見捨てられた長屋の子供たちの兄貴になつてしまつた。私が再び自然に接近せねばならないやうになつたのは、農民運動を始めてから後のことである。今度は自然が恐ろしい姿をもつて私に迫つて來た。自然にとりまかれてゐる農民は自然を愛してはゐなかつた。私は「如何に自然を愛すべきか」を農民に教へねばならなかつた。それで蘆花さんの自然的作品をもう一度讀みなほしてみた。そして蘆花さんが完全な自然詩人であることを知つて、日本の農民に、もう一度徳富蘆花を讀みなほすやうに奨めるやうになつた。蘆花さんが自然に就いて書いてゐるものはさう多くはない。しかし彼は自然に就いて瞑想し、自然を凝視した。彼はそれを人間ときり離さずに考へてくれた。『みみずのたはこと』に出てゐる不淨の一文の如きは實に深切な瞑想であつて、私はあの文章を讀んで有難くて泣いたくらいであつた。あれだけでも、蘆花さんは魂の使徒行傳の續きを書いた人であるともいひ得よう。世界の人は蘆花さんをあまり多くは理解してゐない。彼は魂の煩悶の爲に後半生はほとんど門を閉ざして外に出なかつた。一面からいへば随分我儘である。しかし、私のやうに彼の心理を多少なりとも理解したと思つてゐる者には、彼の煩悶は故の無い煩悶ではなかつた。彼は高く昇らんが爲に煩悶した。そして、彼はその煩悶を匡す唯一の工夫として「自然の途」を選んだ。彼は狭い柴折戸の奥に住んで、世界でも最も美しい平原の一つである

武藏野の美を胸の奥まで吸ひ込んだ。私は彼に戰鬪的精神の缺けてゐたことをとがめまい。私は寧ろ惱める魂にとつて自然がかくも慰め得る大きな力を持つてゐることを蘆花氏の作品について學ぼう。蘆花氏は永遠に私に物語つてゐてくれる。日本の農民は、自然の環境の内に住んでゐて、自然を見失ひつつある。心の閉ざされた彼等は、自然の懷に住んでゐて、自然を視る眼が無い。私は『みみずのたはこと』を開きながら、日本の村々に於ける自然美を觀照する人たちがだんだん無くなつて行きつつあることを悲しむ。せめては、みみずのたはことにだけでも耳を貸すだけの餘裕を村の人々に與へてやりたいものである。

默想斷片

この程度以上に世界を不思議に造ることは困難である。天國に行つても、この世界以上の奇蹟を見ることは不可能だ。眼を開いて見よ、眞理は足下にある。

平凡が私には奇蹟だ。一つの林檎、一つの雑草、それが私には不思議だ。法則に縛られてゐるもの、發生するもの、無生物、生物、その凡てが私には奇蹟だ。

よくもまあ、こんな不思議な世界に、私は生れ合せたものだ。一片の土塊、一箇のバクテリア、それすら、私には全く豫想外の出來榮えである。これ以上の不思議な世界が、偶然に出來るとは思はれぬ。

背後にあるものの姿が見えなくとも、宇宙の神祕は、その現象によつて十分知ることが出来る。

運命づけられたものさへ、運命づけられざるものの役に立つてゐる。それが私には不思議でならない。

運命づけられたものが、運命づけられぬものために役立つてゐることを見ると、世界は全體としての使命を持つてゐるのだ。箇々の使命が判明しなくとも、全體のために、神のために、生くべきだ。

私が一つの神であつたにしても、私は地球のやうな不思議な世界をよう造らない。地球は造つても植物はよう造らぬ。植物は造つても動物はよう造らぬ。動物は造つても魂はよう造らぬ。靈魂はやはり神が造つたに違ひない。

よくもまあ「記憶」といふやうなものを人間の脳髓に造つたものだ。十年前、五十年前、百年前のことすら憶えさせ、思ひ出させる仕掛の巧妙さには、如何なる科學者も兎を脱ぐべきだ。

あまりに機械的な決定的生活であつても、これを何もない世界から造り出すとすれば、普通の骨折では出来ない。最大の自由を持つものが或る種の決定を與へたものとしたか私には考へられない。その背後に造物者が秘密を守つてゐるのだ。

人生の苦痛は、視點によつて變る。或る高い目的のために苦しんでゐると思へば、病氣すらが愉快になる。神は人間の苦痛を「意識」といふ不思議な力で救はうと、初めから設計してゐる。その企ての妙に私は驚く。

存在そのもの、生きてゐることそのこと、意識を持つことそのことが、三重の神祕として私に迫る。私自身が、存在と生命と意識より一步離れて觀照的態度を取る瞬間に、世界には神祕の舞臺が開く。

神祕は、心の扉の開きやうによつて定まる。自己のために思ひ悩むものに神祕はない。他人のために思ひ悩むものには半分の神祕が與へられ、神の如く宇宙の爲に思ひ悩むものには全幅の神祕が與へられる。

自己生活に閉ぢ籠る者は自己決定の世界に生き、自己決定の世界に生きるものは、宇宙の發展と調子を合はさない。これを罪惡とも云ひ、迷ひともいふ。自己の城壁を打ち破つて、宇宙精神をしておのびのびと自己の衷に生え上らしむるところに、歡喜は湧く。

夫婦の苦闘の跡

自分の妻に感謝したことを人の前に話すことは何だか手前味噌であまり面白く思ひませんが、感謝してゐることは嘘ではないのですから、正直にいひませう。

元來、私は肺病であつたので、正式には結婚できる筈もなく、その上、無理をして貧民窟生活を送つてゐたものですから、ほとんど寝るところさへない貧民長屋に嫁いで来てくれるといふ人は、よほど思ひきつた女か、冒険好きでなければなりません。生活の安定でもあればいいのですが、入つた金はすべて貧しい近所の人に分け與へてゐたものですから、生活は脅され通してました。勿論學問のある人が私のところに來てくれる道理もないだらうし、それで私も高等教育のある女性と結婚しようとは思ひませんでした。私は、自分の小説にも書きましたが、ファースト・ラヴの女性もあつたのです。しかし私が貧乏なのと、肺病にかかつたのとで、先方が煮え切らないものですから、七年以上も文通したりしなかつたりして交際を續けてゐたものが、友人の直接の談判で駄目だといふことがわかつたのです。それで私は別に女のこと考へず、一生懸命

に貧民窟の不良兒童の感化事業や病人の保護に没頭してゐました。私は、どん底の悲哀のなかを歩いて、きよい宗教生活の法悦を楽しんでゐました。もし私が、貧民窟に事業を續けて行かないとすれば、女の力を借りることも少かつたでせうが、淫賣婦の仲間に混つて、救濟事業に努力してゐると性慾生活を全く忘れてゐる私でも、さうした淪落の女を救濟するに當つて、或るデリケートな點にまで觸れてやらなければならない。實際、女にできる仕事で、男にできない仕事はあまりに澤山あります。病人の世話が第一それです。そのころの私はおみちといふ全身不隨の三十女を私の家で世話してゐました。私は丸山兵吉といふ老人と二人でそのおみちの尿の世話までしなければならなかつたのです。丸山兵吉はその後私の家に世話してゐた乞食の女と一緒になつて一家を構へました。そして煙管の羅宇すげ換へを商賣にしてゐた岸本の老夫婦が、もう目が見えないから世話してくれと頼んで來ました、二人とも胃癌にかかつて苦しんでゐたのですが、そればかりではありません、次から次へと肺病の男も來れば、脚氣の男も來るし、梅毒の男も來る。尿病の男も這入つて來る。それはそれは大變でした。大掃除の時には、貧民窟にあまり病人を集めるといつて警察から叱られたことがあつたほどでした。その頃でした、私が、私と一心同體になつてこれらの病人を世話し、隣近所にゐる淫賣婦を救濟してくれる、最も健康な、意志の強固な婦人の出現を祈つてゐたのは。

その頃、妻は、神戸の福音印刷會社の女工の取締をしてゐました。私はその工場が妻の叔父に

よつて經營せられてゐることを知りませんでした。私はただその工場が變つた工場で、『聖書』の印刷と西洋人向きの活版を澤山扱つてゐることを知つてゐました。そして私は毎月曜日そこへ讚美歌を教へるやうに頼まれて、二十分間くらゐ二三年續けて行きました。しかしその女工と親しくしたことは一遍もありませんでした。その女工の中に、妻の顔も見えてゐました。妻はそのころ非常に老けて見えて、姐さんらしく製本女工を監督してゐました。ところが、ふとした事から、多分路傍説教の歸りについて來たのが引掛りせう。しげしげ貧民窟の路地の奥にあるみすばらしい集會所に来るやうになり、それから一年くらゐ經つて、私は妻と結婚することになつたのです。

その頃、妻は頗る肥つてゐて、實に健康でした。それが貧民窟に来て無理な生活を送つたものですから、見る見るうちに痩せてしまひました。そのとき私は、濟まないといふ感じがしました。普通の事業と違つて、被救濟者が總て姑に當るので、何十人と出入りする被救護者は總て姑のやうな口調で私の足らないところを妻にまで持つて行くのが普通でした。金でもあればけちにもせずには濟んだでせうが、その頃私は夫婦で月給十七圓貰つてゐました。それでは大勢の人を助けることができないので、キリスト教の女子神學校とラムバス保姆傳習所の二つを教へに行つて、兩方から十五圓宛貰ひ、夫婦の生活を一ヶ月約一人前五圓と定め、絶対に肉食主義にして肉を一切食はぬことにしました。妻は私のいふことに頗る從順ですから、肉を食はないといふ約束も、完

全な夫婦生活ができないといふ約束も、甘んじて聞いてくれました。實際最初の一年間くらゐは、妻があまり從順なので泣けたことも屢々ありました。あまり痩せ方がひどいので妻のために菜食を止めてしまはうかと思つたことも屢々ありました。しかし不思議なもので、菜食してゐる間は下痢するやうなことも少しもありませんでした。

それから間もなく私は妻を朝々五時から一時間だけ中等程度の學課について教へることになりました。その仲間もあつたのです。今神戸の勞働紹介所の所長をしてゐる武内勝君は私の貧民窟の家に泊りこんで、私の個人教授を毎朝五時から受けてゐました。それで私は妻をその組に入れようと思つて、毎朝代數と算術を教へました。そして晩の六時から八時まで、幾何も、動物學、植物學も教へました。そのうちに妻の妹もこれに参加しました。妻の妹はそれから女學校に入り、吉岡さんの醫學校を卒業して、今神戸の診療所を經營してくれてゐます。そして私は二年間ばかりアメリカのプリンストン大學で勉強しようと思つて出發し、妻は三年の豫定で横濱の共立女子神學校に學ぶことになりました。

大正七年の春、私はアメリカから歸つて來たのですが、妻は約六ヶ月遅れて學校を卒業することになりました。少し留守にした間貧民窟には恐ろしい眼病が流行してゐました。それで妻は私のいひつけ通り、簡単な眼藥を持つて毎朝貧民窟を廻つて、眼病にかかつてゐる人たちに點眼するのを日課にしました。よくよく注意したのですけれど、たうとう妻も悪性の眼病に傳染しまし

た。そして數回縣立病院で手術を受けてゐるうちに、眼球が爆發して、血管が丁度瞳の上に葡萄腫のやうに流れ出して來ました。その時、私はほんとに濟まないといふ氣がしました。幸ひ大阪醫大の宮下博士の世話で、僅か四日間でその葡萄腫を切りとることができましたが、そのために妻は一眼を失つてしまひました。その手術を受けた時でも、私は丁度九州へ傳道旅行に行くことに約束してゐたので、たうとう取消することができず、妻を大阪醫大の三等病室に送り込んでおき、金がないので附添人も附けず、宣傳の旅に立ちました。かうした無理な生活を妻はずつと忍んで來てくれました。一番可哀さうだつたのは、最初の子供の妊娠中でした。世話した破落戸くろつきには苛められるし、つわりには苦しむし、たうとう私は臨時に妻をその當時病んでゐた妻の父の家に隠したこともありました。子供が生れてから貧民窟の表側に小さい家を借りて、初めて二階建ての家で子供を育てることにしました。しかし私から金を取らうとする破落戸の脅迫は止まず、妻は随分苦心しました。

母の力

母スザンナ

今から百五十年ほど前に、イギリスの國に、大變えらい宗教家がありました。その人の名をジョン・ウエスレーといひました。ウエスレーのお母さんは、大勢子供を生み、ウエスレーはその十五番目の子供でした。お母さんの名はスザンナ・ウエスレーといひ、一人で一々子供の世話を焼き、子供が大きくなつて、社會のために立派な仕事が出来るやうにと、毎日氣を配つてゐました。晩、寝るときなども、大勢の子供を一人一人自分の膝許に呼び寄せて、その日一日、子供が、眞直ぐな道を歩いたかどうかを反省させて、眠りにつかせたさうであります。果せるかな、ジョン・ウエスレーは、英國を革命暴力から救ふやうな大人物になりました。

その當時、英國の隣のフランスの國では、革命が起つて、大勢の人が殺され、ルイ十六世といふ王様と、その王妃のマリア・アントアネットは、議會の決議によつて死刑になりました。何で

も、革命のために殺された者が五萬人もあつたといふことであります。そして、革命におびえた人々は、農業さへせずに逃げてしまつたので、饑饉で死んだものが三百五十萬人もあつたといふことでした。その時、スザンナ・ウエスレーに育てられたジョンは、オックスフォード大學を卒業して、英國の隅々を演説して廻り、みんなの人が不道德を離れて罪惡から遠ざかり、贅澤をしないで貧乏人を可愛がるやうに、宗教の話をして聞かせました。

その結果、英國には、ウエスレーの説に賛成するものが五萬人も出ました。そして、その中から黒ん坊の解放運動に熱心に働いたウエルヴァ・フォースとか、貧乏な百姓を助けるために奔走したラヴレスとかいふ人が出て來ました。その結果、英國は革命なくしていい國になつたのでした。

ところが、ジョン・ウエスレーの運動が、非常に力強いものになると共に、誰ともなしに、ウエスレーもえらいけれども、ウエスレーを生んだお母さんも偉いといひ出しました。今日、英國のロンドンに行つてみると、この偉人ジョン・ウエスレーと、その同志たちの墓が、教會堂の基礎石の上に刻まれてゐます。そして、その教會堂の入口の正面には、このウエスレーを生んだ母スザンナの大きな墓が建てられてあります。それで、教會堂にはひつて行く人は、ウエスレーの墓よりか、お母さんの墓を多く見るわけです。

實際、私は、この偉人ウエスレーを生んだお母さんを、ほんとに偉いと思ひます。

リンコルンの繼母

今日、アメリカの首府ワシントンに行くと、リンコルン記念館といふ大きな建築物が建つてゐます。それは、丁度、大きな池を越えて、ワシントンの記念塔を見るやうになつてゐます。

なぜ、アメリカの人は、こんなにリンコルンを尊敬するのでせうか。それは今から凡そ六十六年ほど前に、アメリカにゐる約八百萬の可哀さうな奴隷を解放したからであります。しかし、この偉人リンコルンも、ブースといふ役者に殺されました。それだけ、アメリカの人は、ワシントンを尊敬するくらゐ、今なほリンコルンを尊敬してゐます。

ところが、この偉人のかげに、彼を九つの時から育てた偉い繼母のあつたことを忘れてはなりません。一體日本では、繼母といへば、非常に嫌ひますけれども、リンコルンが偉い人になつたのは、全くこの繼母の力であつたと、リンコルンの傳記を書く人は記してゐます。

その當時、アメリカはまだ開拓が十分出來てゐませんでした。そしてリンコルンのお父さんは、海から何百里と離れた、アメリカのまん中を流れてゐるミシシッピー川のほとりに移住してゐました。そこは、隣へ行くにも、一里も二里も歩かなければならない所でした。そこに、リンコルンのお父さんは、丸木小屋を作つて、一生懸命に働いてゐましたが、お母さんはリンコルンが九つの時に死んでしまひました。それでお父さんはまた結婚して、リンコルンの弟や妹が生れたの

でした。

ところが、リンコルンは、学校に行きたくとも学校はないし、本が読みたくとも本はないし、ただ、お母さんが持つて來られた一冊の『聖書』を、一生懸命に讀んださうです。リンコルンは一生の間、学校には、僅か六ヶ月しか行かなかつたさうです。リンコルンは、ほとんど学校には行かなかつたけれども、四里も五里も歩いて、書物を借りに行き、一生懸命に勉強して、たうとうアメリカの大統領になりました。そして、大統領になつた後も、その繼母を非常に尊敬してゐたといふことでした。

日本などでは、繼子は、多くいぢけるものですけれども、いぢけないで、大統領に仕立てたり、リンコルンの繼母は、ずるぶん偉い人だつたと、私は思ひます。

ガーフィールドの母

リンコルンの後繼に、ガーフィールドといふ大統領がありました。この人のお母さんも偉い人であつたと見えます。ガーフィールドが、大統領の宣誓式をする時に、幼い頃、お母さんから貰つた『聖書』を、内懐のポケットから取り出して、男子として最も光榮のある大統領の宣誓を行つたさうです。

ガーフィールドは苦學した人で、或る時は大工になり、或る時は川蒸汽のボーイとなり、ずる

ぶん苦心して、小學校の先生やら辯護士やらをして、たうとう大統領になることが出來たのです。けれども、かうした苦學のなかでも、彼は決してお母さんの形見の『聖書』を身體から離さなかつたのでした。苦しい時には母のことを思ひ、悲しい時には、母の形見の『聖書』を思ひ出しては讀み、たうとう大統領まで出世することが出來ました。アメリカの大統領になつた人には、貧乏人はあまりありませんが、ガーフィールドは全く先輩のリンコルンと等しく、貧乏のどん底から叩き上げた人でした。そして、こんなに偉い人になつたのも、全くお母さんのお蔭でありました。

母の偉大

こんな話をしてゆけば、まだまだ澤山偉いお母さんの話をせねばなりません。しかしさうしても限りがありませんから、私は、さうした話はしません。ただ、今の日本人が忘れてゐることを、少し話させよう。

日本の多くの人々は、村々に鎮守の神として祀られてゐる八幡宮が、男の神様だと思つてゐますが、あれは間違ひです。八幡宮は、元來、女の神様を祀つたのです。八幡宮の最初といはれてゐる九州宇佐八幡宮に行くと、正面に祀つてゐるのは市杵姫命他二人の女の神様、その左に祀つてゐるのが神功皇后、その右に祀つてゐるのが應神天皇です。

これは、なぜでせうか？ 九州に宗像神社といふ官幣大社があります。日本全國には八千から

宗像神社があるさうです。この宗像神社にも、宇佐八幡宮と同じ女神様を祀つてあるのです。つまり、九州の古い神社には、大抵女の神様を祀つてあります。これは大昔、日本に母親を中心とした文明があつたことを現してゐるのです。それを母長時代ともいひます。

今日、エジプトの國へ行つて、カイロの博物館を見ると、エジプトの王様は、みんな、自分の肖像よりか十倍も十五倍も大きな母親の肖像を、必ず自分の肖像の後へ彫刻してくつつけてゐます。なぜこんな母親を尊敬して、王様の肖像の十倍も十五倍も大きなものにしたのでせうか。それは今から四千年ほど前には、父親より母親の方を、ずつと尊敬したからです。財産も、位も、母よりその娘に、娘からその孫娘に譲られたものなのです。おそらく、日本の九州に遺つてゐる女神様は、多分、この母親を尊敬する傾向からきたものだと、私には考へられます。

實際、國を平和に保ち、善き子供を育てるためには、どうしても母親の世話にならなければなりません。男子は外に出て忙しいですから、子供の世話はみんな母親がします。それで、昔は、母親をとて尊敬したものであります。今でこそ、母親は父親より地位が低いやうに思はれてゐますけれども、昔はその反對であつたのです。

もちろん、私は極端に考へて、母親は父親より偉いといふ必要は少しもないと思ひます。しかし、父親が偉いくらゐる母親も偉いのです。それで、私たちは、あくまで母親を尊敬し、母親を大事にしなければならぬと思ひます。

物質を凝視する瞬間

私にとつて、宗教は遠距離にあるものではない。机の隅を凝視してゐる瞬間にも、透明な硝子の表面を見つめてゐる瞬間にも、私は宗教を持つ。物質が宗教になるのではない。物質の存在そのものが私にとつては驚歎すべきものである。

机の板といひ、硝子の平面といひ、私と関係のないものである。関係のないといふことは、私の豫想以上のものだといふことである。私の豫想以上といふことは、私の意識してゐる世界のほかにもう一つの世界があるといふことである。そのもう一つの世界といふものが、どうして出現したか。私が出現させないのに、物質の世界を出現させたその可能な力に私は驚歎する。私は人類として自分を相當に賢い動物だと思つてゐるのに、その意識以上に驚歎すべき物質を存在せしめ、表現せしめたといふことが、私にとつては既に一つの宗教である。物質を通して、私は驚歎すべき人間意識以上の大きな力を感じる。たしかに、物質は神の智慧そのものを表白してゐるのである。物質を凝視してゐる瞬間にも、私は誠に神を感じる。

眼と精神美

心理作用と眼

眼は人間叡智の源泉である。それで心理的努力を拂はなければ、眼が死んでしまふ。眼には六つの筋肉がある。よく書物を読んだ人の眼の筋肉は非常に發達して、たとへ細眼である人でも不思議に大きく開くことが出来る。そのみならず、瞼が引締つてゐて、書物を読まない者より美しい曲線美を持つてゐる。野蠻人の女の眼は物にびつくりしたやうな据り方をしている、眼球を美しく廻轉させることをしない。

瞼と習性の結晶

眼球の筋肉と瞼の動き方は、人間の感情を表す上に於いて、特別な働きを持つてゐる。怒る人の眼が吊り上り、笑ふ人々の眼が尻下りになるのは誰でも知つてゐるが、さうした眼の筋肉は習性を持つために、せつかく娘が美人に生れついてゐても、結婚後、邪淫の生活を送つたり、悲哀の生活を送つたりすると、眼球の筋肉が習性を持ち、眼の周圍に争はれない邪淫の相や悲哀の相が表れてくるものである。

鬼のやうな瞼

中で最もいやなもの、上瞼が三角の形をして、鬼の面とそつくりの輪郭を形成する。また下瞼には特殊な皺が寄つて、邪淫の相を表して来る。

かういふことから考へて、私は眼の美しさを保つために、ただマッサージをしたり、美容術だけを外側に施しても、何の役にも立たないと思つてゐる。精神修養を怠れば、それがすぐ心理作用として眼球に働きかけ、瞼の習性によつて實に醜い輪郭を顔面の上に形成するものである。

瞼の延長

例へば、藝妓の如きは、髪をあまり氣にするために眉を上吊り上げる。そのために、藝妓を三年もしてゐれば、いつとはなしに眉と眼の間が遠く離れ、上部の眼が長く伸びて、實に醜い形を示すやうになる。その上、性慾生活や飲酒の悪い癖がつくために、瞼の色はだんだん悪くなり、素顔の時には、血液の循環が悪いために、瞼の周圍に黒點が現れて来る。そして一種の毒婦型が

出来上つてしまふ。かうした毒婦型の醜といふものは、爽かな精神生活をすれば、早いものは一週間で、遅いものでも数年間のうちに全部無くなつてしまふものである。

殊に、夜を更かして性慾生活に耽溺するものは、眼球そのものに艶がなくなり、ややバセドス病のやうに前方に飛び出して来る傾向がある。その上、白眼の部分に充血が起り、或る不安な色彩が眼球そのものの上に起つて来る。殊に、かうした生活を繰返してゐると、白く澄み切つた白玉の部分が、細かい血管のために純白性を失ひ、一種の濁つた形と血管による凹凸を作つて、眼に光がなくなつてしまふ。

眼と憂鬱

悲しいことが續いても、同じことがいへる。悲しい時にはどうしても人間は眼を開き得ない。それで上瞼が下に垂れ、涙管がはれ上り、鼻筋と眼球の間に出来た窪みが、美しい曲線美を破つて、壓な氣持を人に與へる。その上、睫毛のつけ根が赤く充血して、部分的にふくれ上る。そのために眼は細くなり、顔全體の調和を失つてしまふ。

それであるから、快活な精神状態を續けてゐなければ、顔全體が悲しみをおひる。そして陰險な顔になる。かうしたことを考へても、如何に精神修養が眼の美に影響するかが解る。

犯罪學者のロンブローは、殺人犯人の眼は、ライオンの眼のやうに光るといつてゐるが、た

しかに、人間の持つてゐる神経作用が眼底に影響して、特殊な光を持つに違ひないと私は思つてゐる。あまり恐怖したり陰險な精神状態を持続してゐると、すぐ眼球と瞼の上にその表情が表れてくる。瞼は萎縮し、妙な皺が縦横により、陰險そのものの表情や、恐怖そのものの曲線や屈線が瞼の上に沈澱してしまふ。

これとは別問題であるが、近眼なども、少し心掛けがよければならなくとも濟むのであるから、つとめて近眼にならぬやう努力したがよい。眼鏡といふものは決して自然の美を與へるものではない。一種の堅い感じを與へて、その人の本質を匿す傾向がある。

天の兵車

敵の重圍に陥つたエリシヤとその弟子は、武装もせず立ち竦んだ。エリシヤは祈を知つてゐたが、弟子はこれを解しなかつた。慌てたのは弟子であつた。どうすればよいかとエリシヤに訴へた。エリシヤは祈つた後靜かに弟子の目を開かせた。

見よ、天軍天馬が彼等を見えざるうちに守つて、敵の重圍を無意味ならしめてゐるではないか。この超自然的な、宇宙絶對の神の奇蹟は、神に屬くもののみ知り得るものである。

祈つては戦ひ、戦つては祈り、資本主義の重壓に、奸惡なる世界の迫害に、不死身の努力の出來るのは、天の兵車が、われわれを守つてくれるからである。

くすんだ魂よ、困難を前にして屈するな。汝の前で紅海は左右に分れ、沙漠にはマナが降る。エリコの七周に城壁は戦はずして崩れ、ベテホロンに天よりの石が降る。くすんだ魂よ、エリシヤを守つた天の兵車は、今も汝を護つてゐることを記憶せよ。

放浪民族の運命

ニューヨーク貧民窟のユダヤ少年

もうかれこれ九年前になる。私は、ニューヨークの貧民窟を研究するために、ユダヤ人街を黄昏時に訪問した。そして驚いたことには、十階に近い高層建築から、一度に人間がはみ出て來て、街上の混雑といへば、全く想像以上であつた。その混雑の眞最中、石炭箱をひつさげた十二三の少年が、社會主義の演説を遊び半分にしてゐるのであつた。巡查がそれを追ひかける。子供等は面白がつて、きやつきやつと逃げ廻る。その一人が、私を見て、あまり背の低いのに吃驚してゐるらしかつた。いろいろからかはれたが、私は、黙つて人混みの中に隠れた。

アメリカでも、ユダヤ人は決して農に親しまない。彼等は、徹底した遺傳的商工業者である。彼等は群居を好み、彼等は密集する。そこに、文明社會に於ける祕密團體があるかの如く、ユダヤ人を理解しないものには想像される。

しかし、ユダヤ人として、別に鬼でもなければ、悪魔でもない。私が今まで歐米で交際したユダヤ人は、大抵いい人ばかりであつた。彼等は、アングロサクソン人とちがつて、概して色が青白く、鼻が大きく、髪の毛は日本人の如く黒いものが多い（勿論例外はあるが）。しかし、混血してゐる者が多いので、素人にはユダヤ人とイタリア人の區別がなかなかつきにくい。

ニューヨークには、ユダヤ人の世界人口の一割、即ち百五十萬人くらゐ住んでゐるといはれてゐる。イディヤーク語で——イディヤーク語はドイツ系のユダヤ人の言葉である——新聞が発行されてゐる。イディヤーク語の活動寫眞館もある。イディヤーク語の劇もあれば、禮拜堂もある。勿論多くの商店の看板はイディヤーク語で書かれてゐる。

ニューヨークにユダヤ人が來たのは、十六世紀にユダヤ人がブラジルに移住して後間もないことであつた。ユダヤ人は、ニューヨークで、ニューヨーク大學といふ大きな大學をも持つてゐる。この大學は、日露戦争の時、日本を應援した大富豪のユダヤ人シッフが、最近寄附金を提供したので、益々美しくなり大きくなつた。その學校の徽章がヘブル語で書いてあるから、私は變に思つたが、ニューヨークがユダヤ人の都市であることを思へば、すぐ理解出來た。

世界戦争とユダヤ人

日本人の一部の間には、世界戦争がユダヤ人の陰謀である如くにいひふらしてゐる者があるが、私は、ニューヨークのユダヤ人の生活を多少知つてゐる者として、全くそんな事を信ずることは出來ない。

しかし、ユダヤ人と支那人ほど、世界によく散布した人種は少いであらう。それであるから、世界各国の連絡をとるには、ユダヤ人はよい場所にあるといはなければならない。しかし、數からいへば、ユダヤ人は世界全體に千五百万人とは無いであらうから、世界を征服する力はないであらう。

いや、それどころではない。ユダヤ人のうちには、好戰的なものは比較的少くて、ユダヤ人が寄留してゐる國家が親切にすれば、決して戦争を起すやうな人種ではない。米國の如きは、最初からユダヤ人を尊敬してゐたので、よく國民として國家に奉仕してゐる。南北戦争のときなどでも、記録によると、合計七千三十八人のユダヤ人が南北兩軍に兵士として出陣したことが書いてある。そして一九一〇年までに、四人の上院議員がユダヤ人の間から選出せられ、下院には三十人が選出されてゐる。

これは英國でもさうで、英國では幾人かの貴族がユダヤ人の間から出てゐる。そして内閣の閣僚にはユダヤ人がいつも顔を出してゐる。現内閣の外務大臣サイモン氏の如きは、ユダヤ人である。私は、彼と一緒にエルサレムで約十日間同じホテルに泊つて、屢々交つたが、あれほど愛國的な人間は少からうと私は思ふ。

ローマ舊教とユダヤ人

しかし、ドイツとオーストリアには、昔からユダヤ人を非常に嫌ふ風習がある。これは、ローマ舊教の関係であらうと私は思つてゐる。一體新教國に於いては、ユダヤ人に對して寛容であり、舊教國に於いてはユダヤ人を非常に排斥する。

オーストリアに於けるユダヤ人追放の記録は悲しい。一六七〇年、ユダヤ人追放令が出た後、マリア・テレサは、口髻なきものは（その當時ユダヤ人に口髻を付けさせる法律があつた）、ユダヤ人の證據として、左腕に黄色の腕章をつけるやうにと命令を出してゐる。その頃からユダヤ人の悲哀は、言葉でいひ盡せないほどであつた。家庭は離散し、父子は決して同じ處に住むことは出来なかつた。幸ひ、ヨセフ二世の改革によつて、ユダヤ人の解放が計畫せられ、職業の保證、ユダヤ人壓迫の税制の改革、ユダヤ人のための大學の開放等が行はれた。

ヒットラー内閣のユダヤ人壓迫は、少し狂氣染みてゐるが、かうした出來事は、異常な事であつて、最近のドイツは、必ずしもユダヤ人を極端に迫害はしてゐなかつた。もちろん、ドイツあたりでは、數世紀に亙るユダヤ人への反感があつて、ユダヤ教に對する差別待遇、ユダヤ人の風習に對する侮辱等が、亦るぶん長い間習性になつてゐる。古いことをいへば、マホメット教徒が、一四五三年にコンスタンチノーブルを占領した頃から、ユダヤ人を非常に恐怖するやうになつた

ことは、疑ふことが出來ない。それはマホメット教徒とユダヤ教徒が、ほとんど同じやうな信仰を持つてゐるからであつたらう。東方のマホメット教徒、殊にペルシヤのマホメット教徒は、ユダヤ教徒には非常に寛容であつた。實際、マホメット教の經典は、ユダヤ人の聖書である『舊約聖書』の焼直しであるといつて差支へないのである。マホメット教徒の神聖な場所が四ヶ所ある。それはメッカとメシナとヘbronとエルサレムである。後の二つはユダヤの國にある。アラビヤ人は、ユダヤ人と同じ系統の言葉を持つて居り、おそらく同じ系統の人種であらう。その上、マホメット教に於いては、アブラハム、イサク、ヤコブを非常に尊敬する。彼等はみなユダヤ人である。アブラハム、イサク、ヤコブの墓は、マホメット教徒が最も神聖な場所としてゐる。かうした關係でもあらう、マホメット教が歐洲に浸入すると共に、ユダヤ人の追放令が出た。それは一八二〇年の事であつた。

ロシアに於ける迫害

舊ロシアの地域内のユダヤ人は、その數に於いて頗る多く、約五百萬人以上を數へてゐる。ユダヤ人がロシアに移住し始めたのは、一七九一年であることになつてゐる。しかし、一八八二年には、ノブゴロッドの虐殺があり、一九〇七年、日露戦争直後、キシニエフに於いて、大きな虐殺があつたりして、ギリシヤ教徒のユダヤ人迫害の歴史は、全く血なまぐさい。

歐洲大戦後、そのユダヤ人の大部分が、ポーランド國境内に生活するやうになつたので、ポーランドでも、ユダヤ人の問題は大きな問題として、なほ解けずにある。ルーマニヤに於いても、ユダヤ人の差別待遇は、ロシアに於いてと同様である。殊に、ユダヤ人があまりに賢い民族であるために、彼等の地位が高まつてくれば来るほど、嫉妬心を起して、ユダヤ人を迫害することは、まことに氣の毒なことである。

ユダヤ人迫害の歴史

全く、ユダヤ人の歴史は迫害の歴史であり、それは血の歴史である。紀元前一六〇〇年頃、ペルシャ灣に近いカルデヤのウルを出發したアブラハムの一族は、僅か七十二人の遊牧團體であつたが、三千五百年の後に、千五百万に近い大民族となつたのである。彼等は、その民族の出發の時から、放浪民族として運命づけられてゐる如く考へられる。彼等が饑饉に追はれて、エジプトに移民すれば、わづか四百年後に壯丁六十萬を持つだけの大民族に増加した。エジプト王はこれを迫害して、あらゆる壓制を加へた。つひに彼等は、沙漠に逃げ込んで、四十年間アラビヤ沙漠に彷徨し、みづから奴隷解放の運動に成功した。しかし、辛うじて獨立國を組織したユダヤ民族は、勢力争ひのために南北朝に分裂し、イスラエル北朝は紀元前七二二年に滅亡し、南朝は紀元前五八六年に滅亡した。そして、これらの散らされたユダヤ民族は、或る者はエジプトに逃げ、

或る者は地中海の沿岸に落ちのび、東に逃げてきたものは、支那河南省あたりまでやつて來てゐる。米國宣教師スミス氏の記載によると、河南省に逃げてきたユダヤ人は、いまだに『舊約聖書』の破本を持つてゐるさうである。それは兎に角として、ユダヤ人が世界的に散らされた事實は、まことに悲惨なものであつた。

ユダヤ人の叛逆性

その後彼等は、再びクロス王の解放令によつて、地中海の東岸、パレスチナに歸つたが、こんどはまた、マケドニヤの大王アレキサンダーの馬蹄に蹂躪せられた。しかし、また、約二百年間マカベ王朝の下で獨立國家を持つてゐるが、ジュリアス・シーザーのために、ローマ帝國の屬國にせられた。

ユダヤ人迫害の偏見が、歐洲人に根強く植ゑられたのは、ローマ政府がユダヤ人の叛亂に懲りたからであつた。實際ユダヤ人の血のうちには、天才的の分子が多分にあると共に、武力で征服出來にくい叛逆的精神が盛られてゐる。その最もよき例として、『舊約聖書』に残つてゐる列王記略を読むがよい。イスラエル北朝には、わづか十九代の王の間に、革命が九回あつた。それがみな成功して、後にはみな倒されてしまつた。このしつこい革命的精神が、ローマ時代に特に強く働いたらしいのであつた。そして、この革命的精神が、ユダヤ教と相關關係を持つてゐるから、

なほ熱情的であつた。

ユダヤの國からユダヤ人の最後の影が見えなくなつたのは、紀元一三五年、約五十八萬人のユダヤ人が虐殺せられた後であつた。この時の革命は、バルコキバが指導したのであつたが、彼等の元氣のいいことには全くびつくりさせられるほどである。

それまでに、革命は幾十回も繰返されてゐる。『新約聖書』の使徒行傳にも二つ書いてあるし、ヨセフスの『ユダヤ古代史』には、キリストの在世中にも、アスロンゲスの革命があつたことを書いてゐる。キリストも、革命の指導者に推されたことは、『新約聖書』ヨハネ傳第六章十五節に出てゐる。しかしキリストは、このユダヤ人の革命主義的缺點を知つてゐたためか、永遠の國と、絶對の愛を指差して革命を避けた。しかし、その後にも、革命は次から次に起つた。そのうちで最も大きいものは、二十年間ユダヤの國であばれた革命的馬賊エリーザであつた。

不幸にして、かうした結果が、皇帝クラウデオのユダヤ人追放令となつた。〔『新約聖書』使徒行傳第十八章二節〕恐らくこれが、ローマ帝國に於けるユダヤ人追放令の最初であつたらうが、革命的ユダヤ人は、そんなことではへこまなかつた。ヨセフスの書いた『ユダヤ戦争史』を読むと、彼等の革命熱のはげしいことには全く驚かされる。たまたま、ヘロデ大王が築港したカイザリヤ港の問題から、ギリシヤ人とユダヤ人との鬭争が起り、ユダヤ人はカイザリヤをユダヤ人のものと主張し、ギリシヤ人はこれを自己のものとして主張し、皇帝ネロがギリシヤ人に加擔したた

めに、革命となつた。そして遂に、紀元七十年七月十七日、エルサレムはローマ軍に蹂躪せられ、八月十日に至つて、ヘロデ大王が數億圓を費して建造したエルサレムの神殿は燃えてしまつた。その時の虐殺は、想像も出来ないほど大きなものであつて、數百萬人が殺されたらうと考へられてゐる。

かくしてエルサレムを失つたユダヤ人は、エジプトに逃れて神殿を造るものがあり、バビロンに逃れて定住する者があり、思ひ思ひに、安住の地を求めて世界中に散つた。エジプトに逃れたユダヤ人は、トラジアン皇帝の時に、革命を企てて自らの王を選んだこともあつた。そのために、またユダヤ人の迫害が起つた。

かうして最後の斷末魔がやつてきた。即ち、ドミティアン皇帝以後、ユダヤ人の政治結社の迫害のみならず、思想運動にまで暴壓を加へ、紀元一三二年頃、ハドリアン皇帝がユダヤ人の割禮を禁止した結果、再び、ユダヤ國に於けるユダヤ人が叛逆するに至つた。その指導者はアキバと稱する祭司であつて、彼は二年半の間、エルサレムで獨立國を組織してゐた。しかし遂に、紀元一三五年に到つて、ユダヤの國は人影さへ見ないほど荒れるやうになつた。

私は、一九二五年六月、ユダヤの國を訪問した時、嘗てキリストが住んでゐられたカペナウムを訪れて、カペナウムの教會堂が、紀元一三五年頃に倒れたまま遺つてゐるのを見て、びつくりしたやうなことであつた。ユダヤは沙漠地であるために、空氣が乾燥してゐて、一八〇〇年前に

倒れた建築物でも、昨日地震で倒れたやうな感じを與へた。またエルサレムにも、ハドリアン皇帝の時代に出來た兵舎といふのが、そのまま遺つてゐる。

しかし、ローマ帝國の政策は、暴壓の一本調子ではなかつた。キリスト教徒に對する迫害なども、約三百年間に、前後十回の大きな虐殺があつたけれども、必ずしも、連續的の迫害はなかつた。同様に、ユダヤ人に對しても、その迫害は非連續的であつた。否、その中間の期間に於いては、多少の自由さへ持つてゐる時があつた。カリカラ皇帝の時の如き、彼等は相當に手足を伸ばして、ローマ帝國内に安住してゐた。しかし、セオドシアス二世の頃からは、安住はしてゐたが、差別待遇を受けるに到つた。即ち、クリスチャンとの結婚を禁止せられ、クリスチャンの奴隸を使用することを禁止せられた。

ヂアスチニアン皇帝（五二七—五六五年）の時に到つて、ユダヤ人は、思想的干渉を受けるやうになつた。そして五三七年の法令によつて、ユダヤ人の宗教法律にまで干渉をし、極端な差別待遇を実施するにいたつた。そしてホロニアス帝の時代になつて、ユダヤ人は凡ての公職に就いて特權を奪はれてしまつた。

バビロンに逃れたユダヤ人は、ユーフラテス川とチグリス川との間の平野を占領して、非常に幸福な生活を續けてゐた。彼等は、ペルシヤ人に愛せられ、文化も進み、二つの大學をさへ紀元十一世紀頃まで持つてゐた。その二つの大學といふのは、紀元二一九年頃に創立されたストラ大學

とネハドリア大學であつた。大學はまた一つの議會でもあつて、政治的にも他民族から掣肘をうけないで、獨立してゐた。マホメット教が傳播しても、バグダッドの王は、ユダヤ人に非常に寛容であつたために、彼等はすぐれた勢力を持つことが出來た。實際ユダヤ人は不思議な民族であつて、紀元前七二二年に北朝が滅亡し、紀元前五八六年に南朝が滅亡した時でも、捕虜になつて行つたダニエルは、副王の位置になり、ユダヤ人の娘のエステルは女王の地位にあげられた。そして、約千二百年後のユダヤ人が、ペルシヤに於いて同じ地位にのぼつたのであつた。

しかし、回教徒の他の地方に於いては、こんなに巧いかなかつた。彼等は、激しく迫害せられて、ずるぶん困つた。

ラチン諸國に於けるユダヤ人と迫害

しかし、皇帝シャルマンがユダヤ人に寛容であつたために、そして後には回教徒がスペインに浸入したために、ユダヤ人は抵抗の弱い處へ浸入して行つた。そして、スペインは、ユダヤ人文化の中世紀に於ける中心地になつた。哲人スピノザの思想的父とも考へてよいナモニデスは、スペインのユダヤ系詩人であつた。スペインに宗教裁判が盛んになると共に、ユダヤ人は、信仰の自由を失ひ、マラニズムと稱する信仰を持つやうになつた。マラニズムといふのは、日本の天主教徒が徳川時代に九州平戸で、カムフラージしてゐた宗教に似てゐる。彼等は表面上キリスト教

で、裏面はユダヤ教徒であつた。

オランダ政府が宗教改革以後、喜んで彼等を歓迎したので、スペインのユダヤ人は群をなしてオランダに移住した。

しかし、悲しいかな、マホメット教の歐洲侵入が熾烈になつた時に、十字軍の捲添へをくつて、ユダヤ人は中央ヨーロッパ、ラインランドに於いて、一〇九六年激しい虐殺に遭つた。この頃は、英國に於いてすら迫害があつたといふことである。この迫害を見るに堪へないで、クラルボアの聖者ベルナードは、ユダヤ人解放運動を起したといふことである。

これより先、ユダヤ人は、紀元九世紀、ルイ敬虔王の時代に非常な幸福な自由を味つてゐた。しかし、ユダヤ人が、多妻制度を實行してゐたために、紀元十一世紀に差別待遇をうけるやうになつた。そしてそれがだんだん醗酵して、紀元一一九〇年、公然ユダヤ人の排斥が始まり、紀元一二一八年には、リチャード一世によつて、ユダヤ人に徽章を佩用することを命令するに到つた。十字軍が起るに到つて、この差別待遇は更に激しくなり、第二十字軍の時には、法王インノセント三世が、ユダヤ人に對する差別待遇を宣告して、凡てのユダヤ人は徽章を佩用すべきことを法律によつて命令した。

フランスに於いては、フィリップ四世が、十四世紀の初頭(一三〇六年)ユダヤ人追放令を發布した。それより九年後、ルイ十世が呼び歸したが、一三九四年、第二回目の峻烈な追放令が出た。

十四世紀の中葉(一三四八—一三四九年)に起つた黒死病は、ユダヤ人が井戸に毒を入れたためだといふ風説が傳はつて、ユダヤ人は、歐洲各地で大虐殺に遭つた。これは、英國に於いてもドイツに於いても同じことであつた。

しかし、イタリアに於いては、法王廳がユダヤ人に對して比較的寛容であつたために、彼等は極端な差別待遇をうけなかつた。しかし間もなく差別待遇をうける理由が出来た。それは、法王廳が資本主義的搾取を禁止し、キリスト教信徒に對して絶対に禁止されてゐた金貸業を、彼等が進んで營むやうになつたことであつた。セキスピアの『ヴェニス商人』を讀んでみると、ユダヤ人シャイロックが、強慾非道な金貸業として、人肉をすら削つて持つて歸るやうな冷酷な人物として描かれてゐる。かうした態度が、ユダヤ人の嫌はれるやうになつた理由の大きなものであらうと思ふ。

ユダヤ人の解放

ユダヤ人がヨーロッパで自由を得るやうになつたのは、宗教革命以後のことである。一五七九年ユートレヒトの同盟が結ばれて以後、ユダヤ人に比較的的自由が與へられた。十七世紀になつて、英國の屬領では、ユダヤ人の自由が絶対に認められるに到つた。今日でも、英國の屬領内には、四百萬人に近いユダヤ人が住んでゐる。そして地方によつては、屬領地の總理大臣になつてゐる

者もある。その系統は主としてスペイン系のユダヤ人である。

モセス・メンデルソン（一七二九——一七八六年）が、ユダヤ教のために改革運動を起したのは、十八世紀の中葉であつたが、この運動は、ヨーロッパ諸國民に非常にいい感じを與へた。この運動のために、ユダヤ人の間で、寄留地に定住しようといふ精神をおこした者が澤山出た。

時恰も、ペルシャ在住のユダヤ人の間に、みづからメシアと稱して、ユダヤ國再建設運動を始めたサバタイといふ男があつた。そのためにヨーロッパのユダヤ人は熱狂して、メンデルソンの歸化運動を馬鹿にして、ユダヤ王國建設を夢みた者も多かつた。ところが、この自稱メシアのサバタイが、いざといふ瞬間に、マホメット教に降参して、命を助けて貰へば、マホメット教信者になるといひ出した。これが、歐洲に於けるユダヤ人の目の開く一大動機になつて、もはや、ユダヤ帝國の建設などといふことは、考へない者が多くなつた。

その頃である。オランダ政府は、斷然ユダヤ人に絶對の自由を與へ、公職は勿論のこと、議員にする資格すら與へた。それに續いて、ナポレオンは一八〇七年にユダヤ人に部分的の自由を與へ、一八二一年、ギリシャのユダヤ人に對する宗教裁判がなくなり、一八一五年、ベルギーはユダヤ人に自由を與へ、一八五八年、スペインはユダヤ人の差別待遇を撤廢し、その翌年、イタリ

ーは同じ態度に出るに到つた。

のフランス革命の影響を受けて、フランスが市民平等の建前から差別待遇の制度を撤廢すると共に、デンマークでも、ユダヤ人に對してデンマーク人と同様の權利を賦與した。

スキツランドでは、ユダヤ人が動物を殺す方法について賛成しがたいといふので、他の諸國が自由を與へてゐるに拘らず、一八七四年まで、ユダヤ人に平等權を認めなかつたが、遂にその年に平等の權利を國家として保證した。

ユダヤ人のシオン運動

サバタイの失敗によつて、一時忘れられてゐたユダヤ帝國の夢想が、一八七五年、セオドル・ヘルチエルによつて、再び盛り返された。これが有名な Zionism 運動として知られたものである。この運動は、神の力によつて、必ずユダヤ民族がユダヤに復し得ることを信するものである。しかし、このシオン運動は、メンデルソンのやうな歸化論者や、米國に於けるラビ・ワイズのやうな自由主義のユダヤ人の間には非常に評判が悪く、ユダヤ人の間に故國に歸らうといふやうな考へを持つてゐる者は非常に少いことがだんだん解つてきた。

一九二五年、私がユダヤの國を訪問した時に、ガラリヤ湖畔のタイベリヤスの宿で、私は、シオン運動の指導者としてユダヤに歸つてきてゐるユダヤ系の英國婦人に逢つた。その婦人の云うてゐることによつても、シオン運動が、決して列國に散在するユダヤ人の間に大きな力を持つて

ゐないといふことがわかつた。寄附金も思つたほど集まらず、ユダヤに移住しようとする人々も存外少く、ユダヤに於けるユダヤ人の人口は、五萬人を少し超したただけであつた。殊に、寄附金があまり寄らないとわかつて來ると共に、共產主義の理想で始めたシオン運動が、共產主義を離脱して、協同組合化しつつあることを知り得て、非常に面白く私は思つた。寄附金を受けてゐる間は、消費的共產主義を實行してゐたが、寄附金が止まると共に、自らの勤勞によつて生活しなければならなくなり、ここに勞働能率の差等が生じ、怠惰者と勤勉者との間に意見の衝突が起り、不生産的共產主義はもはや實行出來ないといふことがわかつた。その結果、シオン運動の約八十あつた共產村が、約半分まで協同組合的經營の村に變つてしまつたといふことを私は聞かされた。可哀さうなのはユダヤ人である。理想的な國家をつくらうと思つて、沙漠にも等しい荒野に歸つてくるや否や、人口約七十五萬くらゐあるユダヤ土著のアラビヤ人のために、虐待されるといふ困難に直面した。これは、最近十年間引續いて起つてゐる現象であつて、おそらく、英國政府もこのアラビヤ人の主張を暴壓出來ないであらう。なぜならば、これらのアラビヤ人は、全部マホメット教徒であるために、あまり、彼等を壓迫すれば、英國屬領地内に於けるマホメット教徒が沈黙してゐないからである。

一九一四年八月に始まつた歐洲大戰に際して、英國人は、その領土内に居住する約四百萬人のユダヤ人と、世界に散在する千萬人以上のユダヤ人の歡心を買ふために、パレスチナの聖地をユ

ダヤ人に解放する旨を宣言した。その約束は、戦争がすんでもまだ實行されなかつたが、一九二四年、バルファ卿は自らパレスチナを訪問して、アラビヤ人の反對を押し切り、シオン運動に徹底的援助を與へることを約した。

しかし、ユダヤの國は、雨量の少い處である。二月と十月にしか雨の降らない國であつて、今のままでは、到底數百萬の人口を抱擁するだけの面積はない。況んや千五百萬人に近いユダヤ人を容れるとしては、あまりに狭すぎる。パレスチナは九州より狭く、四國よりやや大きいだけの面積しかない。九州には人口が八百萬人這入つてゐるが、決してゆつくりしてゐるとはいへない。それであるから、千五百萬人も容れようとするなら、今のパレスチナの三倍あつても足りないであらう。

これを知つてゐる世界のユダヤ民族は、必ずしも、地上のユダヤを理想國とは考へてゐないのである。そこで、世界列國に、自由派のユダヤ神學校が建てられ、『舊約聖書』の約束を精神的にとり、シオン山の回復といふものを（シオンといふのは、ダビデが最初神の神殿を建造した山のことである）精神的に理解して、決して地理的には考へなくなつてゐるのである。

實際、私は、ダビデが最初神殿を造つたといはれるシオン山を訪れたが、そこは實に狭い猫の額のやうな處で、どうして理想の國家が建てられるかと思はれるほど狭い感じを與へられた。

勿論、今でも正統派のユダヤ人は、エルサレムの城壁の一部分に接吻して、毎金曜日にエレミ

ヤの作つた哀歌の一節を泣きながら唱へることを希望してゐるだらう。最近の報道によると、アラビヤ人が、この祈の場所に飛び込んで行つて、ユダヤ人の數人を虐殺したといふことである。それで、千幾百年祈りつづけて來たこの有名な祈の場所が、臨時政府の命令によつて、閉鎖されてゐるといふことも私は聞いた。

私は、その祈の場所へ行つて、ユダヤ人の泣いてゐる姿を見て心から同情したが、徒らに地理的回復を祈ることは、一種の偶像教であるやうな氣がした。キリストは、「わが國はこの世のものならず」(『新約聖書』ヨハネ傳十八章三十六節)といはれたが、ユダヤ人が、このことを理解しない間は、ユダヤ民族の國權回復運動は、なほ續くであらう。

ユダヤ人の天才と迫害の理由

實際、ユダヤ人ほど世界に於いて氣の毒な人種はない。歐洲には、ジプシーと稱する放浪種族がある。この種族はインドから出た蒙古系統の人種であるさうだが、智能が優れてゐないために、大問題を起さない。しかしユダヤ人は、歐洲人に劣らない、否、時によると歐洲人以上の智能を持つてゐるために、いつも大問題を惹き起す。こんどのドイツに於けるナチスのユダヤ人迫害の如きがそれである。しかしこのユダヤ人迫害の理由を研究してみるに、ユダヤ人の方に於いても大いに反省しなければならぬ點があらうと思ふ。その理由は、宗教的理由といふよりか、道徳的

理由であると思はれる。例へば、キリスト教徒が資本主義に反對して金貨業を禁止してゐた中世紀には、金貨を遠慮すればいいものを、シャイロックになつた。

キリスト教信者が一夫一婦主義を原則としてゐるのであるから、その風習に準ずればいいものを、相變らず、マホメット教と同じやうに、一夫多妻主義で押し通したやうなこと等が、最も悲しい理由として擧げられる。

ロシアに於ける迫害の如きも多くはかういふ點から、大衆の憤怒を買つたことに原因があるやうである。しかしその根柢には、ユダヤ人の宗教が愛の宗教ではなく、マホメット教の如く、排他的唯一神教であるために、他の人々と同化出來ないといふ缺點がないではない。その傾向が、宗教的叛逆となつて現れ、ローマ政府の迫害を被るに到つたのである。同じ唯一神教でも、愛に出發したキリスト教はローマ帝國を征服し、民族宗教に出發して民族宗教で終つてゐるユダヤ教は、人を排斥するために自らも排斥されるといふ状態になつてゐる。

國粹的民族宗教主義者は、このユダヤ教の傾向を見て、大いに反省すべきだと思ふ。ナチスの誤謬もそこにあつて、彼等は、あまりにも民族主義的であるために、ユダヤ人が過去に嘗めてきた誤謬をまた繰返さんとしてゐる。私は、キリスト教徒が、ユダヤ人を迫害したことは間違つてゐると思ふ。しかし、ユダヤ人自身も大いに反省するところがなければならぬと考へてゐる。

最後に、私はユダヤ民族の迫害史を臆想して、東洋ではこの迫害史を繰返さないことを希望す

るものである。最近、日本の或る宣傳屋は、ユダヤ人の陰謀と稱して、いかにもユダヤ人が日本に對して敵意を持つてゐるかの如く宣傳して廻つてゐる。私は、かうした皮相な誤解こそ兩者を悲しい運命に導くものであると思ふ。ユダヤ民族史を深く研究する者にとつては、かうした誤解は、一考の價值さへ無いのである。先に述べた如くに、シオン運動に對してすら熱心でないユダヤ人が、どうして世界統一など考へる餘地があるだらうか。世界統一などいふものは、少數の放浪民族によつて計畫されるものではない。我々は飽くまで英米や北歐の例に倣つて、ユダヤ人に對して寛容にし、共に相愛して、ユダヤ人が長年求めてやまない地上の理想國を建設すべきだと思ふ。

樹木農業の創始者ラッセル・スミス

一九三一年の秋の事であつた。私は、ジョン・ラッセル・スミス教授に、米國フィラデルフィアの近郊ペンデルヒルで會つた。彼はまだ年若く、四十近い、中背の人であつたが、非常に氣持のよい印象をうけた。私はその時まで、彼が非戰論で有名なクエーカー派の一團に屬する人とは知らなかつた。私は偶然食糧問題の研究から、彼の書物を手に入れた。そして彼が、地球の表面に於ける食糧の凡てに就いて、くはしく知つてゐることに畏敬の念を感じた。その後間もなく、日本に於ける食糧問題が沸騰してきたので、日本の識者階級に訴へようと思つて、私は友人の力を借りて彼の書物を翻譯した。その書物の末尾では、食糧問題の最後の解決は、樹木作物にあることが高調されてゐた。

しかし、その短い論文では、樹木農業の實際問題について、くはしくわれわれに報告してくれなかつた。ところが、最近になつて、彼は米國の領土を基礎にして、くはしい樹木作物の調査を發表した。私はその書物を讀んで非常に感心した。彼の主張によれば、人間及び家畜の食物とし

ての蛋白、脂肪、ビタミンは、いづれも完全に、粟、胡桃、椎、アルゼローバ、蝗豆、ヒッコリ
一等の樹木作物によつて得られる事を主張してゐる。

彼は哲學的に樹木作物の必要を回想して、エデンの花園の滅亡も、米國の農耕地の荒廢も、樹
木農業に目がつかなかつた點にあると考へてゐる。

最近、日本の莊園が、經濟的に保たなくなつたために、山村の農業者が、胡桃や栗の栽培に考
へを移してきたが、ラッセル・スミスが、科學的にかうした事を二十年前から唱道してゐたこと
を、私は書物の上で知つて、感心してゐるのである。最近、日本に於ける林學界の權威本多靜六
博士の如きも、樹木農業の必要を高調して、これを「高級林業」と云つてゐられる。本多先生の
意見によると、草木の農業は、著しく發達したが、樹木の農業は未完成のまま捨てられてゐる。
が、稻や麥に加へられる努力を、樹木作物に施すなら、確かに、日本の面積の八割五分を占める
山林食糧の一大資源に變化することは明かである。ラッセル・スミスの云ふのが面白い。マルサ
スの人口論のやうな氣持で、食糧問題を考へる必要は少しもない。食物を立體的に樹木から收穫
するやうにすれば、地球の表面の人口が、ますます倍になつても、食ふべき食物はいくらでもあ
る、といふのである。彼は更にいふ。世界の國家が軍備に使ふ金を食糧資源の開發に使用すれば、
人口の増加などは全く心配するに當らない、と。

さういふ立場から、地球表面の食糧資源を樹木から得ることにすれば、穀斗科、荳科、胡桃科、

松柏科、枹科など五十數種類の果實は、人類の生命保存のために、この上なき資源を提供してく
れるのみならず、家畜の飼料としても、われわれに賣の庫を開いてくれる。私は、ラッセル・ス
ミスの考へ方を以て、窮乏した日本の山村の救済を設計すれば、どん底に沈んでゐる山奥の柚人
も忽ちに更生すると思ふ。實際、ラッセル・スミスの調査によつても、ハワイの島などの家畜飼
料は、數十年前、天主教の宣教師が、南米からハワイに輸入した荳科の大木アルゼローバによる
ことがよく解る。アルゼローバは、一年間に花を三度咲かせ、約十石の豆が十五年生の一本の樹
から穫れる。ラッセル・スミスによれば、こんな珍しい樹は、世界にもあまりないといふことで
ある。もし沖繩縣などにこの木が移入出來て、その果が豚の飼育に使用出來るなら、沖繩縣は救
はれる譯である。

最近日本の各大學の教授たちが、だんだんこの方面に目覺めつつあるが、私は、ラッセル・ス
ミスが經濟地理學の専門家として、新しい農業の出發へ、われわれを指導してくれることは、實
に有難いことだと思ふ。

科學的互助愛による自力更生

空地の利用

遅れてゐる農村の自力更生は、なかなか容易ではない。殊に、土地を持つてゐない地方の自力更生は、三つの方法をとるより仕方がない。第一は、村から少し離れてゐる處でもかまはない、自轉車に乗つてそこを開發に行くこと、第二は勞力をもつて立つこと、第三は、協同組織によつて、立體的に伸び上ることである。

現に、大阪府三島郡山田村の二十七戸の小作人は、數前年に耕作してゐた土地全部を地主に取上げられた。その時彼等は奮發して養鶏組合を作り、その飼料をつくる畑を數里離れた處に經營してゐる。これなどはその一例である。

日本の農村には悪い癖があつて、元氣よく自轉車に乗つて遠くへ耕しに行かない處が多い。文明の利器を利用して、山でも川縁でも、空いてゐる土地はほとんど耕作する方法を考へたらしい

と思ふ。殊に、空地利用を忘れてはならない。蜜柑、柿、胡桃、梨、無花果、杏等はすぐ相當の收益が上るから、かうした樹木收穫を計畫し、山では山羊や豚を飼ふやうな方法をとるのが必要だと思ふ。山羊を飼ふことは最も必要なことである。人間が笹を食ふ代りに、山羊に笹を食つてもらつて、山羊の乳を絞つて飲めば、人間が笹を食ふのと同様である。

山羊は貧乏人の友達だと昔からいはれてゐる。大いに山羊を利用する必要がある。

内地でも、まだ漁業なり、山林開拓なり、いくらでも生きてゆく方法はある。どしどし自然を征服するつもりで發展的な努力をする必要がある。海岸の狭い處などでも、少し氣長にやれば、深い處にイタボ蠣を養殖し、その水面では海老を、伊豆地方でやつてゐるやうな方法で十分養殖が出来る。灣の深い處は適當の工夫によつて、鯛の養殖さへ困難でないと思へられる。さういふ風に、常に土地を立體的に利用する工夫を考へなければならぬ。

支那の移民に學べ

しかし、土地が得られなければ、勞力を惜しまずに働くより道はない。失業時代であるから、人が使つてくれなければ仕方がないが、支那人が移民するやうな方法でやれば、食つて行くには困らない筈である。支那人は移民するときには、まづ雄雌の鶏數羽と、豚の雄雌を持つて、山へでも何處へでも行つて、そこに小屋を造り、玉蜀黍を播き、粟を播き、豚を飼ふ。そしてその間

の食糧は毎日鶏が生んでくれる卵を食ひ、玉蜀黍が大きくなる三四ヶ月の間、友人から貸して貰つた食糧で饑ゑを凌ぐ。暫くして豚が大きくなり、雛が大きくなると、もう占めたものである。彼等は骨身を惜しまずに原野を開墾して、食ふだけの物を造つてゆく。滿洲を開拓してゐる山東の苦力は、多くこの調子で移住した連中である。日本には、三百五十萬町歩の原野が、まだ内地だけにでも捨てられてゐるのだから、食ふだけのことが氣にかかれば、山東移民の調子で、かうした原野に引越しすればよいと私は思つてゐる。それに對して勞力を惜しんではならぬと私は思ふ。

これは世界の移民が皆經驗する初歩のやり方であつて、勞力を惜しまなければ、決して飢ゑるものではない。

しかし、金儲けをするためにさうしてはならない。金儲けが出来るやうになるには、少くとも三四年はかかる。

以上は主として個人的に自力更生する場合であるが、社會的に自力更生しようと思へば、協同組合の道をとるよりほかはない。

科學的相互愛に生きよ

不良少年が團體を作るやうなつもりで、善良青年或ひは氣の合ふ同志數人が、互助組織をする

ことを契ひ、經濟を共にし、勞力を分ち、協同經營をすれば、必ず食ふ道は開けるものである。これは生産方面で特に著しい効果を納めることが出来る。また消費組合に於いても同様であり、信用、販賣、共濟の各組織に就いても同様のことがいへる。農村に醫者がないといつて困つてゐるけれども、醫療利用組合を作れば、醫者などは容易に農村に来て貰ふことが出来る。

科學的努力と互助愛の精神が、農村にどれくらゐ實現せられるかによつて、自力更生の方針は決る。

隠れた善事

神戸の新川細民街に私が生活してゐた時、一人の青年労働者と知己になりました。青年は瑛瑯鍋の熟練工でありました。父がゐない彼は、まだ丁年に充たないが、既に一家の柱石となつて、病身の母と虚弱な弟と幼い弟妹の扶養の責任を負うて居りました。

細民街だけに、周囲には、犯罪者、無頼漢、酒飲み、不良青年が多いなかに、その青年は全く異彩を放つてゐました。悪習に浸らないのみでなく、進んで他の青年たちに範を垂れてゐました。その中でも、更にその念を強くさせられたのは、彼が誰にも語らずに、その街の貧困な一理髪業者に十圓を與へてゐた事でありました。十圓といへば、多額な金ではない。しかし彼の半月の給料に近い額である。それを惜し気もなく彼は散髪屋の一家救済のために毎月與へてゐたのです。私は餘程後に、恵まれた人からそれをきいて、青年の陰徳を賞讃したのでありました。

何が、彼にかうした美しい事をなさしめたか。それには一つの動機がありました。彼がまだ少年の時でした。或る冬の朝、彼は工場に通勤の道すがら、あまりの寒気に小さい両手を自分の息

で暖めながら歩いてゐました。と、向うからやつて来た一人の中年の婦人が、この少年労働者を可哀さうに思つたのでせう、風呂敷に包んでゐた焼きたての芋を彼の小さい掌に與へました。思ひがけなく暖い同情を得て、少年の心は燃えました。苦しい世の中にも、人の情はあるものだと、心に深く感銘しました。

この感激が、あの青年の胸から、社會の下層階級に向つて美しい行爲として表れるのでありました。

後年、彼は神戸市の労働紹介所主任となりました。そして十數年後の今日なほ、労働者の福利増進のために、日夜心血を注いでゐます。

先頃、現職を辭さうとしたとき、彼を慈父の如く慕ふ労働者は、心からその留任を望み、四千の労働者は連名調印して嘆願書を提出しました。これに依つても、彼の人格徳望を窺ひ知ることが出来ます。

物質の彼方への信號

魂よ、お前は、どうしてこんな不思議な世界に生きてゐるのだ。お前は、狭い世界に圍まれて、呼吸のつまるやうな生活をつづけてゐるが、目を睜つて、お前の周圍を見よ。そこには、土と、雑草と、松と、笹と、小鳥と、花と、星が、おまへの番をしてゐるではないか。おまへが別に頼みもしないのに、それらのものは、みんな、おまへを取巻いて、おまへに面白い通信をしてゐるではないか。だから、おまへは、おまへ以上の不思議なものがあることを否定出來ないだらう。それらのものは、絶對の可能性によつてつくり出されたものである。それどころではない。おまへそれ自身の存在が、絶對の可能者の力によつて生れたことを忘れてはならない。

言葉で盡せない神祕が、物質といふ扉の向うから信號してゐるやうに、私には響く。ああ、どうして私は、こんな不思議な世界に生れたのだらう。

常識による環境の支配

知識の限度

引力の發見者ニュートンは、われわれの知識を、大洋を前にして、岸邊に池を掘る子供等に譬へた。われわれの知識は、その子等が掘る砂の池にも等しいのだ——小池に這入つた僅かの水を、われわれが喜んでゐるうちに、大洋は涯しなく擴がつてゆく。ああ、何といふ貧弱さだらう。それを思ふと、われわれは無限の世界を前にして、おのづから頭が下る。

世界の榮華を極めたといふあのソロモンも、神から、お前の要求は何でもきいてやるから、思つてゐることを祈れといはれた時、

「神よ、智慧を與へ給へ！」

と祈つたさうである。私も同じ祈を、今日も繰返したい。

私は、天の星のことが知りたい。風の流れと、雲の形の物語る意味と、土と、小石と、砂の教

へてくれる地球の歴史に就て學びたい。それよりも、私は、路傍の草木の名が知りたい。その生活様式と、花の進化と、植物進化の方向が知りたい。植物學者は、局部局部を教へてくれるけれども、私の知りたいのは、宇宙の進化の方向に關係を持つてゐる植物進化の歴史である。

なぜ、ペンペン草は、三味線の「ばち」のやうな奇妙なものを幾十となくつけてゐるか？ なぜ、無心の植物に、花といふ戀愛の表象が現れてきたか？ 私は知りたい、知りたい。裸子植物が、なぜ針葉樹に多いか？ なぜ或る木は葉が廣くて、なぜ或る木は葉が針になつてゐるか？

昆蟲の本能

私は知りたい、知りたい。昆蟲は、人間のやうに、機械を發明しないのに、あの小さい身體で飛ぶことも出来れば、水中にもぐることも出来る、土中にも穴を掘れば、蛹のやうに假死状態にはひることも出来る。

或る生物學者は、それらの状態を見て、ただ機械的にのみ解釋せんとしてゐる。しかし私は、源五郎蟲が空中に飛び上る翅を利用して、すぐ水中にもぐる潜水設備に變轉し得る不思議を、ただ機械的だとは思へない。不思議だ、不思議だ。昆蟲の變態は不思議だ。ラボックは、昆蟲の變態は地球の歴史に關係があると、われわれに暗示する。

さうかも知れない。地球に大變動があつて、毛蟲として棲息し難い時代があつたために、昆蟲

は、長く蛹の形態をとつたのかも知れない。それにしても、誰が、あのやうな不思議な生命保存の秘訣を教へたらうか？

なぜ、蜜蜂は、産兒制限の方法を知つて居り、雄を生む時には、處女懷胎の神祕をそのまま實現し、雌を生む時には、なぜ雄の精蟲を交へるだらうか？ どうして、蜜蜂の女王は、雄蜂の精蟲を、特別な袋に貯藏する秘訣を憶えたらうか？

或る學者は昆蟲の生活は地球の表面に於いて長いから、本能的に生活を支配する力を知つたのだと云つてゐる。それが私には不思議でたまらない。なぜ、人間には、昆蟲の持つてゐる本能が與へられてゐないだらうか？ 人間は飛行機を持たなければ飛べないが、昆蟲は、翅をもつて飛ぶことが出来る。人間の知識より、昆蟲の本能の方が、遙かに優れてゐるかの如く見える。なぜ本能といふものは、そんなに賢く芽生えるであらうか？

昆蟲ばかりに限らない。私は、遺傳の法則をもう少し深く知りたい。更に、突發趨移の季節と、方法と、傾向について知りたい。

絶えざる疑問

鳥に就いて知りたい。なぜ、孔雀が、あの美しい羽毛を選んだか？ なぜ、鳥の卵が、短時間の間に、形のない無生の世界から、有生の世界に甦つてくるか？ 私は更に、海の魚について知

りたい。うなぎが、どこで育ち、どこからどうして川に上つてくるか？ 私は、鯉が産卵する場所を知りたい。鮪と鯛の巣を知りたい。私は魚の心理を知りたい。

知識慾

私は、人間が知りたい。なぜ、人間が、こんな澤山の人種になつたか？ なぜ、経済がかく混乱するか？ 私は、人間が耕作する農業につき、人間が發明する工業に就き、知りたいことばかりである。

しかし、私は、知識だけでは、満足出来ない。私は、過去に就いての知識よりか、未來の鍵を開く智慧が持ちたい。私は、ノートブックに頼らなければ、機械の据附けが出来ないやうな大學式知識は欲しくない。ノートが無くとも、機械の組立てを自由に完成し、速度計を持たなくとも、頬に觸れる空氣の觸れ具合で、飛行機の速力が解るやうになる航空者の本能化した智慧が欲しい。エジソンは、學問のない人だつたけれども、三千の發明をした。彼は、數學は下手糞だつたけれども、多くの電氣機械を發明するに困難を感じなかつた。エジソンは絶えず常識といふことをやかましく云つた。しかし彼のいふ常識は、知識からきた常識ではないのだ。それは、智慧そのものであつたのだ。智慧は、内から湧いてくるものだ。不思議なる洞察力、不思議なる豫見、それが智慧の泉である。

知識と常識

ドイツの哲學者、ウエルヘルム・カイザリングは、近代科學の興へる知識は、人間を自動車運轉手のやうなものにしてしまふと注意した。運轉手は、ガソリン・エンジンの知識を持つてゐる。しかしそれを反覆することによつて、何等未來に對する洞察もなければ豫見もない。従つて發明もなければ、發見もない。

常識といふものが、唯單に、博覽強記といふことを意味するなら、記憶の悪い人にとつては、要求することは間違つてゐる、けれども、常識といふものは、必ずしも博覽強記を意味しない。それは、エジソンの如く、大學校を出なくとも、接する事物に對して、洞察力を持つといふことである。

そのために、われわれは絶えず、接觸してゐる周圍の事物に就いて、洞察力を持つてゐなければならぬ。多くの雑草の名を一々知らなくとも、その雑草の生活様式と、人間に對する効用を、概括的に知らなければならぬ。それは動物についても、氣象に就いても、同じである。

智慧のない女たち

嘗て、大阪の社會課で調べたことがある。數千人の勞働階級の家庭に於ける乳兒死亡率と、女

學校出の娘たちの形成してゐる家庭に於ける乳兒死亡率の比較研究をしてみると、不幸なことには、高等な教育を受けてゐる家庭の方にかへつて乳兒死亡率が高かつた。そして、子を生んだことの経験のある、知識の進んでゐない、勞働階級の家庭の方が、子供を死なす率が低かつた。それを調べた島村藤人氏が報告して曰く、それは、勞働階級の家庭に於いては、子を生んだ経験のある祖母がついてゐるに反して、女學校出の家庭は、その両親と別居してゐるためであると。

ここに、知識と智慧の差別がある。女學校出の人々は知識を持つてゐるけれども、智慧がない。彼女等は、哀れにも、教科書だけで育兒が出来ると思つてゐる。それに反して、知識はないけれども、智慧のある勞働階級の家庭に於いては、嘗て子を生んだことのある母が、若き産婦を指導することによつて、子供を死なす率が少くなる。

これは多くの發明家の場合に於いても同じである。多くの機械器具の發明は、常識の所産である。無線電信を發明したマルコニーは、大學者であるといふことは出来ない。電氣に就いての常識を持つことによつて、彼の洞察力が、無線電氣へ高飛びさせたのだ。自動車を發明したヘンリー・フォードについても同じことがいへる。彼は常識の持主であつたのだ。遺傳の法則を發見したメンデルに就いても同じことがいへる。彼は一種の洞察力を持つてゐたのだ。彼は、ダーウィンのやうな大學者ではない。彼は豌豆を庭に植ゑることによつて、赤の花と白の花が、自己媒合の後、代數の二次方程式の形であらはれてくることを發見した。それは全く一つの洞察力の賜物である。

エスキモーの常識

エスキモーが北氷洋に棲息し、ギリヤークやオロチオン族がシベリヤの荒野に生活し得るのは、全く先祖傳來の常識によつてゐるのである。

私は、樺太の博物館や、シカゴの博物館、またカナダのトロントの博物館で、北極に近い人々が、魚の皮で雨合羽を作り、獸の皮で着物を作つてゐる實狀を見て、彼等の驚くべき智慧に驚嘆したことがあつた。われわれの想像では、北氷洋の近くは誰一人住まない筈なのに、エスキモーの常識は、馴鹿や海豹の皮を着て、平氣で零下幾十度の寒い處に耐へてゆく。薄い天幕の上に氷が張り、雪が積もれば、不思議に、室内は一定の溫度を保つやうになり、少し油を焚いて部屋を温めると、その溫度が、相當に長く續くといふことである。

私は、ギリヤークの作つたスキーを見て驚いたことがあつた。スキーの裏に海豹の皮を張り、どんな雪の積もつた坂道でも、どしどし登つて行くのである。さうした智慧は、常識が發達してゐなければつくものではない。

治療の常識

これは病氣の治療などに就いても同じである。ドイツや北歐に林檎療法といふのがある。數ヶ月治らない胃腸病の人が、林檎を大根下しで下して、そればかり食つてゐると、二日くらゐで綺麗に治つてしまふ。また、濕布療法が、大抵の病氣に効くことは、驚くくらゐである。醫者が治らないといふ中風を濕布で治した例は、いくらもある。

光線が肺病に効くといひ出したのは極く最近である。ほとんど嘘のやうな話であるけれども、光線のうちには、微菌を殺す力もはひつてゐれば、栄養になる力もはひつてゐる。光線療法といつて、近頃は、日光浴をする人が殖えたが、この療法の如きは、常識が醫學を引摺つたやうなものである。

これは空氣療法や營養療法についても同じである。最初、空氣療法が米國から傳はつてきた時、肺病人は風邪をひくことを怖れた。しかし今日では、それがもう常識になつてしまつた。人間が空氣を吸うて生きてゐることはわかつてゐるけれども、馬鹿なわれわれは、部屋を閉め切つて、炭酸瓦斯を吸ひたがる。その結果、肺結核患者が殖える。

營養の場合に於いても、常識が發達すれば病氣にかからないものを、御馳走を食つて病氣する人が多いところを見ると、如何に人間が馬鹿であるかがわかる。腎臓炎を患つて私の氣がついたことがあるが、尿に効く藥として、日本の大抵の毒草でない植物の葉が用ひられてゐるといふことである。灸が効くといつて、昔から大勢の人がそれを實驗してゐるが、最近灸を研究して博士になつた人もある。

常識は救ふ

有名な畫家高島北海氏の令息三郎氏は、四つの時に疫痢に罹つて死んでしまつた。醫者はこれを見放した。死んで一時間くらゐ経つて、産婆さんが飛んで來た。

「では、私にこの死骸を下さいませぬ。私は、この死骸にからしを貼つて、生き返らせてみますから。」

さういつて、産婆は子供の身體にぺたぺたとからしを貼り附けた。すると、どうしたことだらう、死んだ病人が生き返つてきた。そして高島三郎君は、その後、三十年以上も長生きをした。

(この話は、私が三郎君の實兄から聞いたことであるから間違ひないと思ふ)。

印度の苦行者は、禪定に入つて斷食した結果死んでしまふ。しかし、また一ヶ月も死んで死骸を取り出して、からしを全身に貼り付けて、舌を擱み出すと、不思議に蘇生することを、ドイツの生理學者などが報告してゐる。ドイツの有名な生理學者のマクスフェルオルンなどが、これを記載してゐる。からしが、こんな事に用ひられるといふことは不思議なことであるけれども、實際に効くのでから仕方がない。

瘰癧にかかつて外科手術をすると、四十日も五十日も悩む。石油の濕布をして一日括つておけ

ば、そのまま治つてしまふ。嘘のやうだけれども、ほんとだから仕方がない。

かうした事實は、まだ幾らでもあるだらう。要するに、われわれは常識を持たないために、どれだけ生命を傷付け、どれだけ損をしてゐるかわからないと思ふ。

非常識船を沈む

一萬噸に近い國際汽船の大福丸が、太平洋で沈没した。大福丸は、小麥を何千噸と積んでゐたが、波に揺られて小麥が一方に偏し、そのまま窓から水がはひつて沈没したのであつた。これは一九二五年の春の出来事であつた。常識のある船長は、小麥を入れる場合に、大抵板で仕切りをするのだが、仕切りをしないで、そのまま船に積み荷したために、一萬噸に近い船を沈没させたのであつた。

水は火を消す

大正十二年の震災當時、幾百萬の市民は東京から逃げた。その時、神田和泉橋の附近の人々は、ポンプを取り出して消防に努めた。それで、あすこだけは火の海の中で離れ小島のやうに助かつた。消防すれば火が消えることは誰でも知つてゐる。しかし、誰でも知つてゐるその消防を江戸の子はしなかつたのだ。それで東京は七割四分燃えてしまつた。あの時、東京の人々が、もう少し

し氣を落著けて消防にかかつてゐれば、東京は救へたらうと私は思ふ。

東京の火事は、いつも、朝は北から南へ（陸から海へ）延焼する。そして晩はその反対になる。徳川時代三百年の東京の火事の歴史を調べてみると、東西に延焼した火事といふものは一つもない。もしも、この後東京に大きな火事があるとすれば、それは南北に燃える火事であることに決つてゐる。それで私は、震災當時、永田市長に忠告に行つて、幾つかの小公園によつて、本所深川を東西に區切つて欲しいと頼んだ。しかし復興した東京にはさういふことがしてない。この次の東京はまた、安政年間の火事や大正十二年の火事と同じやうに燃えるだらう。

單なる雑駁な知識でなく、深く宇宙の智慧に徹底して、環境を支配する常識が現代人に缺けてゐることを私は痛感する。私は、國民の一般が、もう少しかういつた方面に修養の出来るやうに祈るものである。

キリスト劇について

最初、佐藤紅緑氏の戯曲「キリスト」が『大阪毎日』に出た時、私は佐藤氏の苦心を思うた。佐藤氏は勿論キリスト研究の専門家ではない。それで研究的にいへば色々問題になるところもあらうが、キリストについてあれだけの理解をもち、あれだけ戯曲化し得られたとすれば、まづ成功であると考えなければならぬ。キリストの思想をあの短い文句の中にあれだけ生かし得ることは、平凡な戯曲家には出来ない仕業である。時間の関係や、思想的發展についての経過をあの戯曲に要求することは困難であらう。劇として、永久の「愛」と、刹那的愛の區別を明確に現したものである。戯曲「キリスト」は大成功であらう。

澤田正二郎氏がその演出に苦心した事についても、私は同情と敬意を拂ひたい。私は昨冬十二月の或る晩、本郷座を見に行つた。そして、或る程度の満足を感じて歸つて來た。私は、終り二幕を見ることが出来なかつた。しかしあの種の困難な戯曲をあの程度に演出し得る澤田氏はやはり平凡な人間ではない。キリストが少し堅くなり過ぎると人はいふかも知れない。しかし、あの

程度で結構だと思ふ。理窟をいへばいくらでも註文は出てくる。しかし、あの種本をあの程度で演出し得るなら非常な出来栄えだと思ふ。私は見なかつたが、最後の十字架のシーンを見た私の友人は泣いて歸つて來た。或る老牧師は、舞臺に飛び上つて、代つて十字架を擔ぎたかつたと云つた。それだけで、もうこの戯曲は大成功なのだ。もし、この戯曲に缺點がありとすれば、澤田氏に缺點があるのではなく、戯曲の構成そのものが、多少無理をしてゐるのである。それは五幕十二景に（さうだと私は記憶してゐる）あのキリスト一代の出来事をすつかり曇み込まうとしたこと、劇としての要素を豊富にするため、母マリアと、マグダラのマリアに重大な任務を負はせたことにある。マグダラのマリアはモダン・ガールのやうだと、或る人が評してゐたが、さういふ氣味がないでもない。どうも、松井須磨子の「カチューシャ」を再現させたやうに私には取れた。もう少し落著いたマリアが欲しいやうに思はれる。

しかし、みんなが、キリストを自分のものと思つてゐるところなどは、劇全體を通じて、一種の倫理觀を強く民衆に教へてくれる。

第三幕は、オスカア・ワイルドのヨカナンを思はせるところである。しかし、王へロデの王宮の後にゲッセマネの祈があるところなどはとても感激的なシーンである。あすこは誰でも感じたと見えて、見たものが、一樣に私にさう云つてゐた。

ただ私に取つて耳ざはりになつたのは、エルサレムの讚美歌であつた。「すすめつはもの」の

やうな非藝術的な拙い歌を歌はないで、中世紀のチャントでも歌つてくれるとよいと思つた。戯曲にはさう書き入れられてあるが、せめては、さんびか「四八二」あたりをそのまま歌つてくれるとよいと思つた。日本の讚美歌も最近著しく進んだから、二十年前によく歌はれたアメリカの歌は、今ではもうわれわれの耳に雑音として聞えるやうになつた。あの莊重な戯曲に、あの雑音を配合させられてはたまらぬ。もう少し薫りの高い、メロディーの豊かなものを選んで欲しいものだ。しかしこんなことは劇全體としては小さい問題だ。全體として、私はこの戯曲は成功してゐると思つてゐる。

キリスト劇にも色々なものがある。キリスト劇と稱して、反キリスト的のものも相當にある。それ等に比べて、佐藤氏のもものは、キリストを眞正面から見ただけに、あまり悪い感じがしない。私は、内觀的傾向のあるこの劇が民衆に受けるか否かは知らぬ。しかし、これが演出される時代の來たことを心より喜ぶものである。

人種戦争と宗教

人種の融和點

私は現實の問題をみつめる。果してこの後、人種間の鬭争が經濟鬭争より大きくなるか？ 私はさうは思はない。アブラハム・リンコルンが北米の黒人を解放した時に、黒人種の人口は約八百萬と推定せられた。これが今日では千三百萬までの増加となり、そのうち數百萬人が白人と黒人種の雜婚したものの子孫である。

ニューヨークにおける日本人は、一九二五年の推定によると、五百組以上も白人と結婚してゐることであつた。そのうちで最も多いのはスエーデン人と日本人との結婚であつた。一方私は南洋における日本人とマレイ人種の雜婚について研究してみた。フィリッピンにおける日本人は各都市において三割乃至四割の土人との混血兒を小學校に送つてゐる。マニラにおいてはその程度が少いが、地方に行けば行くほどその程度は甚だしい。こんなことを考へてみると、黄色人

種の先端に立つてゐる日本民族は、白色人種とも容易に雑婚し、褐色人種とも自由に混る傾向を持つてゐる。

コンクリン教授の推定によると、米國における今日の速力で行けば、五千年もすると、世界民族は相當に混血するだらうとのことである。勿論過去において人種闘争のあつたことを私は否定するものではない。北米における東洋民族の排斥は今なほ續いてゐる。今度比島人四萬人が比島獨立とともに故國に送還せられた。白系アルメニア人とトルコ人との間の猛烈な闘争は世界の知るところである。最近におけるナチスのユダヤ人迫害も世に知れたことである。

しかし、エチオピアとイタリーの問題を人種闘争のみから見ることは間違つてゐると思ふ。その根柢に横はるものは資本主義的經濟問題である。

良心宗教による奴隷解放

インドにおけるブラマ教は、人種的階級制度を宗教的戒律の中に繰り込んだ。それを佛教が破壊せんとした。しかしインドに佛教は亡びてブラマ教が今なほ勢力を振つてゐる。ガンジーは新しい運動を起して、このカスト・システムを破壊せんとしてゐるけれども、ブラマ教の域内においてどれだけ成功するか、問題である。

近代資本主義は十一世紀かかつてキリスト教が破壊した西歐の奴隷制度をもう一度復活した。

即ち、良心宗教が本能經濟に敗れる時、人種的迫害が直ちに復活する。米國において奴隷制度が確立したのは、ピューリタニズムが繁榮の前に屈服した時であつた。今日北米テネシー州の山の中に、初めから奴隷制度に反對して貧乏することに甘んじたピューリタンの團體が残つてゐる。良心宗教を守らうとするものは、繁榮を蔑視せねばならない。一八六五年、アブラハム・リンコンは國民的にこの良心宗教を回復し、ゲテスブルグの徹夜の祈禱によつて、奴隷解放の宣言に署名することの決意をきめた。

まことに人種闘争を完全に解脱し得るものは、宇宙意識の擴大、即ち良心宗教の確立のほかにはない。

宗教意識の混亂と人種憎惡の復活

宗教運動は意識運動である。勿論全意識に目覺めるまで、人間は意識内容を形成する諸要素を宗教化する傾向を持つてゐるから、一概に宗教といつても、宇宙意識を生活内容とする良心宗教でなければ、決して奴隷解放は出來ない。奴隷解放の出來ないものに人種闘争を絶滅し得る力はない。であるから、延命長壽を祈るアニミシックな信仰や、武運長久のみを祈る力の宗教や、運勢の吉凶を占ふ利己的心理宗教、あるひは社會血族の保全のみを祈る低級社會宗教では、人種闘争を絶滅さす力を持つてゐない。これら生命、力、變化、生長等、宇宙に存在する不思議な實

在の副性は一つ一つ宗教的の薫りを人間に與へる。

しかし、われわれはその局部的な薫りのために、全的宇宙意識の存在を見失うてはならない。この全的宇宙意識の認識と把握が、人類歴史に導入せられる時、そこに人類相互の連帶意識が生れ、最微者に對する贖罪愛の感情さへ湧き上るのである。佛陀は消極的にその道をさぐり當てんとし、キリストは積極的に十字架を荷うてエルサレム郊外の露と消えた。

靈魂力の勝利

人間は生理的・心理的に約束づけられてゐる。そのために宇宙意識に覺醒したのも夜になれば昏睡に陥つてしまふ。これは社會的に云つても同じであつて、われわれの意識を混亂せんとするアルコールや梅毒、モルヒネやコカイン、そして機械文明が出生して以來、人類自らが生み出した強い刺激に酔うて、宇宙意識の純粹さに立ち歸る機會を失つてゐる。しかし人類もこの機械的生産に少し馴れて來れば、また少しの落著きを發見するであらう。その時、人間の本能的人種憎惡の觀念は、人間が持つべく與へられた贖罪愛の靈力によつて整理され得るであらう。

今アフリカの赤道直下に宗教的救療事業に従事してゐる、ドイツの哲學者アルベルト・シュワイツァーは、彼自らの事業を白人が黒人に對して犯して來た罪惡の贖ひの運動であると云つてゐる。かうした靈魂の覺醒によつてのみ、眞實の意味における人種闘争は絶滅し得るのである。

神なき經濟革命の悲哀

悲しくもクロボトキンのロシアに關する豫言が適中した。ロシアの第一期五箇年計畫は見事失敗した。米國の雜誌『カーレント・ヒストリー』の報ずるところによると、ロシアの食糧政策は、全然失敗した。最近ロシアの人々は饑餓に苦しみ、五萬の列車、百五十萬噸の食糧は掠奪せられ、配給は圓滿を飲き、全ロシアに食糧騒動が勃發してゐるといふことである。

クロボトキンが、地方自治を根本にせずして、中央集權的な暴力革命をやれば必ず失敗すると、レーニンに忠告した言葉が思ひ當る。ロシアは人間の心理を無視し、宗教と道德を迫害した結果、暴力による政治革命には成功したけれども、經濟革命には悲しい失敗を見てゐる。ああ、それはあまりに悲しい實驗であつた。神と良心とを無視したフランス革命が失敗したと同じやうに、ロシアも經濟革命に失敗したかと思ふと、ダニエルの豫言が思ひ當る。「メネ・メネ・テケル・ウバルシン！」ロシアの唯物暴力主義的の運命も數へられた。人間の賢さは、神の愚より劣るのだ。ああ、ロシアの運命も數へられた。

レークスの故郷グロスターを訪ふ

お伽噺に出て来るやうな小山や牧場を通り抜けて、幾哩も幾哩も續くホーソーンの生垣を打ち見守りながら、ロンドンから西に走つて四時間くらゐすると、古い古いグロスターの町に著く。

そこは、アーサー物語に出て来る多くの騎士たちがゐた處である。その一番大きな教會は英國の有名な聖堂の一つに數へられてゐる。その建築の様式も、ウエストミンスター・アヴェなどに比べて、決して劣るものではない。その教會堂のまん中に十字軍に従つて雷名を轟かせた英國の王様エドワード二世の寢棺がそのまま横へられてあつた。何でも巡禮者は、その聖堂の西木戸から跣足で這入つて、その棺のぐるりを一巡するのが一つの行事であつたと、案内者は私に話してくれた。

私がグロスターに行つたのは、そこで、獨立労働黨の大會が開かれたからであつた。しかし私は、労働黨の月並の議事より教會堂の建築の方にどれだけ心を惹かれたか知れない。私はグロスターを訪問するまで、英國の聖堂にあまり心をひかれてゐなかつた。私は英國人は無器用な國民

で、美しいものはあまり残してゐないと思つてゐた。實際、英國に行つて誰でもが訪問するロンドン塔を見ても、美しいといふ感じを少しも與へてくれない。英國に行くと宮邸までが牢獄に見える。實際、宮邸を牢獄に使つたことが多かつたので、一層そんな感じが與へられるのであらう。鎧を見ても、武器を見ても、中世紀の英國の日常生活に美しさを求めることは非常に困難である。それで私は教會堂にもあまりいいものは無いだらうと思つて馬鹿にしてゐた。西洋建築史などで英國にはゴシック建築が不思議に多く残つてゐることだけは讀んでゐた。しかしその多くは、日本でいへば藤原の末期から鎌倉時代にかけての物ばかりであるから、古い古いといつても、東洋に残つてゐる古建築物に比べては、凡て新しいものに屬してゐる。それで私は、イギリスの聖堂建築を馬鹿にして、研究する氣ではなかつた。ところが、グロスターに著いて、その聖堂があまり美しいので、グロスターに四日ゐる間、私は毎日、聖堂の中に瞑想するために這入つた。或る時などは、一哩も二哩もの遠方から、その美しい聖堂を眺めてみようと思つて、郊外まで一人で歩いたことがあつた。聖堂は遠くへ離れば離れるほど美しく見えて、まるで玉のやうであつた。勿論、聖堂の中に這入ると、何だか眞言宗のお寺の中に這入つたやうな氣がして、生命が抜けてゐるやうな氣がしないでもなかつた。

そんな事を考へながら労働組合員の或る者にぶつかつた時、

「この町からどんな人物が出たんだね？ 何か面白い歴史的な出來事が、ありましたか？」

と訊いてみると、彼が躊躇せず私に答へたのは、日曜學校の創始者ロバート・レークスの事であつた。

「この町には、お前さん、ロバート・レークスが最初の日曜學校を創つたんだぜ。」

さう注意せられて案内記を讀んでみると、なるほど、レークスの事を町の誇りとして書いてあつた。この時の私の心持からいへば、私が訊きたかつたのは、レークスの事ではなくて、あの美しい聖堂に關聯した傳説であつた。私には巡禮といふことが非常に面白い研究の對照であつた。群衆心理から考へても、宗教心理から考へても、また人文地理から考へても、キリスト教の巡禮といふことは、日本の巡禮と比べてどれくらゐ私の注意を惹いてゐたか知れない。それで私は土地の人から昔の巡禮に關する傳説でも訊きたいと思つてゐたのだつた。ところが、その勞働組合の會員は、巡禮に關する傳説も教へてくれなければ、英雄に就いても語つてくれず、町の誇りとしてロバート・レークスを私に教へてくれた。そして私は古い時代の宗教心理や群衆心理を考へる代りに、ロバート・レークスを誇りとしなければならぬやうになつた、英國に於ける産業革命時代の宗教思想を考へてみた。

實際、巡禮とグロスターの聖堂には、神祕と憧憬が遺つてゐる。けれども、日曜學校とレークスはあまりにも近代的であり、神祕が少いやうに思はれた。だが、私はすぐ私の考へを變へた。どれほど美しい聖堂があつても、生命のぬけた、迷信深い形式宗教の墓のみであつたならば、聖

堂は叩き毀してしまつた方がいいのだ。

さうだ、レークスは、形式宗教に飽き飽きした多くの家庭の子供等が、産業革命に逢つて街上に放り出されてゐるのを見て辛抱しきれなくなつた結果、世界最初の日曜學校を始めたのだつた。これだ、これだ。そこには神祕の空氣が少くても、活宗教の活路があるのだ。今日英國の日曜學校の生徒は、一千百萬人を越えてゐる。そして英國の國民教育の最も大事な任務を果してゐる。グロスターの聖堂よりか、この千百萬の生ける聖堂こそ、このグロスターから始まつた大きな建築運動であると、今更ながら私は新しい考へに打たれたのであつた。

グロスターの町は、オックスフォードによく似た狭苦しい、英國流の町であつた。そしてそこには、多くの傳説が町の角毎に残つてゐるやうに私には思はれた。しかし、今なほあちらの路地から、こちらの長屋から、貧しい子供等が多く集められて、宗教教育の顧みられなかつた今から百五十年も前に、このグロスターの一角から、世界的の大事業が知らずして起つたと思へば、全く不思議でならない。グロスターは人口八萬くらゐの小さい町ではあつたが、その聖堂の蔭から世界の宗教教育上に一大革命が徐ろに起つたと思ふと、神の不思議な攝理を今更ながら思はざるを得ない。

中江藤樹とキリスト教

帝大で宗教の講座を受け持つ姉崎博士が、英文の『日本宗教史』を書いてゐられるが、その中、日本の儒教とその關係について書いた處に、中江藤樹のことが出てゐる。そこには、中江藤樹がキリスト教の感化を受けたことが書かれてゐる。中江藤樹が大洲にゐた時に、キリシタンから凍傷の藥を貰つたと書いてある。『キリスト教史』のうちに、一六二六年四國の大洲にゐた或る儒者が、キリシタンからキリスト教の感化を受けたらしいことが出てゐるが、それと全く符合して、中江藤樹の思想のうちにキリスト教と全く同じものがあることを姉崎博士が高調してゐられる。

井上哲次郎氏の『日本陽明學派の哲學』を見ると、やはり中江藤樹が、天地の唯一の神を信じてゐたことを書いてゐる。それを私は興味ふかく感じるものである。元來、中江藤樹が現存してゐた頃には、キリスト教は嚴禁せられてゐた。それを犯して中江藤樹が唯一無二の神を拜んだといふことは、實に勇敢であるし、また中江藤樹を生んだ一つの大きな理由になつたと思ふ。中江藤樹の傳記の中に、深く感ずるところがあつて、皇上帝を祀るとある。皇上帝とは支那のキリ

スト教でいふ神である。日本では「神」は精神の「神」で、宇宙萬物の神の意味がはつきり出て來ない。それを支那では皇上帝といふのである。これがキリスト教でいふ萬物の神である。それと考へ合せると、中江藤樹は驚くほど、キリスト教の信仰を持つてゐたことがわかる。

それは、井上氏の言葉にしたがふと、理氣である。「……これを上帝とす、即ち萬有精神とも稱すべき世界の實在なり。然るに世界は理と氣の二元より成る。理はその心にして氣はその形なり」然るに藤樹の上帝は決して理氣以外にあるものにあらず。分ちてこれをいへば理氣なり。合してこれをいへば上帝なり：」即ち中江藤樹は、宇宙の神は唯一の神であると實にはつきりと考へてゐた。神靈論を讀むと、なほはつきりしてゐる。

「藤樹は天地を造り萬物を生ずる上帝ありと思惟し、或はこれを天といひ、またこれを皇上帝といひ、また太一尊神といひ、また太上天尊大一神といへり。上帝は世界の實在にして、遠くして天地の外、近くして一身の中、久しくして古今の間、暫くして一息の頃、微にして一塵の内、幽にして隱獨の中、上帝のあらざる所なく、一念の善惡、一事の善惡も上帝得てこれを知れり。これを勸懲するに、禍福を以てす。是故に上帝は極めて尊ぶべく、極めて畏るべきもの、然るに世人がこれに出でざるは、これを知らざるによるのみ」

この神に對する心持から凡ては始まる。この心は「持敬」、即ち今日われわれがいつてゐる「敬虔」である。持敬は聖學の始まりであつて終りである。

持敬は聖人の根本である。井上氏はキリスト教が嫌ひだから、これに就いては黙つてゐられるが、姉崎博士ははつきりこれをキリスト教からきた思想だといつてゐる。

「個人と宇宙との關係が孝行の始まりだ。そして道德生活は宇宙の神に孝行することから始まる。これが根本原理である。宇宙の凡ての道德は、宇宙の神に對する孝行を應用したに過ぎない」といつてゐるが、この宇宙の神に對する孝行の主張は、藤樹の經驗から出たのである。單に彼の説だけでなく、彼の生活と學識のうちにもこの傾向が残つてゐる。そしてそれは王陽明學派の良心説と一致してゐる。藤樹は、實踐道德を無視しなかつたが、神からきた良心を離れての單なる道德は無意味だと考へた。この良心の琢磨は、宇宙の父なる神に對する心盡しと、精神生活の修養とによつてのみ達せられる。神を宇宙の父といつたところに、中江藤樹が孔子學派と違つてゐる點がある。普通の儒教學派であるなら、政治的道德や知識に力を入れるのであるが、藤樹は、政治や道德を離れて、宇宙の神を根本にした。そこに普通の儒教と違ふ點がある。藤樹は、だから、宇宙の心に意を注いだのである。そしてキリスト教の一神教に近い思想を持ち、佛教に對しては反對した。佛教はあまりに隱遁的だからいけないといふのである。勿論、彼は佛教のためにいろいろと辯護してゐるが、隱遁的佛教には反對してゐるのである。

中江藤樹はキリスト教の感化を受けて、その思想はキリスト教的であつたが、母が佛教徒だつたので、孝行な彼は母に佛教の經典を讀んであげてゐた。中江藤樹のおぢいさんも偉い人で、米

子の殿様に仕へてゐたが、伊豫の大洲へ行く時に、幼い中江藤樹も連れて行つた。殿様はおぢいさんを郡長にした。中江藤樹は田舎に行つたが、おぢいさんは字が下手で、本も讀めなかつたので、おぢいさんは中江藤樹を愛して、勉強させた。

中江藤樹は、初め、室鳩巢や林羅山の屬する朱子學派に熱心であつたが、朱子學派では窮屈だ、形ばかりに捉はれてゐては聖人になれないと思つてゐた。父は中江藤樹が十八歳の時死に、母が一人残されたので、母を伊豫に連れて行かうとしたが、母は行かうとしなかつた。そのうち、おぢいさんが死んだ。中江藤樹は、おぢいさんやお父さんが死んだので、近江の小川村に歸つて母に孝行しようと思つたが、どうしても歸ることが出来なかつた。その時丁度殿様の息子が大名になつたので、官を辭して、近江に歸つた。時に彼は二十七歳であつた。

私は伊豫の大洲にも、近江の小川村にも行つた。小川村に今日遺つてゐるものは、小さい倉と、粗末な藤樹の書院きりである。琵琶湖畔から一里以上もあつたらうか、そこを歩いて行つたのを憶えてゐる。中江藤樹は藤の木が好きだつたので、今でもそこには大きな藤の木がある。

中江藤樹は四十一歳で死んだ。キリスト教の感化は二十四五の時伊豫でうけた。村の人はキリスト教には大反對だし、藤樹の學說に就いてあまり考へてゐないし、藤樹がキリスト教から來たといふことを知らなかつたので、村の人は中江藤樹を祀らうかといひ出した。

この陽明學派がキリスト教と一緒になつた。が、陽明學といつても、支那の陽明學ではなく、

日本のキリスト教的陽明學であつた。これが熊澤蕃山となり、大鹽平八郎となり、西郷隆盛となり、吉田松陰となつたのである。

中江藤樹はかやうに非常に大きな感化を残した人で、日本に於ける動的な聖人の道の開拓者である。日本に於ける陽明學派は中江藤樹から始まつてゐる。日本のキリスト教は迫害を受けたが、中江藤樹を通じて、神の攝理が働いた。聖人の道はキリスト教によつて中江藤樹のうちに傳はつた。それは徳川幕府に反對した朱子學派へも傳はつた。

昭和のキリスト教は、ことさら新しい道を歩まないでも、藤樹の道を歩けばいいと私は思ふ。藤樹ははつきりは云はなかつたが、私は、彼はキリスト教徒であつたといへると思ふ。

同志社大學教授清水安三氏は、中江藤樹の隣村の人である關係上、數年の長きに亙つて、中江藤樹とキリスト教との關係を研究せられ、中江藤樹がやはりキリスト教であつたことを信じてゐられる。同氏の説によると、中江藤樹は、小西行長の家臣中田某からキリスト教の教へを受けなかつたにしても、その當時支那に流布してゐたキリスト教の感化をうけたに違ひないのである。それには詳しい實證があるけれども、私はさうしたことはここには述べない。藤樹の信じてゐた太乙神といふのは、易教に於いては無限絶對を意味する言葉であるが、支那に傳はつたキリスト教は、この太乙神を採用し、その太乙神の信仰が中江藤樹に傳はつたのである。近江では、安土に太田といふ處がある。これはラテン語のデュースを漢字にあてはめたものであらう。つまり、

易教の無限絶對と、ラテン語のデュースの兩方にかけて、太乙神と云つたのであらうと、清水安三氏は云つてゐられる。しかしその當時、キリスト教は抑壓せられてゐたので、中江藤樹は、床の間に帆柱の十字架を置いて、その帆の上に太乙と書き、それを常に禮拜してゐたことが、弟子たちの記録に残つてゐるといふことである。これは潜伏キリスト教の一つの形であると、私は、清水安三氏から教へられて、今更ながら、中江藤樹の信仰と優れた人格が、いづこから來たかを學んだのであつた。藤樹先生の弟子熊澤蕃山も、七十三で老死するまで、日本に於いても必ずキリスト教が勝つといふことを絶叫してゐたといふことである。これを見ても、中江藤樹の系統にはキリスト教的感化が多かつたことがわかる。

貧民窟の女

貧民窟の女性は、一般的に云つて、極めて叛逆性に乏しい。強い意志に向つては、それが善であらうが、悪であらうが、いつも何等の抗争なしに唯々として屈從して行く傾向を彼女たちは多分に持つてゐる。さうした傾向には種々な理由がある。

貧民窟に落ちてくる大多数の人々は、本質的に、多少缺陷のある人々である。これを生理的に見れば、病氣であるとか、負傷してゐるとか、廢疾者であるとかいふ者が多く、心理的に見ても、白痴、發狂、變質者などである。またこれを道德的に見るならば、犯罪者、博奕打、淫賣婦、ころつき、酔っぱらひ、なまけ者等である。

かうした不健全な人々がその大部分を占めてゐる貧民窟に住家を探し求めなければならぬ、世に謂ふ落伍者の多くも、經濟的原因の他に、生理的に、心理的に、道德的に何等かの缺陷を持つてゐるのである。貧民窟の人々と普通一般の社會人とを比べてみるならば、彼等が如何に肉體的にも精神的にも劣つてゐるかといふこと、更にはなほだしくその生活力が去勢されてゐて、全

く不具廢疾者同然になつてゐるといふことに想ひ到るであらうと思ふ。

しかるに不思議にも、大體に於いて女性のみは、かうした人々の群の中にあつて、不道德から遠ざかり、賭博場には近よらず、飲酒癖にも割合に囚はれない。貧民窟の男の、最も普通な、野卑な、そして最も誘惑力の強い頽廢的の享樂生活に感染しないで、反對に、多くの子供を教育しつつ、善良な家庭を作つて行かうともがいてゐる者が多く見受けられる。つまり、貧民窟の女性には、叛逆する意志さへ失つてしまつて、現在の生活狀態から一步を踏み出す欲望もなく、それを甘受してゐるものが多いやうに思はれる。悪く言ふならば、ぐうたら女が多いのである。それであるから、貧民窟に於いては、接近して行く男子に對して、誰彼といはず、肉體を任してしまふといふ女性が比較的多い。東京市深川區猿江裏の貧民窟の調査を見ても分るごとく、五人の子供が一人づつ違ふ繼父を持つてゐるといふやうな例は少くない。主人が泥棒であつても、詐欺師であつても、海賊であつても、要するにどんな悪いことを犯してゐるやうとも、さうしたことには無神經であるばかりでなく、まつたく悪い顔さへしない。私はさう云つた女を多く見た。貧民窟の女は、ほとんど、善惡の觀念の區別がつかないほど生活難に喘ぎ苦しんでゐるのである。

大體から見て、貧民窟の人口は、男子より女子の方が多く、それも中年以上の者が多い。といふのは、男子の多くは貧民窟の境遇に甘んじないで、元氣に満ちた青年時代を決して貧民窟に送らないからである。それであるから、貧民窟にゐる男子の多くは、子供か老人かである。叛逆性

のある男子は、意氣地なく貧民窟に止まるやうなことはしない。各自その能力に従つて、善い意味に於いても、悪い意味に於いても、とにかく活動するのである。女子も亦同様である。

ただ、例外として、變質的な女性と、生活難のどん底に沈んだ女性と、平常柔和な、むしろぐうたらと考へられる女性は一大爆發を演ずることがある。例へば、米騒動のごときはそれである。大正七年、富山縣滑川の女房連が騒ぎ出して、二府三十縣に蔓延した米騒動の餘波が、當時私の住んでゐた貧民窟にも浸入して來た。その時など、貧民窟の女房連は、平素の純情を捨てて、まったく阿修羅のやうに狂ひたけた。私はその姿を目撃した。大正七年八月十二日の朝、前日の米相場を考へて、五十錢ばかりで一升の米が買へると思つて出かけたおかみさんたちは、米屋の店先に來て初めて、一日のうちに十錢騰貴してゐることを發見して騒ぎ出した。かうした光景は、貧民窟の米屋十數軒のどこでも見られた。この全く計畫のない突發的騒動は、これらの女房連から持ち上つたのである。しかもその晩、約七ヶ所から火災がもち上つて、群衆は恐怖と不安に戦慄した。騒ぎは益々惡化した。それで遂に軍隊の出動を見、辛うじてその暴動を食ひ止め得たといふ始末であつた。

かうした社會的な叛逆は、まことに珍しい現象であるが、人の好い貧民窟のおかみさんたちの中には、變質的に叛逆性を持つてゐると考へられる女がないわけではない。私の近くにゐた前科二犯の女は、二人の子供を育ててゐたが、いつも彼女の理想としてゐる男は、石川五右衛門であつた。

「泥坊になるなら、石川五右衛門のやうな偉い奴になりたいなア。」

と常に口癖のやうに言つてゐた。まさかこの女は、バブーフのやうに盜む權利を肯定してゐるわけでもなからうが、泥坊することを何とも思つてゐないところに、貧民窟の女性の本能的叛逆性ともいふべきものが看取されるのである。

貧民窟の女が淫賣婦になつてゐる時は、現行法律などに對して、全く叛逆的であつて、警察官などに對しては、少しも尊敬の念を抱いてゐない。そして、云ふことが面白い。

「お上では、税金を出すから、前を賣つてもよいと鑑札を下げてゐるが、前を賣ることは、淫賣とちつとも變つてゐるやしないではないか。うちら少しも悪いことはしとらない。それに、われらを警察に拘引して行くのは、間違つてゐる。」

かうした態度は、貧民窟のごろつき仲間には極くありふれたことであつて、それが貧民窟の變質的な女性に感染してゐるのである。貧民窟の變質的な女性の間には、性的生活に關しても頗る常規を逸してゐて、近代人の生活以上に超越的なところが多分にある。

彼女たちは、淫賣しながらも、自分の熱愛する戀人を持つてゐてみたり、さうかと思ふと、或る者は、地廻り淫賣と稱して、一ヶ月とか、三ヶ月とか、一人の男と一緒に棲んで、その期間が過ぎると、また次の男に移り、轉々として男を變へて行つて平氣な女もゐる。エレン・ケイ女史

の『自由結婚論』を讀まなくとも、この種の女は自由離合の心理をよく了解してゐるものと見える。彼女たちは、家庭生活に叛逆してゐるといふ點から見れば、徹底的であるが、しかしその内面生活は、どんなに空虚であらう、寂しいことであらう。この點から見れば、彼女たちは近代人以上に深い悩みと悶えとを無意識の上に藏してゐると云へる。

貧民窟の娘たちのうちに、多少叛逆的なものが出て來ても、その多くは叛逆性を現さないうちに、八分通りは娼妓に賣られてしまふ。そして残りの二分は、十七八歳にならない前に、既に子供の一人くらのを抱へてゐるのであるから、彼女たちは、ほとんどその叛逆性を現さずに、といふよりも、現すべき意力と機會とを奪はれて、生涯を終るのである。

愛の常識化

秋の空は晴れてゐた。東京深川区清澄公園の空さへ晴れてゐた。その日丁度教化事業に關する相談會が清澄公園で催されてゐた。その序に、私は一言だけ、濱園町のテントにゐる人々が氣の毒だから、この冬床を張つてあげなければならぬことを述べた。話が終つて歸らうとすると、一人の紳士が私に近づいて來て、

「賀川さん、あなたはその失業者のテントに床板を張らうと云つてゐられますが、それは容易なことです。深川の木場にYといふ熱心なキリスト教信者がゐて、何かの形で社會奉仕をさせてもらひたいといつてゐますから、是非その人に會つて下さいませんか。」と言つた。

善は急げと思つたものだから、私は早速自動車を飛ばして、深川の木場のY商店を訪問した。大きな店の主人公のY氏は、猿股に腹掛をかけたといふ扮装で心持よく私を迎へてくれた。そして、早速萬事を引受けて、今からすぐ見に行つてやらうと、待たしておいたタクシーに同乗してくれて、濱園町の市立無料宿泊所まで飛んで來てくれた。そこには約十戸のテントが立つてゐた。

そして約百八十數人の氣の毒な失業者が入つてゐた。床の出來てゐるのは、その中のただ一つであつて、他は凡てアメリカから送られた震災當時のカンバス・ベッドに寝てゐた。その世話を焼いてゐてくれる高橋元一郎君が、失業者と床板を造ることに賛成してくれた主人公をとりまぢがへるほど、材木屋の主人は質素な風をしてゐたが、一通り廻つて、すぐ明日材木を送ると引受けてくれた。私は、そのまま自動車で、或る新聞社の用事のために丸の内に歸つたが、東京にはわかりのいい人もあることを實際に経験して、ほんとに嬉しく思つた。金目にすればほんのわづかな事であるけれども、百八十數人の多人數に上る生活の根本にふれてゐる問題であるのだ。それが、一言洩らしただけで、その日すぐに解決せられ、翌日は全部床板が張れてしまつた上に、その材木屋さんから失業者に與へてくれと献金までつけてくれたのには驚いてしまつた。社會事業をしてゐても、面白く仕事の運ぶことはさう多くはない。しかし、時代が進歩してきて、愛に關する行爲が常識になれば、すべてが簡単にすませるものだと、私はつくづく感じたことであつた。

小説「富士」

それは深い魂の畫布に塗られた最高の藝術である。日本の最大の愛の使徒、故岡山孤兒院長石井十次氏が、嘗て著者蘆花を評して、彼は魂を描くが故に七百年の壽命を保つと云つたことがあるが、誠にその通りである。彼は魂の髓の底を描いた。彼は魂のスクリーンに映るあらゆる暗影、あらゆる風雪、あらゆる波浪に就いて見逃さなかつた。彼は神の如く自己を解剖し、神の如く魂を淨化せんとした。「富士」四巻はこの大きな努力の結晶體であり、「富士」は彼であり、彼は「富士」であつた。彼は自ら神の如く自己に臨んだ。従つて、魂の藝術としてこれ以上のものを要求することは出來ない。それは水晶の如く透徹し、金剛石の如く光つてゐる。「富士」を讀んで初めて眞實の日本人を知ることが出来る。これは永劫不滅の記念碑である。それは魂の富士山であり、層雲を越えて聳え立つ峻峰である。富士に登らずして日本を語り得ざる如く、小説「富士」を讀まずして日本の魂を語ることは出來ない。登れ、この魂の富士に。

聖書の感化力

浴槽の聖者

このほど物故せられた内山佐氏は、全く奇蹟的な生活を送つた人であつた。彼は九州帝大の病院で、施療患者として十数年の間、消毒薬の這入つた浴槽の中で文字通りの苦行をした。それはかうである。

或る日、彼の身體に小さい腫物が出来た。それを搔くと全身に擴がつた。九大の皮膚科の醫者に診てもらふと世界でも珍しい天疱瘡であつた。醫者はこんなことを云つた。「君は消毒薬に浸つてゐれば命が續くけれども、上ればすぐに死ぬよ。」

それを聞いた内山氏は絶望の淵に追ひ込まれた。試みに彼が浴槽から出てみると、醫者のいふ通り、また腫物が全身に出来て死にさうになつた。天疱瘡は全く不治の病であつたのだ。絶望の結果彼は自殺の道具を探した。しかし、彼の母は彼の兵古帯をも匿し、すべて自殺を謀るやうな

道具は匿してしまつた。それで、この苦行者は落膽の結果舌の先を噛みきつて死なうと思つた。さうして數ヶ月経つた。

十錢の聖書

その時、一人のキリスト教の教師が、その當時一冊十錢で買へた『新約聖書』のロマ書第五章三節に印をつけて、内山佐氏の病室に差し入れた。ロマ書第五章三節といふのはかういふ文句になつてゐる。

「然のみならず患難をも喜ぶ。そは患難は忍耐を生じ、忍耐は練達を生じ、練達は希望を生ずと知ればなり」

暇で暇で困つてゐた浴槽の苦行者は、その『聖書』を一旦手には取り上げた。しかし「患難をも喜ぶ」といふ文句が癢にさはつてしまつた。

「——これは俺を冷かすために印をつけたのぢやないかな。」

などとわざわざすねて解釋してみたさうであつた。それで内山佐氏は一旦取り上げた『新約聖書』をすぐ投げ出してしまつた。

「——俺が生れて來たのが間違つてゐたんだ。死んだ方がいいんだ。死なう、死なう。」

さう思ひ詰めた彼は、『聖書』のことなどに氣がつかないで、すぐに死んでしまはうと、すべ

ての光に顔を背けた。

しかし不思議、不思議！一旦こびりついた『聖書』の言葉が彼の頭を離れない。「患難をも喜ぶ」——この文句が天來の聲のやうに胸底に響いて來た。で、彼は捨てた『新約聖書』をもう一度取り上げて、初めから讀んでみることにした。そしてイエスといふ大工が、人のために苦勞して十字架にまでかかつて死んだといふ事が初めて判つた。

「不思議な男もあつたもんだ。俺は自分一人のためにこんなに苦しんでゐるに拘らず、世には不思議な男もあつたもんだ。人のために苦しんでゐる變つた男がある。全く贅澤はいへない。」本を讀むといつても、彼は机に向つてよむのではない。動物園の河馬のやうに、浴槽に浸つたまま『聖書』を讀むのであつた。ページを繰る時には、消毒の薬がページにつかないやうに、手拭で一々指を拭き、そして次のページをめくるのであつた。さうした苦勞をして讀んでゐるうちに、自己一人の苦痛のために死を急ぐのは間違つてゐる事に思ひついた。寧ろ苦しむなら人のために苦しむのがほんとうといふことが解つた。これは精出して『聖書』を讀むに限る、と思つた彼は、拭き取つても拭き取つても指先に残る消毒薬のためにぼろぼろになつた『新約聖書』を繰返し繰返し讀んだ。そして讀む度に自分が新しい世界に這入つて行きつつあることを感じた。彼は、イエス・キリストが凡ての苦難に勝ち得た理由が、人間一個の努力でなく、宇宙の神の力にあることが判つた。そして彼も、小さい浴槽に浸つてゐながら絶對なる神の恩寵に浸り得ることを徐々に發見したのであつた。

神の發見

狭い隔離病室は忽ちに神殿と變り、浴槽は祭壇と早變りをした。天井裏には紫の雲が漂ひ、消毒薬の中には黄金の波が立つのではないかと思はれた。

苦惱は忽ちにして忘れられ、自分自身が、生きながらにして宇宙至高の神の子であることを感じた。神の子の自覺に這入ると共に、内なる靈の歡喜はもはや抑へることが出来なくなつた。彼は初めてロマ書第五章三節四節の言葉の意味を理解するに至つた。即ち、患難によつて忍耐づけられ、忍耐は練達を生じ、練達は希望を生むといふことがよく解つた。

彼はつひに、朽ちゆく肉體の世界に於いてすら、神の恩寵がしとしとと慈雨のやうに降り注いでゐることがわかつた。

かうして『聖書』の行者となりおぼせた内山佐氏は、前とは反對に、見舞客を掴まへては神の恩寵を説くやうになつた。彼が今年（昭和九年）の夏この世を去つて天に歸るまで、十數年の浴槽の生活は全く多くの人に對する慰めの生活であつた。

人殺しの改心

これに似た話は他にもある。好地由太郎が『聖書』を読んで改心した。彼が日本橋の女主人を殺し、横濱に逃げたのは、丁度彼の十九歳の時であつた。しかし逃げた先の横濱でも彼は再び罪惡を犯し、そのために横濱の未決監に繋がれた。その當時はまだ日清戦争前であつたので、日本ではキリスト教の話を書くことさへ稀であつた。ところが、基督教の辻説法をしてゐたために未決監に打ち込まれてゐる一人の青年があつた。彼は毎朝好地由太郎の監房の隣で分厚い書物を読んでゐる。それは呪文のやうな物を唱へてゐた。由太郎が不思議がつて、読んでゐる書物の名をきくと、基督教の『聖書』だといふことが解つた。

一週間も経たぬうちに、その男は監獄を出ることになつた。で、由太郎はその書物をもらつて読むことにした。好地由太郎は『新約聖書』を開いて、第一頁を読んでがっかりしてしまつた。そこには、破獄する術が書いてはなくて、博勞が讀めばよいやうな、馬を太らす傳とも考へられるものが書いてある。それに失望した由太郎は、北海道空知の監獄に移されてからも二度と『聖書』を讀まうとはしなかつた。それから約七年経つた。突然彼は夢の中で、『聖書』をよむやうにとの天よりの聲を聞いた。彼は教誨師に『聖書』を借りてよんだ。そしてイエスといふ人物の偉大さを知つた。彼は忽ち生れ變つた。彼は無期徒刑囚であつたが特赦によつて、二十五年の鐵窓の生活から許されて再び娑婆に出てきた。しかし、『聖書』を讀んだ彼は昔の由太郎ではなかつた。彼の感化力は男爵森村市郎左衛門にまで及んだ。森村男は彼によつて洗禮を受けたのであ

つた。しかもこの不思議な感化力が、佛教の教誨師が彼に貸し與へた五錢の『新約聖書』から來たといふから不思議ではないか。

宗教文學には昔から不思議な力が残つてゐるが、『聖書』は特に不思議な書物であると私は思ふ。今も日本に於いて不思議な奇蹟を次から次に起しつゝあることを思ふと、私は『聖書』の前に自然頭が下る。

釋迦と孔子とキリスト

甲「おい君、キリストと孔子と釋迦のなかで、誰が一番偉いんだ？」

乙「三人とも偉いのだらう。宗教つていふのは、どれでも同じことだらう。」

甲「僕には、ちつともわからないな。」

乙「わけのぼる麓の道は多けれど、同じ高嶺の月を見るらん、といふことがあるから、みんな同じだと僕は思ふがね……しかし、×月×日に賀川豊彦の宗教講演會があるから、あの人に質問してみようぢやないか。」

甲「それは面白いね。」

かうした會話のあつた後二人は約束したとほり、賀川豊彦の講演會に出席した。講演がすんだのち、二人は彼に近づいて質問を發してみた。

甲「ちよつとお尋ねいたします。キリストと孔子と釋迦のうち、誰が一番偉いのですか。ここにある僕の友人は、みな同じといふのですけれど、腑におちぬものですから、お尋ねしたいと思

つてきたのです。」

それに對して、賀川豊彦の答は、かういふのであつた。

「釋迦も孔子も、神といふことをいつてをりません。孔子は現在を説いた人で、釋迦は、その現在をも否定した人です。孔子は大臣で、釋迦は王子でした。二人とも聖人であることに相違ありません。しかし私がみるところでは何だか物足りません。宗教は生きる工夫です。生命を自由自在の境地、つまり神にまで引きあげたいと努力するところに、宗教生活の眞剣味があるのです。みな高嶺にむかつてゐるのには違ひありませんけれど、孔子は八合目まで、釋迦は九合目まで、キリストは頂上に行つてゐるやうな氣がするのです。あくまで現在を肯定し、現在のほかに過去と將來とをみとめ、過去の過つたところを否定することにおいては、釋迦の氣持をくみ、將來に對してはキリストの教へた神の子になるつもりで努力すればいいやうに考へます。」

魂の藝術家ジョン・バンヤン

バンヤンの偉大さは民衆と歩いたところにあります。いや、民衆の爲に、良心と共に歩いたところにあります。

バンヤンの譬喩は、ほとんど天才的です。板に著してゐます。キリスト以來、バイヤンほど明瞭に、福音を民衆に解り易く教へた人は無いでせう。

勿論その時代は暗い時代でした。今日のやうに、汽車も汽船も走つてゐませんでした。それで、彼の書いたものは大體に於いて非常に暗い感じがします。けれども、あんなに上手に劇的場面を連ねて、宗敎生活の意味を説明してくれた民衆藝術家は、古今絶無といつてもいいと思ひます。

勞働してゐる者には、書物ばかり讀んでゐるものと違つて、新しい世界と眞理が體驗として啓示せられて來るものです。バンヤンの創作は、さうした體驗から生れました。

私は、宗敎心理學から考へてみて、バンヤンの『天路歷程』ほど宗敎心理を劇的に教へてくれたものは無く、あれほど力強くクリスチャンの何ものであるかを教へてくれたものは無いと思つ

てゐます。

最初私が『天路歷程』を讀んだ時には、それほど感じませんでした。二度目に上巻と下巻を英文で讀み通した時、私はその魅力に全く驚いてしまいました。私は讀んで行くうちに、針で自分の胸を刺されるやうに思ひました。幼い時に、こんな詰らない書物と思つてゐたものが、人生の旅路を重ねると共に、『天路歷程』の眞理を日一日と深く教へられるやうになりました。殊に自分が下手な小説を書き出してから、彼の偉大さを一層深く悟るやうになつた譯です。その後私は、彼の自叙傳である『恩寵溢るるの記』を繕いて、『天路歷程』の内部的記録を教へて貰ひました。『天路歷程』が表なら、『恩寵溢るるの記』は裏です。『天路歷程』は精神分析を要しますが、『恩寵溢るるの記』はそのままで受け取ることが出來ます。私は、後者を讀んで初めて、バンヤンの精神生活の深さを知りました。勿論、『天路歷程』は十七世紀の暗い時代を反映してゐます。それで、今日われわれが考へてゐるやうな、大きな社會愛などに就いて教へてくれてはゐません。彼は、一つの靈魂の歩みだけを指示してゐます。その點が、何だか私には頼りないやうに思へてなりません。あまりに暗いといふのは、そこなのです。恩寵に溢れてゐながらも、まだ暗い影がさしてゐます。それは止むを得ないことであつたでせう。クロムエルが王の首を刎ねたり、反敎會主義の人が焼き殺された時ですから、「聖戰」の方に力が入れられて、「聖愛」の方に力が入れられないのはあまりに當然でありませう。

しかし、そこにまた、ジョン・バンヤンの力強さがあります。良心の自由のために、飽くまで戦つて行かうとする、その偉大なる魂の歩み、それを表白する彼の不思議にして平易な言葉、私は何度も繰返して、ジョン・バンヤンの『天路歷程』を瞑想し直します。彼の記録はさびしくはあるけれども、實際一個の魂の記録としては、あれ以上に出不れなものなものです。われわれは永久の旅行者です。われわれはバンヤンの教へてくれたもの以上ではありません。私は、『天路歷程』を読む時に、自分の魂を読むやうな気がしました。貧民窟に永く住んでゐて、『天路歷程』に語られてゐるやうな事實を、譬喩としてではなく、ほんとに見て来た私です。私はバンヤンの眞理を考へ直したことでした。『天路歷程』は新しい福音書です。一種の「典外聖書」といつてもいいでせう。あの書物一冊讀めば、マタイ傳から黙示録に至る全部の眞理を、一つ洩らさず、最も通俗的な言葉で、間違ひなく知ることが出来ます。

キリストは譬喩を以て教へました。そしてバンヤンは譬喩の天才でした。民衆ほど譬喩に生きてゐるものではありません。この意味に於いて、バンヤンは永久に民衆の魂の中に生きてゐます。

宇宙精神と日本精神

宇宙的日本を作るか、日本的宇宙を作るか、日本は今や迷路に立つてゐる。日本の新聞も雑誌も、日本的宇宙を作ることに急であつて、宇宙的日本を忘れてゐるかの觀がある。何々教、何々教、何々主義、何々主義はみなその爲に忙し。

しかし、宇宙の根本眞理を無視して、一體何が日本精神であり得ようぞ。萬機を公論に決し、眞理を宇宙に照らして耻しくないやうにしなければ、その眞理は眞理のなり損ねである。島國日本だけで通用する眞理は、全地球に當て嵌めることは出来ない。日本はもう少し謙遜になつて宇宙の眞理に聽かねばならぬ。實なきに自らを稱讚するものは自己妄想狂である。日本は世界一、何々も世界一、何々も世界一と、世界一氣違ひになることは日本の文明を誤るものである。永遠の求道者は永遠に生長する。

生長せよ、日本の靈魂よ。宇宙の眞理に即して生長せよ。人の批評を喜んで受け入れ、自己内省を怠らずして謙遜の徳を永遠に把持せねばならぬ。

最微者への奉仕

今はもう故人となられたが、私が會つた多くの日本婦人のうちで私に最も大きな感化を興へてくれたのは、神戸養老院創立者である寺島のぶえ女史であつた。彼女は、僅か十三歳のときに結婚を強ひられ、結婚して一晩のうちに逃げ歸つて來たといふ妙な経験の持主であつた。

しかし、歸つて來たけれども、間もなく妊娠してゐることがわかつたので、若くして子を産んだ後、一生獨身で死ぬまで一人ぼつちでゐた。

私が神戸の葺合新川の貧民窟にはひつたとき、私が一ばん持てあました老人の世話を全部引きうけてくれたのが、この寺島のぶえ女史であつた。

彼女は看護婦の免状をとつて、看護婦會を組織し、自分の同志と共に一切人の寄附を受けないで、自分が看護婦に出た収入で、老人の世話を始めた。その養老院といふのも、看護婦會の近所に一軒の家を借りて、そこに九人の老人を收容してゐたのだ。

私が教へられたといふのは、この自給自足の養老事業に就いてであつた。私はそのころまだ白

面の一青年で、彼女の如く、自分が稼いだ収入で救濟事業をするといふやうな能力を持つてゐなかつた。私は友人の援助でやうやく數人の病人を世話してゐた。それなのに彼女が、その細腕で稼いだための収入を全部ささげて、九人の老人を養うてゐることを見て、全く驚かされてしまつた。彼女は、熱心なキリスト愛の信仰に生きてゐた。そして人がかへりみないよぼよぼの年寄り乞食を、自分の母と同じやうに世話してゐた。

或る朝のことであつた。彼女の留守中に、一人の老人が死んでしまつた。留守中のことなので、そのころ貧民窟にゐた私に使ひが來て、

「寺島さんが留守ですから、どうか可哀さうな老人のお葬式をあなたにお願いします。」といつて來た。

勿論、私は寺島のぶえ女史の美しい志を知つてゐたから、すぐ神戸養老院に飛んで行つて、寺島さんのかはりに、老人の湯灌をし、葬式も出さうとした。

のぶえ女史は、有馬のキリスト教修養會に行つて留守であつたが、お葬式までには歸るといふ電報が届いてゐた。しかし出棺の時間が迫つたので、私は看護婦會の人々に手傳つてもらつて、宗教的儀式を終り、死骸を火葬場に運ぶために、養老院の小さい戸口から、寢棺を運び出して、表に据ゑた。

その瞬間に、停車場から車でかけつけた女史は、車からとび下りるなり、自分の親でも失つた

やうな悲しい顔をして、どこで買つて來たのか、美しい花束を街路に横はつてゐる棺桶の上においた。そして倒れるやうに地べたに跪き、合掌して黙禱し出した。

私はその嚴肅な光景を見て涙を禁じ得なかつた。これほどまでに眞面目に世界の最微者に奉仕し得る人は、日本にそんなに多くはない。この女こそ、日本に於ける最も美しい女性だと、つくづくと彼女の犠牲的精神に感激したのであつた。

その後女史は間もなく膽石病でこの世を去られたが、死ぬまで、彼女は憐れな老人に仕へ、世の人に認められない一生を送つて、天國に歸つて行つた。

私は、今でも女史のことを思ひ出すと、キリストの女弟子として、日本にもめづらしい女がゐたものと、感激の念のおのづから湧くのをおぼえるのである。

宇宙一元

宇宙一元の眞理を、今日の科學者は、物理學の實驗室から説明するやうになつた。カリフォルニア大學のローレンツ教授の發明によるサイクロトンによつて、あらゆる原素を水素原子に還元することが可能になつた。そしてその水素原子はエネルギーの波に關聯する。

科學者が、かうした物的宇宙の一元を説明する前に、宇宙を良心といふ内側から覗いた人々は、宇宙一元の原理に早くから目覺めてゐた。ギリシヤの哲學者も物心二元の世界より奥深くは行けなかつたが、愛の原理を知つてゐた。キリストとその流れを汲むものは、物心二元の世界をも、愛による一元によつて包容し得ると考へた。まことに、愛に氣のつかないものは、一元の神を認識することは出来ない。

「愛は神より出づ。凡そ愛あるものは神より生れ、神を知るなり」

とヨハネ第一書の著者が云つてゐるが、キリスト的宇宙一元の認識は、論理から來ないで生活から來た。愛による生活を充實したものは、物質の世界が絶對でなく、愛による一元こそ絶對であ

ることを認識し得たのであつた。「殊に愛は神より出づ。凡そ愛あるものは神より生れ、神を知るなり」といふことは、キリスト者のみが發見し得る特權であると思ふ。

認識論に就いての瞑想

認識の方法

認識の方法は心を用ひて宇宙の實體を探らうとするにある。心の中心は、この場合、生命、力、變化、生長、選擇、法則、合目的性を綜合したものの中、特に選擇、淘汰力を借りるよりほかはない。そして物が實體であるか、物の奥に不變の實體があるかを認識せんと努力するのであるが、物の實體を研究せんとする心の作用そのものを物の外に置くことは出来ない。即ち、認識作用に含まれた選擇作用そのものが、物を絶対性と考へた場合にはおのづから含まれてくる。

すると方法が即ち實體の内容となる。物を實在として認識せんとする場合、心が物の副性として存在することは否定出来ぬ。心を副性として持つ物は、心によつて心を知るよりほか道のないことを教へられる。否、宇宙の實在は、認識せられる爲には認識的方法そのものの中に示現せねばならないものと考へねばならぬ。

もし認識主體が、實體と縁もゆかりもないものとするれば、全く不可解なものであつて、認識の

対象とはなり得ない。そこで、対象を認識し得るものは、認識方法に自ら示現する心に最も近いもの、即ち心そのものであらねばならぬ。

物質の客観性

物質は客観性を持つてゐるために、絶対性を持つてゐるやうに考へられるが、客観性を實在性であると考へることは出来ない。客観は存在はしてゐる。しかしそれを宇宙の本質であると考へることは出来難い。

存在のみが宇宙の本質であると考へるには、宇宙には物質の外に存在してゐると考へられるものがあまり多過ぎる。

空間的に擴がる物質の外に、時間的に擴がる生命、力、變化、生長、淘汰、法則、目的などが存在する。そして、存在を意識するものは生命以外にない。存在の持続性も生命の中に出現する。それは記憶を通してである。否、物質の存在そのものが心の世界を一旦通過した物質であること、を否むことが出来ようか？

物の存在は心の制限を一旦受けた存在である。心が存在するが故に、物が存在する如く見えるとも考へられる。

物の副性

物が今日われわれに啓示するものは、單なる空虚な存在でなくて、物が力の變化に従つて變形

し、法則によつて支配せられ、合目的性の爲に從的立場に立ち、淘汰せられ、進化せられ、心の世界にまで連絡を保つて躍進するといふ事實である。

かういふ物の世界の變化性は、物だけが自在性を持つ實體であるといふ考へをわれわれから取り除く。

存在といふこと

存在といふことは客観性といふことだけではあり得ない。存在といふことは、結局價值といふことを離れては考へられないのだ。價值を離れた存在は零の内容しか持たない。價值と存在を併合したものが、價值創造によつて存在をも可能となし得る心の世界の肯定である。

心が宇宙の實體であると考へることによつて、われわれは、客観性の物質を考へる際にすら、無理のない世界に到達し得るのである。

クリスマス・カロル

雪が降る！ 眞白い雪が降る！ 野山に、河に、雪が降る！ 醜い荒地はみな蔽はれた。風が吹く、寒い冷たい北風が！ 魂の髓まで凍つてしまふ。蛙も蛇も穴の底に潜り、梢の葉もみな落ちてしまった。小鳥も餌をあさるために雪の底をほじくる。

われ等も飢ゑた。われ等は震へてゐる。長い夜が続き、夜寒にわれ等の胸が凍る。おお、魂よ、魂よ！ おまへの冬至はいつ明けるのか？

花は散り、葉はしほみ、梢は烈風に打ち折られ、おまへの上に太陽の昇らぬ日も長い。おまへは飢ゑ、おまへは傷つき、打ち続く愛の飢饉に魂は骨と皮になつてしまった。魂の結氷にロシアは嘆き、北歐は悲しむ。

ああ山東から苦力が流れ出てくる！ 五十萬、七十萬！ 打ち続く戦禍に、捨てられた野犬のやうに、この柔和な國民は五百里の道を跣足で北に流れて行く。赤ん坊を背負ひ、堅パンを片手にし、家財一切を片手に運ぶ。ああ、それは山東の苦力の姿ではなくて、私の魂の姿ではない

か？

魂よ、おまへはどこへ行くか？ 迷ひ出た魂よ、どこへ行く？ 北に、北に、結氷に閉ざされ、吹雪に阻まれた黒龍江へか？ ああ、朝日は昇らぬか？ 結氷は解けぬか？ 神よ、櫓を持つて彼等を迎へにやつて下さい。このさすらひの民のために！

曙の明星が光つた日に東方の博士は沙漠を西にユダヤにたどり着いた。彼等は救主を王宮に探した。しかしそこには新しい「救」が発見出来なかつた。救はベテレヘムの馬小屋の飼馬桶の中に横はつてゐた。その日にも地べたに寝るものの中に至上の光榮が秘められてゐた。光明は黒土に接吻し、彷徨の旅に、脱がざる檻樓に、神の恩寵が啓示せられた。世界の難む日、神もまた難み給ふ！ 屈するな、飢ゑた靈よ！ おまへの彷徨におまへの兩足が血に染まつても、大能の神はまたおまへの足に繙帯をして下さる。

おお、奉天城外寒風の吹きすさむ朝、私は雪の中に遺棄せられた嬰兒の屍を指差された！ 飢ゑたわれ等の同胞が遂に嬰兒を雪の中に捨てたのであつた。神よ、神よ、東洋のベテレヘムの星は何處に昇るのですか？

長春にアヘン吸飲者の凍死體が山の如く積まれる。二百、三百！ ここでも人の子は傷ついてゐます。ああ、ベテレヘムの曙よ、おまへは何ゆゑもう少し早く長春の黎明を呼び醒まささないのか？

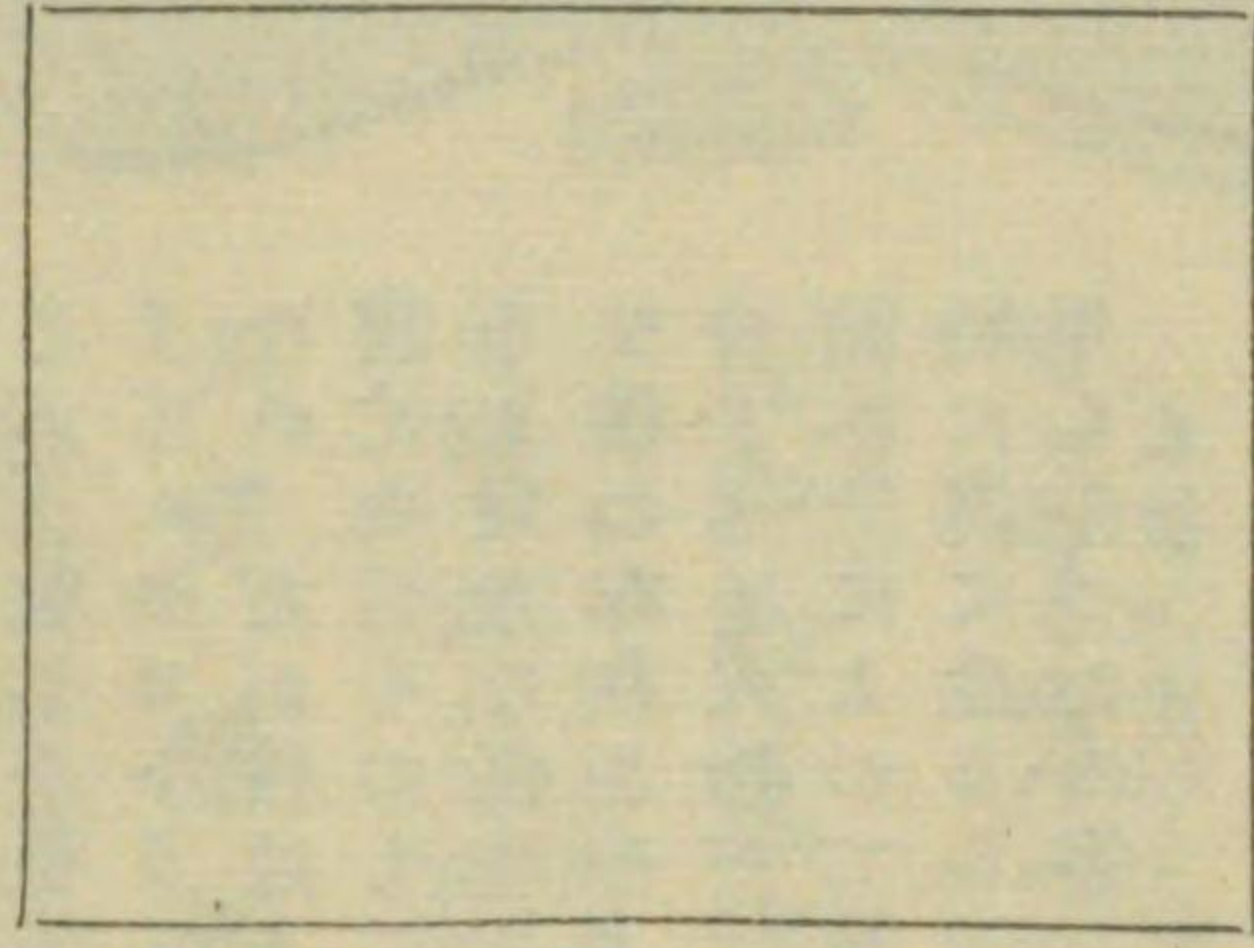
鳴れよ、クリスマスの曙の鐘！ 響けよ、サンタクロースの桶曳く馬の鈴！ 無産者の家の煙突には煙もあまり立つてゐないから、サンタクロースも煙突から這入つて來易いであらう。忘れないでくれ、たとへおまへが幼兒のためには玩具を忘れることがあつても、大人のためにパンの一片を煙突の上から投げ込むことを！

冬が長い。冬があまりに長過ぎる。夕闇よ、早く去れよ！ 冬至よ、早く行け！ 世界の無産者が救はれるために、一刻も早く、ベテレヘムの星よ、馬小屋の上に輝け！

東は白む。黄金色のオーロラは輝く。仰ぎ見よ、さすらひの旅に泣く飢民の群よ！ おまへの上に星が輝くではないか！ 徹宵羊を守る牧者の群よ、急げ！ 馬小屋の飼馬桶の中に「救主」を探せ！ 愛と忍従と勞役の馬小屋に、人類の「救」は發見せられるのだ。人類の魂の朽ちた日に、救は却つて動物の小屋に探されねばならない。確信せよ！ 吹雪の後に空は晴れる。黎明だ、黎明だ！ 鐘は鳴る、鈴は響く！ 悲しめるものに再生の約束が成就する。鶏が鳴いてゐる。天の使が歌つてゐる。星は瞬き、愛は甦る。大工イエスは馬小屋に生れた。彼は建て、彼は救ふ。彼に神の種が宿り、彼は神の如く魂を抱擁する。彼の温い胸にわれ等は冬至の寒風を忘れる。ああ、クリスマス！ クリスマス！ 寒風に嘯いて、私は今日も愛と魂の誕生を祝福しよう。

黎明を呼び醒ませ

初刷二千五百部



昭和十二年一月十五日印刷
昭和十二年一月二十日發行

定價一圓五十錢

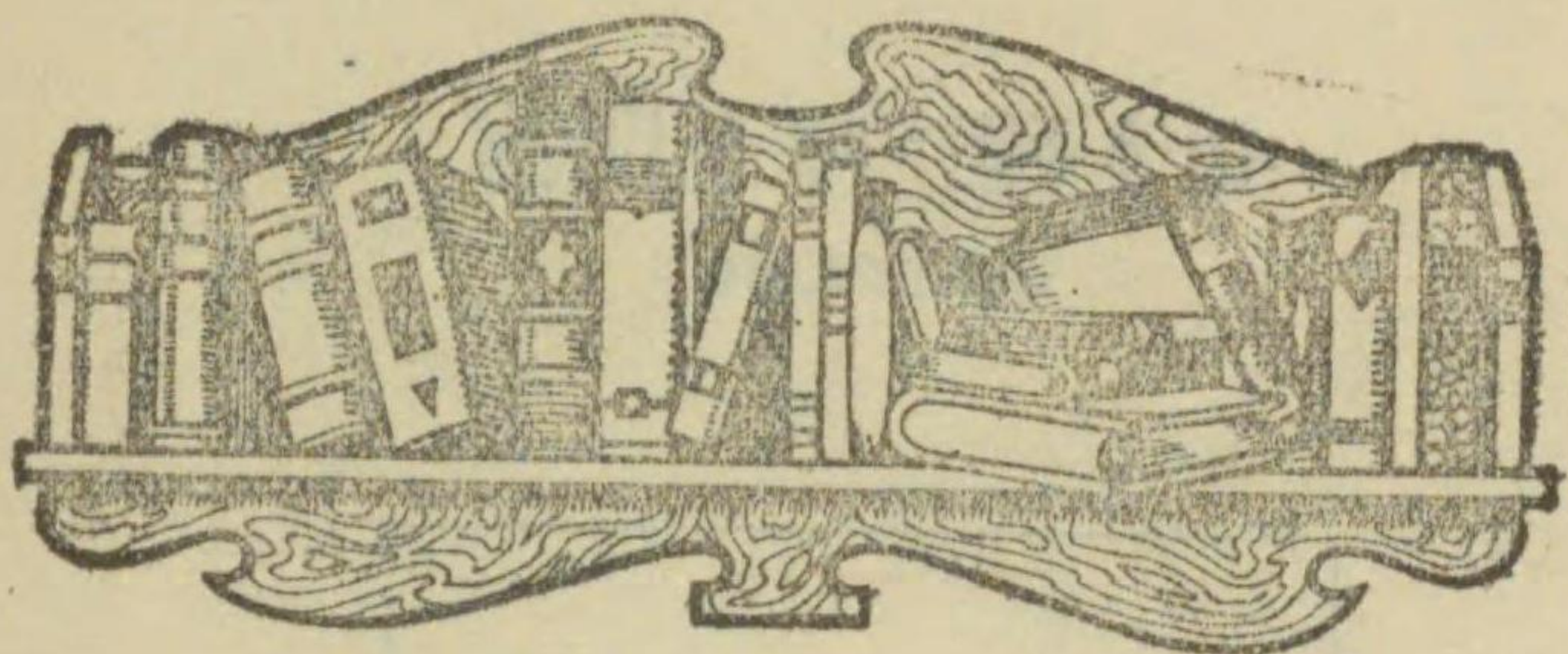
著者 賀川 豊彦

刊行者 東京市麹町區三番町一
長谷川 巳之吉

刊行所 東京市麹町區三番町一
第一書房

電話九段三三四四
振替東京六四二二三

東京市神田區西神田一ノ四
印刷者 松村 保



賀川 豊彦 人生讀本

春夏秋冬

四六判四五〇頁
定價一圓五十錢

最近のアメリカ雑誌『クリスチャン・センチュリー』は賀川豊彦氏を評して「世界を精神的基礎の上に再建するために現代に現れたるその人」と書いてゐるが、彼が全世界的使命をになふ人なることは確かである。しかし、彼はムソリーニやヒトラーのやうな英雄でもなく、ゴルギーやショウのやうな天才でもない。だが彼は人類の實踐者として世界無類の人物だ。社會運動家として彼の繁忙生活そのものが、神に酔へる詩人の生活である。病身の彼が如何にしてかくも巨大な任務を果し得るのであらうか。彼の存在そのものが現代の奇蹟だ。又彼の存在こそ、人類の希望であり、力である。しかし彼こそ、日本が世界に誇るべき人物だ。我々は彼を正しく認識する必要がある。ゆえに今この『人生讀本』によつて彼の人生觀の根本に觸れることの出来るのを喜ぶと共に、私は特に眞に生きる道を知りたいと願ふ人々、深い愛を求めてゐる青年諸君が何よりも先づこの書を熟讀されることを切におすすめる。(大島豊氏評)

賀川 豊彦 宗教讀本

近刊

賀川 豊彦 長篇小説 颯風は呼吸する

近刊

賀川 豊彦 短篇集 荒野の呼ぶ聲

近刊

佐野 勝也 文學博士 使徒パウロの神秘主義

菊判三七〇頁
定價二圓五十錢

著者の學位論文に大増補を加へた堂々六百有餘枚畢生の大著述。此の劃期的な研究に依つてパウロは、ここに初めて眞の姿を現はし、甦つたと云へよう。

佐野 勝也 文學博士 イエスの宗教とパウロの信仰

四六判三一三頁
定價一圓五十錢

本書に依つて、永遠の墓に葬られてゐたイエスとパウロは、再び潑刺たる生命を得て現代に復活した。親しい友としてのイエスとパウロに面接し得よう。

佐野 勝也 文學博士 永遠への思慕

四六判二三〇頁
定價一圓五十錢

ヨーロッパ巡遊の印象記を經とし、人生、宗教、學藝に關する感想を緯として織り成した錦繡のごとき學苑隨筆。睿智と心情との快文字、近來の名著。

大島 豊 著 シュライエルの信仰論

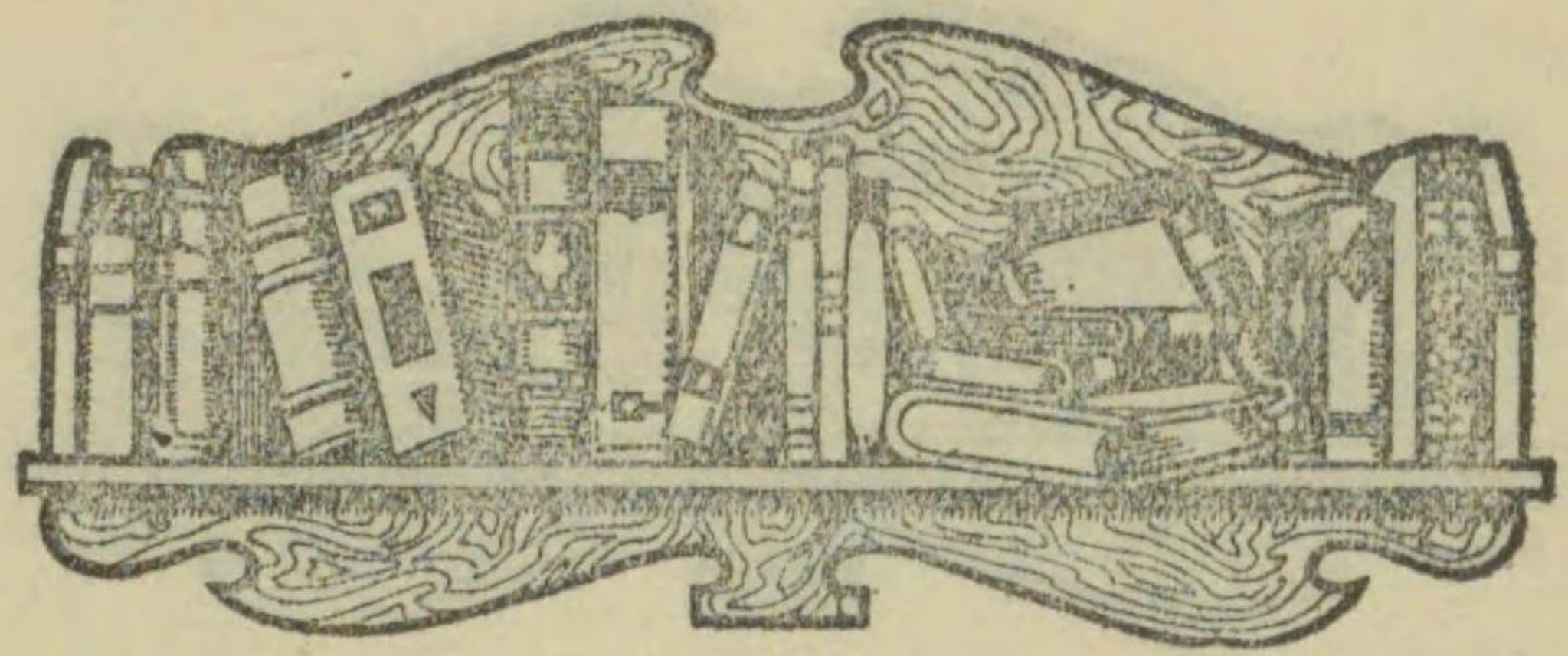
菊判三〇〇頁
定價一圓五十錢

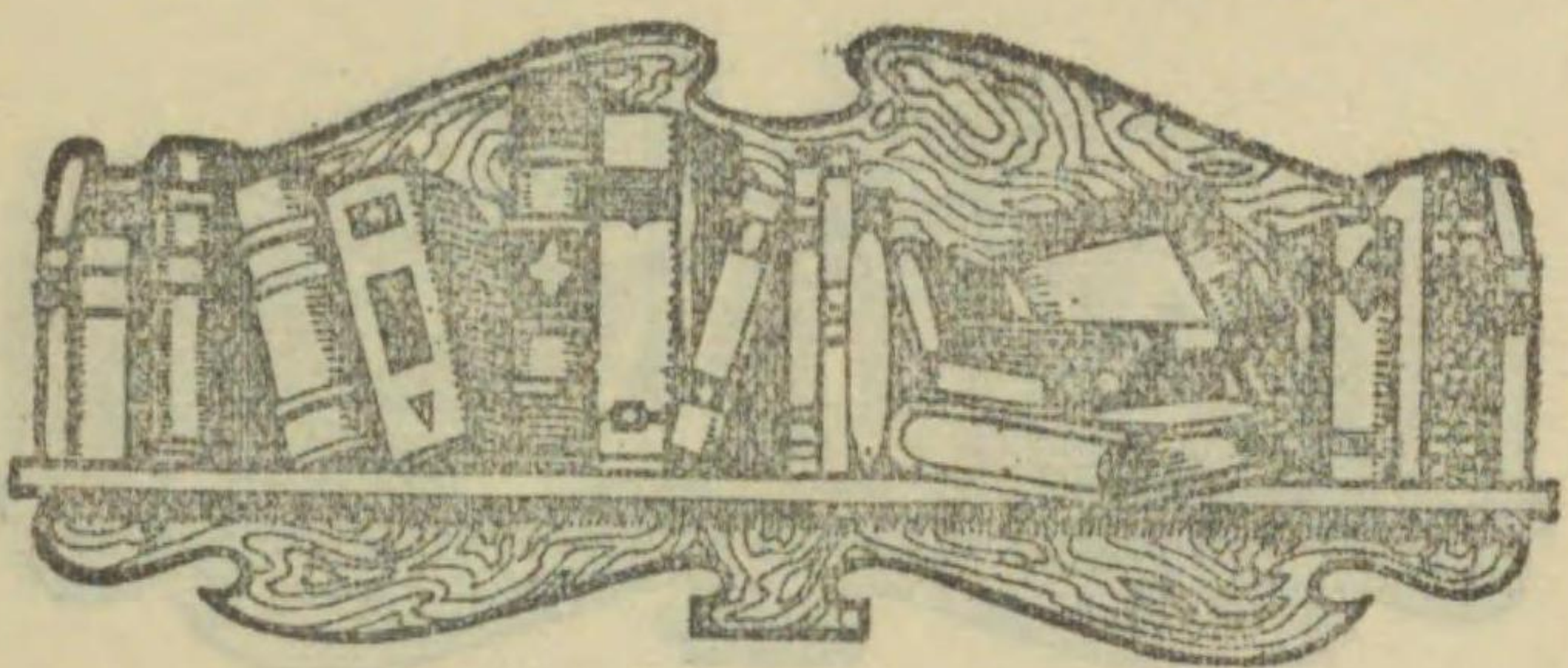
日本の基督教界はこの書のもつ明確精緻なる組織と、著者の批判的見地により正に宗教改革の礎石を役ぜられたものといふべく、蓋し近來の快著である。

陶山 務 譯 シュライエルの獨り想ふ

四六判二五二頁
定價一圓

プロテスタント教會の偉人、神學者で實際家でもあつたシュライエルマハルの百年忌紀念出版。之は獨語録又は冥想録で、道德思想の根本を究めたものだ。





ファイヒテ
陶山 務譯 **懷疑・知識・信仰** 四六判三二五頁 定價一圓五十錢

ロマン主義の先驅者ファイヒテの深遠なる哲學が最も具體化されたものであつて、切實な人生問題に對して根本的解決を與へるべく書かれた解決書である。

宮崎安右衛門著 **信仰生活の書** 四六判四一二頁 定價一圓五十錢

本書は、嘗て「乞食桃水」を著して、氏一流の快筆をうたはれた宮崎氏の隨筆集である。これは赤裸な求道生活の手記であり、眞摯なる信仰生活の記録だ。

増谷文雄著 **宗教的生活者** 四六判四四三頁 定價一圓五十錢

佛教も基督教も具體的に言行の上に現れてこそ人を動かす力となる。眞に宗教を生きる、師であり、友である二十餘人のこの宗教的生活者を見よ。

高神覺昇著 **眞理を歩む** 四六判四〇二頁 定價一圓五十錢

佛教を語りつつ、道を修めつつ、眞剣に人生を歩まれる高神覺昇師の多年の人生記録とも稱さるべき、眞理の光りに満ち溢れた靜澄にして嚴肅な隨筆集。

木村善之著 **人間不滅** 四六判四一二頁 定價一圓五十錢

著者最初の隨筆集で、文學、宗教、教育、史傳に關するもののみを集めたもの。「野人一茶」、「芭蕉とことごとく」其他、いづれも純情高雅な佳品のみ。

寺田彌吉著 **親鸞聖語讀本** 四六判五七〇頁 定價一圓八十錢

本書は、親鸞聖人の教へを全面に互つて、披挿ならぬ聖語百四十を拾ひ、或ひは隨筆風に、或は小説風に、戲曲的に、興趣の湧く解説が加へられた快著だ。

稻葉昌丸編 定本 **清澤滿之文集** 四六判五五〇頁 定價一圓八十錢

これは一卷の金字塔、明治の親鸞、清澤滿之先生の全生命を餘すところなく傳へ、萬人の心を打つ、高き信念と深き修道の聖典として定本の名に背かず。

山田靈林著 **坐禪の書** 四六判二二〇頁 定價一圓二十錢

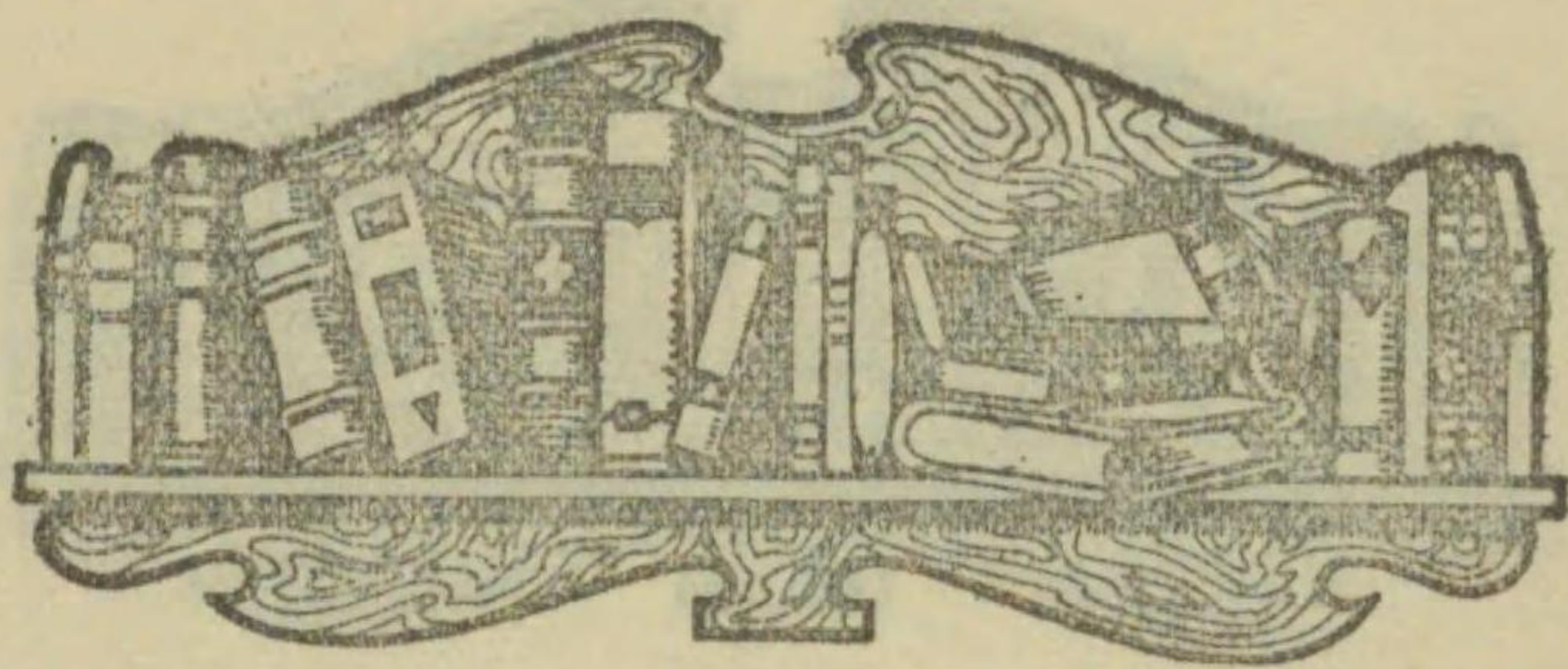
純粹な形式と無限な内容を説いた最も新しい坐禪の書。坐禪に依て人生の光を瞻仰し現實生活の眞義に徹せんとする者への無二の道標、最高の福音書。

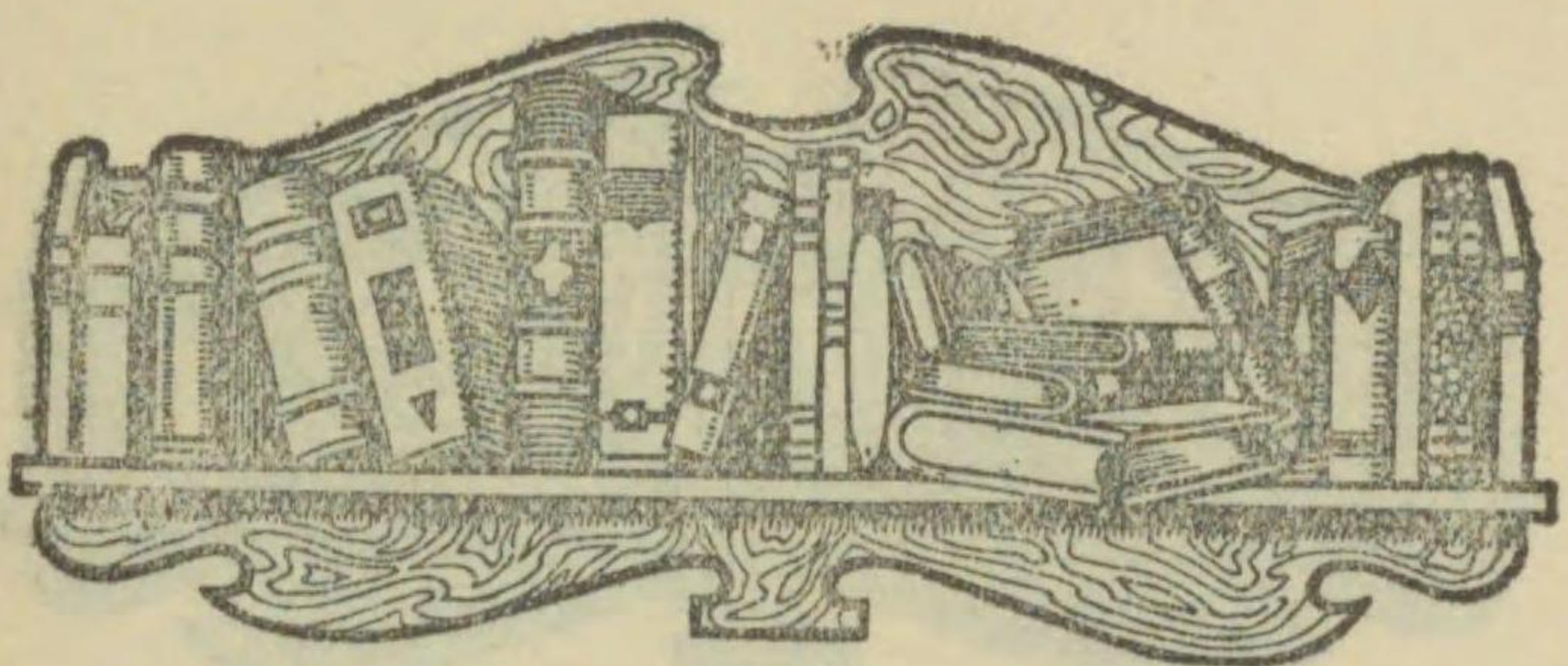
山田靈林著 **禪學讀本** 四六判三二〇頁 定價一圓五十錢

著者自らの信と行との體驗に基き、平易明快に禪の妙味を傳へる禪學の最もよき手引書であり、卷末に「坐禪實修法」を添えて入門者の便に資してゐる。

山田靈林著 **禪生活十二ヶ月** 四六頁三二〇頁 定價一圓五十錢

禪の精神を堅くその身に帶して現實に直面する山田氏の體驗の記録、世相の觀察、隨想の十二ヶ月である。附録に「自己を練りあげる四ヶ條」を添ふ。





夏目漱石文學讀本

春夏の巻 四六判各五〇〇頁
秋冬の巻 定價各一圓五十錢
全著作に涉つて悉くそのエッセンスを採つた漱石文學の簡便な名所案内。多
彩なる文豪の生面のみづみづしさに、今更新しき漱石の出現かと瞠目される。

正岡子規文學讀本

春夏の巻 四六判各五〇〇頁
秋冬の巻 定價各一圓五十錢
明治の文壇に陸離たる光芒を以て君臨する英雄兒、正岡子規の全著作の精粹
は悉くこの二巻に集る。編纂者河東碧梧桐氏は子規の最も良き理解者である。

島崎藤村文學讀本

春夏の巻 四六判各三五〇頁
秋冬の巻 定價各一圓五十錢
春夏秋冬に分けた編纂によつて、日本の季節のうつろひが、この藤村の文字
を通して、一層強く、一層鮮かに讀者の心に印象づけられる『文學讀本』だ。

菊池寛文學讀本

春夏の巻 四六判各五〇〇頁
秋冬の巻 定價各一圓五十錢
多面多様な大作家、菊池寛氏の偉大なる人格と識見とが一字一句の隅々に
反映してゐて、これは又得がたき『人生讀本』であり、『社會讀本』でもある。

吉田絃二郎文學讀本

春夏の巻 四六判各五〇〇頁
秋冬の巻 定價各一圓五十錢
高き思索者であり、清き殉情の作家である吉田絃二郎氏の珠玉の文字、滋味
溢る『文學讀本』。氏自ら感激と追憶の中に一篇毎に註書を加へられた。

吉田絃二郎 人生讀本

春夏秋冬 近 刊
これは茫漠たる人生の旅をゆく人々の、心の渴きを癒すために、氏自ら編ま
れたる四季隨想の泉。全巻悉く金玉の文字に溢る、全感想集中の一大珠玉篇。

佐藤春夫文學讀本

秋冬の巻 四六判四〇〇頁
春夏の巻近刊 定價一圓五十錢
詩人にして作家であり、その博識と洞察に於て他の追従を許さぬ佐藤春夫氏
の『文學讀本』。氏自ら全二巻に編纂され、全著作は一望の中に眺められる。

横光利一文學讀本

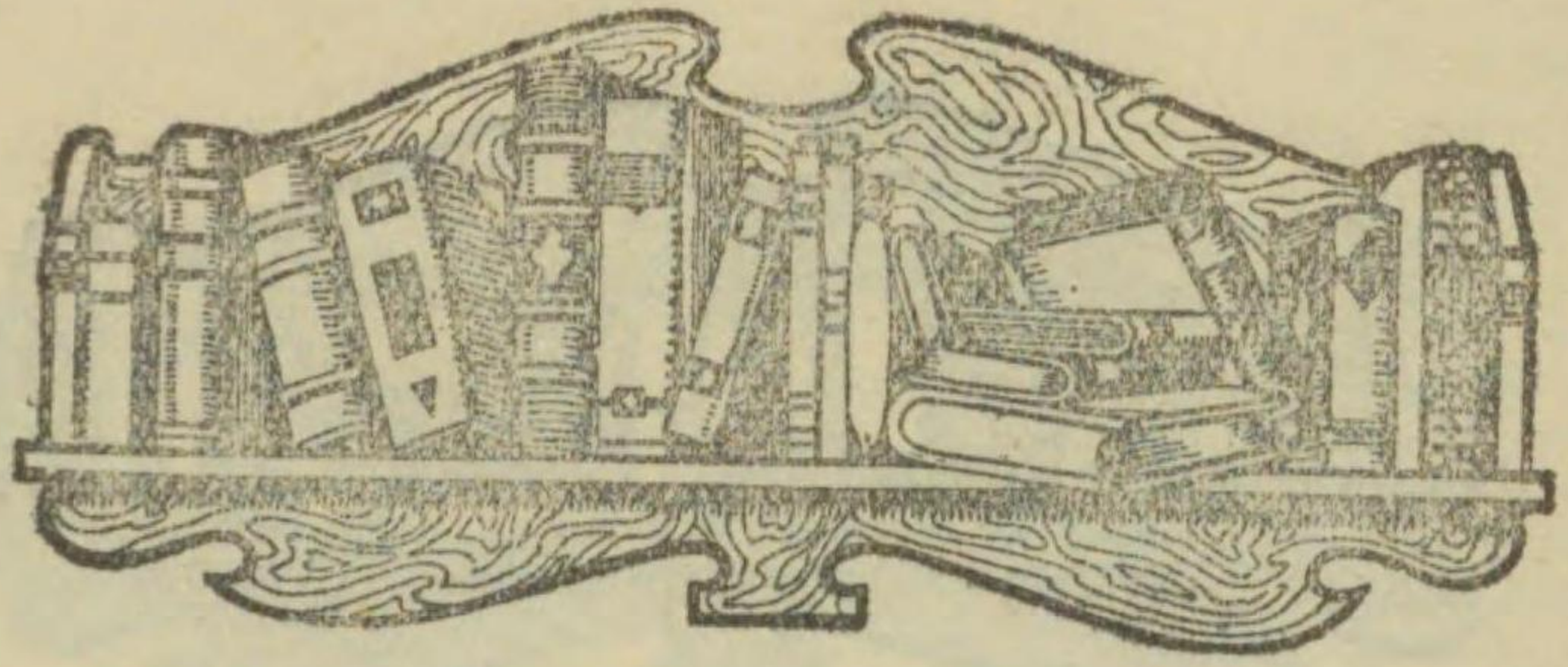
春夏の巻 近 刊
秋冬の巻
横光利一氏の數多い著作より、その全貌を季節に分けて餘すなく收めたる文
學讀本。我文壇に燦然と輝く氏の偉大なる業績のエッセンスの一大集成である。

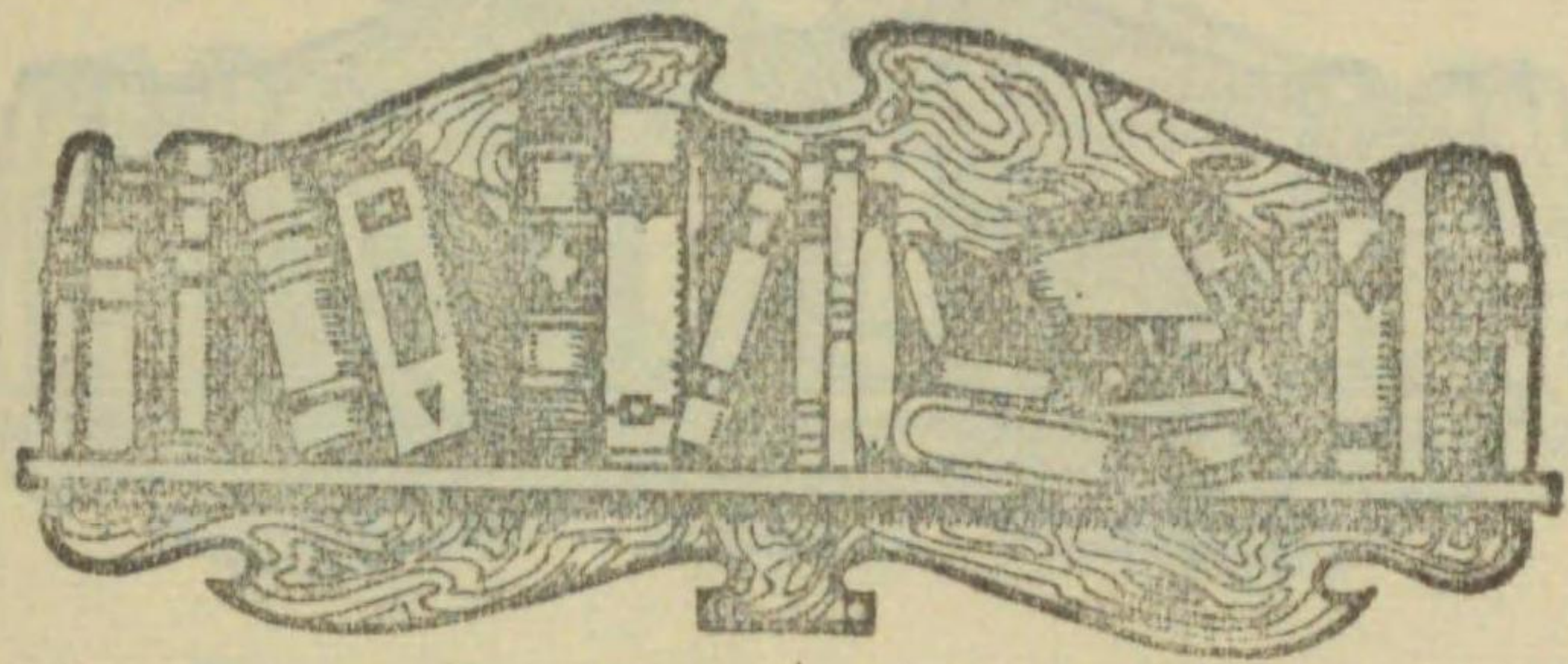
小泉八雲文章讀本

春夏の巻 近 刊
秋冬の巻
小泉八雲先生の遺された偉大なる作品は、既に歴大なる全集として燦然と輝
いてゐるが、これはそのエッセンスをとつて季節に纏められた文章讀本だ。

山本有三 人生讀本

春夏秋冬 四六判四三〇頁
定價一圓五十錢
山本有三氏の全著作の中から人生に關する佳篇のみを抜萃し、季節に配列せ
る『人生讀本』。誠實なるヒューマニスト、氏の面目躍如たるものがある。





法學博士
下村海南著 人口一億

四六判五二六頁
定價一圓八十錢

我國新聞界に飛躍せられ、また独自の隨筆境を行く著者が、折にふれて雜誌等のために執筆された最近の評論隨筆をことごとく一巻にあつめたものである。

山本笑月著 明治世相百話

新四六判三八五頁
定價一圓五十錢

懐しき追想の世紀、我等の生きた歴史、明治。經妙洒脫の名文をうたはれ、好評を博した『東京朝日』連載、「趣味の手帖」の筆者、樂山庵の正體はこれだ。

野口米次郎著 印度は語る

四六判二九〇頁
定價一圓五十錢

我等の詩人、ヨネ。ノグチが佛陀の國、熱き太陽の國印度に拾へる香り高きいへづとの數々、多數の珍らしき寫眞を添へし印度五千哩の大旅行記である。

運學博士
大島正滿著 タイヤルは招く

四六倍判一三六頁
定價一圓五十錢

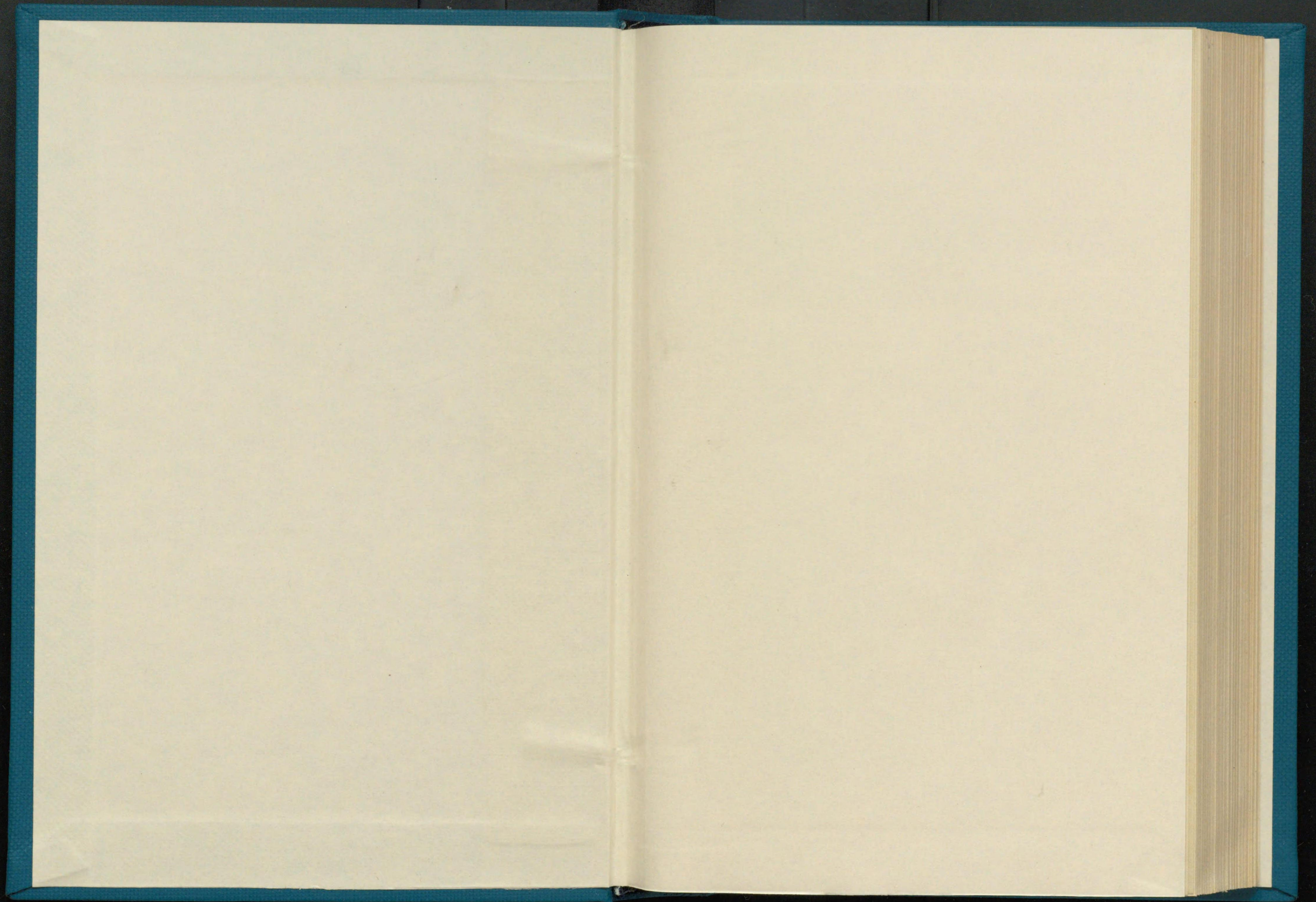
學界多年の謎を解くべく、臺灣の蕃地深く突き進む學術探險隊、その長途の大旅行より持ち歸つた得難きカメラと記録。文部省推薦を賜つた好著である。

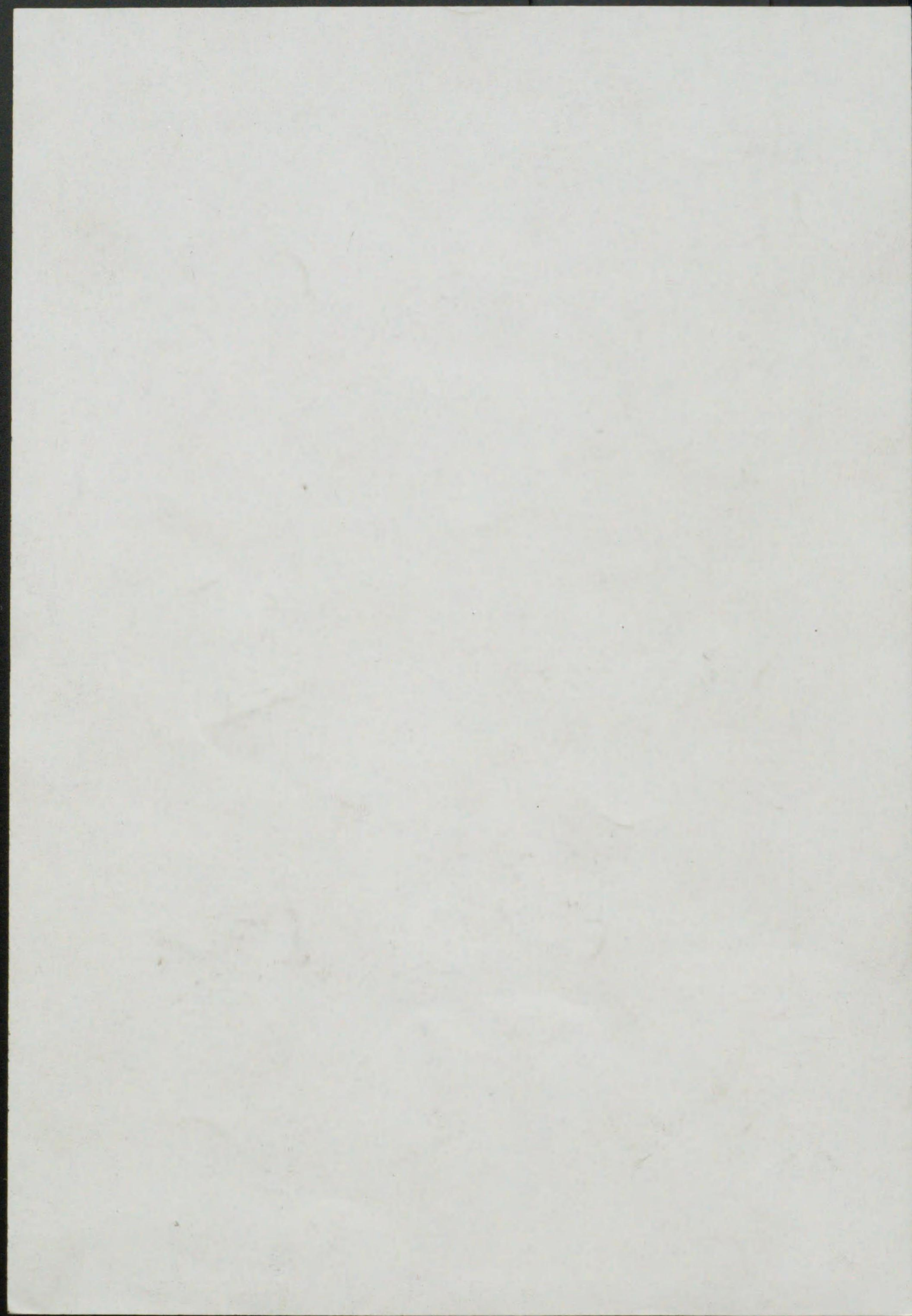
前特命全權公使
堀口九萬一著 世界と世界人

四六判三七〇頁
定價一圓五十錢

『游心録』『外交と文藝』以後の著者の隨筆集で、廣汎なる經驗と、深い文學的教養とより成る滋味ゆたかな文章を盛つた、近來稀にみる快著である。

H2A-30



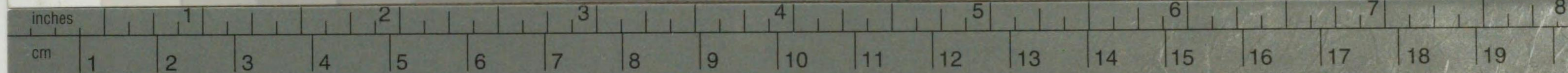


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

